JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	地域の閉鎖性を克服する地域移住クラフト起業家による内発的発展：北海道東川町及び高知県佐川町の移住起業家の事例研究
Author(s)	中島, 修
Citation	
Issue Date	2026-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	ETD
URL	https://hdl.handle.net/10119/20568
Rights	
Description	Supervisor: 白肌 邦生, 先端科学技術研究科, 博士

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

博士論文

地域の閉鎖性を克服する地域移住クラフト起業家による内発的発展：北海道東川町及び高知県佐川町の移住起業家の事例研究

中島 修

主指導教員　白肌 邦生

北陸先端科学技術大学院大学

先端科学技術専攻

［知識科学］

令和８年３月

Abstract

As migration to rural areas continues to grow, cases are emerging in which migrants are taking on the responsibility of revitalizing their local communities. This study focuses on cases in which migrant entrepreneurs have overcome community insularity that could be a barrier to business development as a part of the local institutional environment, achieved new knowledge creation in the host region, and further contributed to the endogenous development of the region.

With this background, this study aims to elucidate the process by which ″ local migrant craft entrepreneurs ″ —those who migrate from urban areas to rural areas and engage in entrepreneurial activities based on craft production utilizing local resources and their own skills—space contribute to the endogenous development of the community through knowledge creation.

The case study sites selected were Higashikawa Town, Hokkaido, and Sagawa Town, Kochi Prefecture, where the unique activities of local migrant craft entrepreneurs are present. Semi-structured interviews were conducted with 13 people active in the region (6 from Higashikawa Town and 7 from Sagawa Town) to obtain life story data about their career development, livelihood, turning points, and future plans. Participant observation and interviews with local government officials were also conducted.

As a result of life story analysis, the author was able to extract three key characteristics related to the knowledge creation of local migrant craft entrepreneurs: ″ brokering″ (the ability to connect both inside and outside the local area), ″reflexivity″ (introspective transformation through individual metacognition), and ″creativity″ (involvement in addressing local issues). Furthermore, it was shown that these three characteristics act as a catalyst for the endogenous development of local communities in three modes: the informal collective mode, the formal institutional mode, and the private personal mode, as a reflection from the local community.

This study revealed that local migrant craft entrepreneurs provide the local community with the results of new knowledge creation generated by their ″creativity,″ which is supported by both ″brokering,″ and ″reflexivity,″ forming a cycle of transformative learning between them.

Furthermore, by clarifying the transformative learning process brought about by creative knowledge of local migrant craft entrepreneurs, this study showed that they are not simply outsiders, but function as ″catalysts″ in the region's endogenous development and are ″actors of the community″ who contribute to regional revitalization.

Keywords:

rural areas, craft, migrant, entrepreneur, endogenous development, Higashikawa Town, Sakawa Town

目次

第１章　序論

1.1　研究背景と目的 1

1.2　本論文の構成 4

1.3　用語の定義 5

1.3.1　移住起業家 5

1.3.2　地域の閉鎖性 5

1.3.3　地域社会 5

1.3.4　クラフト 6

1.3.5　地域移住クラフト起業家 6

第２章　先行研究

2.1　地域社会の制度的環境としての「閉鎖性」 7

2.1.1　地縁・血縁による排他性 7

2.1.2　よそ者論の系譜 8

2.2　「クラフト」の社会的・文化的意味 9

2.2.1　クラフトの多義性と経験的価値創造 9

2.2.2　クラフトの持つ知識創造：技術の再文脈化 10

2.2.3　媒介性の理論 10

2.2.4　再帰性の理論 12

2.3　移住起業家研究 12

2.3.1　国際移住と国内移住 13

2.3.2　ライフスタイル移住・田園回帰の動向 13

2.3.3　移住と起業 14

2.3.4　起業家研究の起源 15

2.3.5　イノベーション 15

2.3.6　変化と機会 16

2.3.7　地域起業における社会関係資本 16

2.4　考察のための理論的枠組み 17

2.4.1　ミクロレベル 17

(1)　変容的学習理論：認識枠組みの変容 17

(2)　エンゲージメント理論：関係の深まりの三層構造 18
(3)　よそ者論：外部性の価値 18
2.4.2　メゾレベル 19
(1)　内発的発展論：地域の内側からの変容 19
(2)　社会関係資本論：ネットワークと信頼の資源性 20
(3)　制度理論：制度的環境との相互作用 20
2.4.3　考察のための統合的な理論的枠組み 21
第３章　研究方法
3.1　研究デザインとアプローチ：ライフストーリー分析 23
3.2　調査地域 25
3.3　調査対象としての地域移住クラフト起業家 27
3.4　調査項目 31
3.4.1　ヒアリング 31
3.4.2　ライフストーリー分析の方法 32
3.4.3　ライフストーリー分析の手順 32
第４章　事例研究1：北海道東川町
4.1　東川町の地域移住クラフト起業家 35
4.2　ライフストーリーの分析 35
4.3　ライフストーリー分析の結果 53
4.4　小結：東川町の事例の特徴 55
第５章　事例研究2：高知県佐川町
5.1　佐川町の地域移住クラフト起業家 57
5.2　ライフストーリーの分析 58
5.3　ライフストーリー分析の結果 76
5.4　小結：佐川町の事例の特徴 80
第６章　総合考察
6.1　事例分析の総括 82
6.1.1　媒介性・再帰性・創造性 82
(1)　媒介性：地域の内外をつなぐ 83
(2)　再帰性：個人の変容 83

(3)　創造性：地域課題への働きかけ 83
(4)　媒介性、再帰性、創造性の関係 84
6.1.2　「語りのパターン」（モード）分類の考察 84
(1)　「パーソナルモード」 85
(2)　「集合的モード」 85
(3)　「制度的モード」 86
(4)　三つのモードの関連性 86
(5)　地域移住クラフト起業家の特性との照応関係 86
6.2　地域移住クラフト起業家による内発的発展プロセス 88
6.3　理論的含意 90
6.4　実践的含意 91
第７章　結論
7.1　本研究の総括 92
7.2　本研究の理論的貢献・実践的貢献 93
7.3　本研究の限界 94
7.4　今後の研究展望 94
参考文献 95
閲覧 URL 99
業績リスト 101
謝辞 104

第 1 章　序論

1.1　研究背景と目的

日本の地方社会は、少子高齢化、若年層の都市流出、地域経済の停滞、伝統文化の継承困難といった複合的課題に長年直面しており、地域における生活の質の維持、その持続可能性が問われている。この状況に対し、近年は地方創生政策の一環として、都市部から地方への移住促進が積極的に展開され、都市部から地域への移住を通じて地域のサービスの担い手を増やす取り組みが注目されている。テレワークの普及やライフスタイルの多様化を背景に、地方移住は一過性の現象ではなく、社会的潮流として広がりを見せている。

森林サービス産業プロモーション共同企業体（2020）の調査によれば、20 代から 50 代の男女 3,200 人のうち約 24%が地方移住に関心を示している。そのうち 7 割以上が「柔軟な働き方が可能であれば移住を検討する」と回答している。しかし、移住者の定着については必ずしも順調ではなく、一定数の移住者が地域から離脱していることが統計的に示されている。移住者の定着状況と離脱傾向の統計的分析を見ると、近年は地方創生政策の一環として、都市部から地方への移住促進が積極的に展開されている。移住者の定着については必ずしも順調ではなく、一定数の移住者が地域から離脱していることが、複数の統計的資料から明らかになっている。

総務省統計局が公表する「住民基本台帳人口移動報告」（令和 6 年年報）によれば、2024 年における市区町村間の移動者数は約 520 万人、都道府県間の移動者数は約 252 万人である。いずれも前年から微減している（総務省，2024b）。また、国外からの転入が転出を上回ったことにより、社会増加数は約 33 万人となった。東京都が約 14 万人の社会増加を記録しており、依然として都市部への人口集中傾向が続いている。これは、地方への移住が進んでいる一方で、都市部への再流入も根強いことを示す。

地方自治体による移住定住支援事業の令和 6 年度、343 自治体対象の成果報告では、移住相談件数が平均約 79 件である。一方、実際の移住者数は平均約 29 人にとどまり、相談から移住への転換率は 1/2 である（一般社団法人自治 DX 推進協議会，2025）。さらに、定住率の測定が困難であるとする自治体が多く、測定・管理システムの導入率もわずか 3.2%に過ぎない。人的リソースの不足や情報管理の煩雑さ、効果測定の難しさが課題としてあげられており、移住者の定着状況を把握するための制度的基盤の脆弱さが浮き彫りとなっている。

他方、地域おこし協力隊の活動終了後の定住状況に関する総務省の調査（令和 6 年度）によると、直近 5 年間で任期を終了した者は 8,034 人である。そのうち、同一地域に定住した者は 5,539 人（定住率 68.9%）であった（総務省，2024a）。定住者の内訳としては、起業が 46%、就業は 34%、就農・就林が 12%を占めており、地域との関係性の構築に

ついては一定程度成功していることが示されている。しかし、約 3 割が地域を離脱している点は看過できず、任期終了後の支援体制の充実が定住促進の鍵となる。

地域別の人口動態に関する分析では、若年層（15〜39 歳）の東京圏への流入が依然として多く、特に 20 代の転入が顕著である（国立社会保障・人口問題研究所，2024）。進学や就職を主因とする都市志向が強く、地方定着は難しい状況が続いている。また、地域活性化起業人の年齢構成では、30〜49 歳が約 6 割を占める。活動分野は DX、観光、地域産品開発、移住促進と多岐にわたるが、若年層人口の減少傾向は今後も続くと予測されており、都市部との人口格差は拡大する見込みである（総務省，2024b）。

以上の統計は、地方移住は一定の成果を上げているものの、移住者の定着には多くの課題が残されていることが理解できる。

ところで地域社会の変化を生み出しているのは、制度的な施策の効果だけでなく、地域住民や移住者自身の内発的な力も当然のことながら関与していると思われる。彼らは単に制度の「利用者」なのではなく、地域の現実的課題に対して自らの資源を活かして挑戦し、その過程で他の住民と関係性や価値を地域の中で再構築していく担い手になりうる可能性を有していると推測される。地域の内発的発展を進める可能性を有する主体が、地域の中でどのような知識創造が起きているのか、という点に着目した地域研究は、まだ十分になされてはいない。

内発的発展の主体が、当該地域において新たな知識創造をおこなうためには前提として克服すべき課題がある。特に移住者にとっては、当初は地域社会との関係性がそもそも希薄であり、さらに地域の閉鎖性（慣習や伝統、歴史的・地理的風土性）の影響も受けるであろう。地域の閉鎖性は、外部から移入してきた人材（いわゆる「よそ者」）、及び彼らが持ち込む異質な価値観などを、容易には受容しない現象として現れるであろう。地域の閉鎖性の影響は、移住者が地域に根付く上で障壁となるが、本質的には既存の地域社会に根差した文化的・制度的な構造に起因している。そのため、その克服あるいは解消は、容易ではないことが理解できる。

こうした「地域の閉鎖性」を乗り越えて、地域社会と新たな関係性を構築しうる可能性を有する人材として、クラフトの技能・技術を持ち、地方に移住して生業を営む人々が存在するのではないだろうか。

したがって、本研究では、「地域移住クラフト起業家」という人材の能力を以下のように仮説的に設定した。そして調査資料の収集とその分析、さらに理論的な考察から設定した仮説の妥当性を検証し、しかるべき結論を得るプロセスをとることにした。

地域移住クラフト起業家は、木工、家具製作、陶芸、染織、革細工、といった工業的な大量生産とは異なるクラフト的生産様式に基づく自己完結的な事業を通じて、地域社会に定着する人々である。

彼らは、工業的な大量生産とは異なるクラフト的生産様式に基づき、経験を伴う技能を駆使して、地域社会において独自の価値を創出する。こうした人材は、地域に根ざした生業を通じて社会的関係性を構築し、地域の文化的・経済的再生に寄与しうる主体となる可能性がある。

また彼らは外部に開かれた資源を持ちながら、同時にその資源を活用して地域内部に関係性を築く能力を有し、地域社会の内発的発展を支える新しい担い手になりうる存在である。彼らは、地域の閉鎖性を乗り越えて地域に定着しうる可能性を持ち、さらに自己のキャリア形成と地域との相互作用を通じて、地域の内発的発展への貢献を両立させる新しい担い手になりうるのではないだろうか。

本研究の目的は、「地域移住クラフト起業家」が、移住先地域においてどのような知識創造をし、地域の内発的発展に貢献しているかを明らかにすることである。

特に地方移住して起業したクラフト人材が、自らの技能を通じて地域との関係をどのように構築したか、また、この関係構築の過程におけるクラフト人材個人の成長が地域の内発的発展にどのような影響を与えたのかという点に着目する。

この目的を達成するために、以下のリサーチクエスチョン（RQ）を設定する。

RQ：地域移住クラフト起業家は、クラフト生産技能を基盤としてどのような特性を発揮し、地域の内発的発展に影響を与えているのか？

以上を踏まえて、北海道東川町と高知県佐川町に移住した地域移住クラフト起業家を対象にしたヒアリング調査に基づき、上記のリサーチクエスチョンに対する解答を得る。

1.2　本論文の構成

第 1 章：研究目的と研究背景では、本研究の目的を述べ、この研究の背景となる事象を説明する。この研究の意義を示し、リサーチクエスチョンを設定する。

第 2 章：先行研究では、この研究に関連する先行研究を批判的に参照すべき理論的枠組みを明確にする。

第 3 章：研究方法では、研究のデザインとアプローチを提示し、調査地域と調査対象、及び調査項目を確定する。

第 4 章：事例研究 1 では、北海道東川町、第 5 章：事例研究 2 では、高知県佐川町における調査の結果を記述した。調査対象（地域移住クラフト起業家）へのインタビューで得たデータをもとにライフストーリー分析を実施した。加えて、移住者側の視点からのデータを相対化し、補完するために、各地域の行政担当者へのインタビューによって得たデータをもとに、地域を運営する側の視点から移住者の活動に対する評価を記述した。

第 6 章：総合考察では、事例研究 1・2 の結果を踏まえ、地域移住クラフト起業家の有する特性が、移住先の地域において創造する価値を明らかにする。同時に、彼らの活動が地域の内発的発展に寄与するメカニズムを示す。

第 7 章：結論では、前章までの論述によって明らかにされた内容を総括し、リサーチクエスチョンへの回答、及びこの研究の理論的含意と実務的含意を提示する。

1.3　用語の定義

1.3.1　移住起業家

本研究は、クラフトの生業を営む移住者を対象とし、その語りを通じて移住起業家の特徴を明らかにすることを目的としている。「移住起業家」という語は地域政策や実務の場面で用いられるが、学術的に確定した定義は存在していない。使用される文脈に応じて、多義的な内容を示しているのが実情である。

例えば、地域おこし協力隊や自治体による創業支援施策では、移住起業家は「地域資源を活用する創業者」、「地域経済の担い手」といった経済的役割の面から理解されてきた（桑本，2022；酒井ら，2020；土田，2020）。地域研究の場面においても「移住創業者」「地域起業家」の用語が混在し、学術的概念として定着する段階には至っていない（佐々木・福井，2019）。

本研究では、学術上の「移住起業家」の定義がいまだ確定していない状況と、使用される場面と文脈に依存して多義的な揺れがあることを前提にして、とりわけ「地域移住クラフト起業家」の概念を定義することを試みた。しかし、第 1 章では、移住起業家の概念をめぐる既存研究の現状と再定義の必要性を提示するにとどめ、具体的な定義は第 2 章において明示する。

1.3.2　地域の閉鎖性

本研究では、「地域の閉鎖性 community insularity」を「移住者の定着と関係形成を困難にする社会的・文化的構造」として定義する。「地域の閉鎖性」が存在する場合、地域社会が今まで形成してきた価値観や地縁・血縁関係の外部にある移住者や、彼らの価値観の流入を制限し、排他的な関係性を維持しようとする傾向が強くなる。こうした傾向は、地域住民にとっては秩序や安心感を支える一方、移住者にとっては孤立や参加障壁を生み、定着を困難にする要因となる。特に、クラフト人材のように新たな価値観を持ち込む移住者にとっては、関係形成の障壁となり得る。

1.3.3　地域社会

地域社会とは、広義には、居住地を中心に広がる一定範囲の空間-社会システムを意味する。具体的には、基礎自治体の範域を最大の空間領域とし、種々の共同問題を処理するシステムを持つ社会である。ここでの地域の範囲については、日常生活圏の範囲に近い区域と想定する。また地域には多義性があり、文脈によって拡大縮小するものとする（森岡，2008）。→地域社会（英）local community、地域研究（英）community research。

1.3.4　クラフト

本研究では、クラフトという用語を、「手仕事によるものづくりを基盤としつつ、個人のキャリア形成と地域社会との関係構築を媒介する創造的実践である」と定義する。「クラフト」については、多様なものづくりの実践的な場面に応じて、様々な解釈が可能であるが、一般的には伝統的な職人による手仕事を指す場合が多い。また、近代産業への批判的視点として、あるいは生業としての誇りやアイデンティティの表現としても理解されてきた。

本研究では、クラフトを単なる技術的営為にとどまらず、人間の創造的かつ関係的な実践として捉える。すなわち、クラフトとは、地域資源や文化的文脈を踏まえながら手仕事を通じて価値を創出し、社会的関係を構築する営みである。

1.3.5　地域移住クラフト起業家

本研究では、「地域移住クラフト起業家」を、都市部から地方地域へ移住し、その地域の資源と自身の技能を活用したクラフト生産をもとに起業家行動をする主体と定義する。

彼らの特徴は、個人事業主であること。アトリエや工房をもつこと。ショップやショールームを持つこと。「もの＝感覚的な実在・対象」としての成果物を生産すること。地域資源の活用機会が多いこと。また工業的な大量生産とは異なり、経験知を伴う技能を駆使して地域社会において独自の価値を創出する主体である。

すなわち、本研究ではクラフト生産にとどまらず、事業としての継続性と市場との関係性を有する点を重視し、「起業家」として位置づけた。

さらに、本研究では、地域移住クラフト起業家を「地域社会の閉鎖性に対して自らの専門知識・経験・技能を活かした創造的実践を積み重ねることにより、その制約を克服・解消する存在」と位置づける。

第 2 章　先行研究

本章では、地域移住クラフト起業家と地域社会との関係を解明する上で適用可能かつ有効と思われる先行研究を取り上げて検討する。

特に、地域の制度的環境に関する研究、クラフト人材の知識創造に関する研究、移住に関する研究、そしてそれらを統合して理論的に解明する枠組みに関する研究を検討する。

2.1　地域社会の制度的環境としての「閉鎖性」

地域社会の既存の制度的な環境は、移住者に対して構造的な「閉鎖性」を示す場合がある。クラフト人材が彼らの活動を通じて、地域と新たな関係性を形成し、創造的な価値を創出しようとする過程で向き合うことになる地域の「閉鎖性」について、先行研究では次のような事項が指摘されてきた。

2.1.1　地縁・血縁による排他性

地方移住の進展に伴い、移住者の地域定着と関係形成は重要な社会的課題となっている。しかし、多くの地域社会では、地縁・血縁を基盤とした人間関係や価値観が根強く存在する。これが「地域の閉鎖性」として機能することで、外部人材の受け入れを困難にしている。

本研究では、「地域の閉鎖性」を、地域社会が長年にわたり築いてきた価値観・慣習・人間関係の枠組みが、外部からの人や新しい考え方を受け入れにくくする社会的・文化的構造として定義した。特に、地域社会には地縁・血縁を基盤とした人間関係や価値観が根強く存在する。それらが地域の結束や秩序維持の基盤として機能する一方で、外部との接触や多様性の受容を妨げる構造的な障壁となっていることが指摘されている（田中，2021；河原・杉万，2003；田島，2017；神田，1992；坂田，2008）。

これらの研究では、地域における地縁・血縁の維持は、安定性や文化的持続性に寄与する側面も持つことが指摘されている。地縁・血縁を一面的に否定するのではなく、その機能と限界を見極めて、それらがもたらす排他性や閉鎖性を緩和しつつ、地域のアイデンティティを尊重することが重要であるとしている。

2.1.2　よそ者論の系譜

地域社会への新たな参入者、移住者は「よそ者」という存在であるが、本研究では、彼らは単なる外部者ではなく、社会的・文化的秩序の境界に位置する主体であるとする仮説的な立場にたつ。したがって、本節では、ジンメル、シュッツ、徳田、敷田によるよそ者論を批判的に検討し、移住者（とりわけ移住起業家）が地域社会において果たしうる役割を確認する。

ジンメル (1994) は、よそ者を「集団内にとどまりつつも完全には同化されない存在」として位置づけ、社会的距離と媒介性の両義性を強調した。ジンメルの議論は、よそ者が外部から新たな価値や知識を持ち込むことで、集団にとって不可欠な機能を果たす可能性を示している。

シュッツ（1991）は、よそ者が地域社会に統合される過程を「解釈的理解」のプロセスとして捉え、文化的秩序への適応が相互の再構成によって成り立つことを示した。これは、移住起業家が地域の慣習に順応しながらも、自らの外部性を保持し、地域に変化をもたらす可能性を理論的に裏付けるものである。

徳田（2005）は、「移動者と定住者のあいだ」という枠組みを提示し、よそ者を境界的存在として理論化した。彼の議論は、移住起業家のような主体が地域との関係性を動的に構築していく過程を捉えるうえで有効である。

敷田 (2009) は、よそ者が地域社会にもたらす影響を「よそ者効果」として体系化し、技術・知識の移入、創造性の惹起、地域知の表出、組織変容の促進、問題提起の契機といった具体的な効果を提示している。

これらの理論は、共通して「よそ者は排除されるべき異質な存在ではなく、社会的秩序の再構成を促す媒介である」という視座を提供しており、移住起業家の媒介的役割を理解するうえで理論的基盤となる。

2.2　「クラフト生産」の社会的・文化的意味

本研究では前章で、クラフトを「手仕事によるものづくりを基盤としつつ、個人のキャリア形成と地域社会との関係構築を媒介する創造的実践である」と定義した。

本節では、クラフトの社会的・文化的意味についての研究を整理し、移住起業家がクラフトを通じて地域社会との関係を構築するプロセスについて、どのような研究がなされてきたかを検討する。とりわけ、技術知識の発揮による普及と知識創造の再文脈化、あるいは価値化のプロセスを探る研究に焦点を当て、クラフトが地域社会の内発的発展にどのように関わるかを検討する。

2.2.1　クラフトの多義性と経験的価値創造

「クラフト」という語は、広辞苑において「手仕事による製作、手工業、工芸」と定義されており、日本語では主に職人による手作業のものづくりを指す言葉として理解されている。この定義は、クラフトが単なる物理的作業ではなく、創造性（creativity）を含む行為であることを示唆している。

語源的には、クラフト（craft）はドイツ語の「力（kraft）」に由来し、古英語では「精妙で不思議なことをなす力」という意味を持っていた（小野塚，2001）。近代英語では「技能」「技巧」「特殊な技術」「職業」「熟練職業」の文脈によって多様な意味を持つことが確認されている（小野塚，2001）。このような語義の広がりは、クラフトが技術的行為にとどまらず、社会的・文化的・歴史的な意味を帯びた実践であることを示している。

例えば、ピオリ・セーブル（1993）は、大量生産に対するオルタナティブとして「クラフト生産」を提示し、経験的価値創造の手段として位置づけた。

また、セネット（2016）は「作ることは考えることである」と述べ、クラフトを他者との関係性を構築する経験的技術として捉えている。これは、クラフトが倫理的・社会的実践であることを強調するものであり、技術知識の身体性と社会性を理解する上で重要な視座を提供する。

さらに、ミンツバーグ（2024）は、クラフトを「実務的な関与重視の性格が強く、経験を土台としている」と位置づけて、理論や分析よりも実践と経験に根ざした知識体系として捉えている。

歴史的には、クラフトは思想的運動としても展開されてきた（ドロステ，2002）。ドイツ工作連盟、バウハウス、イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動、日本の民藝運動は、近代化や工業化によって失われつつあった手仕事の価値を再評価した。これらは、文化的・倫理的実践としてのクラフトを復権させようとする試みであった（日本民藝協会ウェブサイト）。

以上のようにクラフトという概念は、技能・職業・産業・社会実践・思想運動といった領域において多義的ではあるが、共通して見られるのは、クラフトが経験に根ざした実践であるという点である。また、社会的関係性や価値の再構成に深く関与するという特徴も持つ。

2.2.2　クラフトの持つ知識創造：技術の再文脈化

本研究では、クラフトを単なる技能や技術の集合ではなく、地域社会との関係性の中で意味と価値が変容する知識体系であると位置づけている。本節では、移住起業家の活動を通じてクラフトが再文脈化されるプロセスを知るため、知識創造に関する主要な先行研究を批判的に検討する。そして、「技術の再文脈化」という視点からクラフトの発揮・普及・価値化の枠組みを再構築する。なお本研究における「技術の再文脈化」とは、「ある技術がもともと持っていた歴史的・文化的・社会的背景から切り離され、別の文脈の中で新たな意味や価値を持つように再構成されるプロセス」である。

言い換えれば、地域社会の制度的・文化的資源を再解釈し、既存の枠組みを変容させて新しい価値を生み出す特性、つまり創造性（creativity）である。

野中・竹内（1996）の SECI モデルは、暗黙知と形式知の相互変換による知識創造プロセスを説明する枠組みとして有効である。しかし、同モデルは企業内の知識創造に焦点を当てており、地域社会や文化的背景を含む文脈の多様性には十分対応していない。

遠山（2008）の「場の理論」は、知識創造の場を「対話と実践という人間の相互作用」として捉え、クラフトの知が生まれる文脈や関係性を理解する上で有効である。移住起業家による教育的実践や協働の場の設計に応用可能であるが、価値の政治性や文化的摩擦といった葛藤への理論的対応は不十分である。

野中・平田・遠山（2010）の「流れとしての経営」やフロネシスの重視は、クラフトの実践知や価値観の共有に通じる理論を提示している。移住起業家が倫理的判断や文脈的理解をもって知識を橋渡しする媒介者として機能する点は評価できるが、地域社会における非営利的・文化的価値の創造には十分な焦点が当てられていない。

本研究では、日本国内のクラフト産業を対象としており、その性質上、分析の焦点が地域社会に強く依拠するローカルな事例である。このため、日本国内の事例に基づく議論が中心となる。

2.2.3　媒介性の理論

「媒介性（brokering）」は、組織論やネットワーク理論において、異質なアクター間を結びつける機能として議論されてきた。

英語文献では、主に構造的視点と行動的視点が提示されている。構造的視点では、ネットワークにおける「構造的空隙」を埋めるブローカーの位置が強調される（Kwon et al., 2020)。行動的視点では、Obstfeld (2005) が提唱した結びつける第三者（tertius iungens）と、利益を得る第三者（tertius gaudens）の概念が代表的である。

また、Halevy et al. (2019) は、媒介性を「Changing Others' Relationships (COR)」という枠組みで整理し、第三者介入の多様な形態を提示している。

地域研究の文脈においては、Foley et al. (2025) が、農村ビジネスコミュニティにおけるブローカーの役割を、「bonding・bridging・linking」として概念分類している。これは、社会資本の観点からのものである。

Choudhury & Marinoni (2025) は、移住者と地域住民の協働による社会的価値創出を媒介性の成果として示している。さらに、知識仲介（knowledge brokering）に関する研究（MacKillop et al., 2023）では、政策ネットワークや地域イノベーションにおける媒介者の重要性を指摘している。

一方、日本では、鶴見和子・川田侃、小田切徳美や宮本憲一による地方移住・地域イノベーション研究において、媒介性は「地域資源の結合」「信頼構築」「文化的・制度的背景を踏まえた関係形成」と理解されている。

宮本（2020）は、地域政策における自治体の役割を強調し、制度と地域資源を結びつける媒介者として自治体や地域リーダーをあげている。しかし、本研究は個人レベルでの媒介性にも焦点を当てて、関係性の変化や学習過程を分析する立場をとっている。

小田切（2018）は離島における移住者の仕事づくりを四類型で整理し、地域資源と外部資源を結びつけるプロセスを詳細に検討している。この過程で移住者が信頼構築、情報翻訳、関係調整を行い、媒介性の核心的機能を担うとされているが、概念化については明示的ではない。

鶴見・川田（1989）は内発的発展論の視座から媒介性を理論化し、地域の主体性を尊重しつつ外部との関係を再構築する重要性を指摘した。しかし、媒介性を担う主体を、人や組織に限定しており、制度的構造やネットワークへの視野が不足している。

本研究では、媒介性を、単なるネットワークの仲介として捉えるのではなく、制度的環境との相互作用や関係性の質的変化に着目して理解する。具体的には、媒介性とは、地域移住クラフト起業家が、自らの能力を駆使して地域社会の価値観や制度を再構築するプロセスを分析する過程で顕在化する特性であると考える。既存研究の多くが「構造的・機能的」な媒介性と理解しているのに対し、本研究では媒介性をネットワーク上の位置や行動パターンの性格という理解にとどめていない。さらに、制度と文化の文脈における変容的学習の一つとして位置づけている。

2.2.4　再帰性の理論

「再帰性（reflexivity)」という概念は、社会学や社会科学において、近代社会の特徴を説明する中核概念として発展してきた。一般に再帰性とは、行為者や制度が自己の前提や行為を反省的に参照し、自らを修正・再構成する性質を指す。この概念は、近代化の進展に伴い、伝統的秩序が失効し、個人や制度が自己決定を強く要求される状況を説明するために理論化された（ギデンズ, 1993)。しかし、ギデンズの議論では、再帰性を近代社会の普遍的特徴として捉える一方で、文化的・地域的差異や非西欧社会への適用可能性は十分に検討されていない。

ベックら（1997）は、近代化の副作用として生じるリスクに対して、社会が自己対峙する過程を強調し、再帰性を「リスクの再帰的認識」として位置づけた。しかし、リスクの認識がどのようにして具体的な制度変容に結びつくのか、また、制度変容の過程における権力関係や不平等の問題を十分に説明していない点が指摘されている（ベックら, 1997)。他方、方法論的再帰性の議論において、ブルデュー（1988）は、社会科学における客観性の限界を指摘した。この議論は主に研究者の認識論的課題に焦点を当てており、社会的実践における再帰性の動態的側面を扱うものではない。

日本における再帰性研究として、今田（2022）は、ベックの「リスク社会」論を再検討し、再帰性を「意図しない自己対決の過程」として捉えている。近代化を単なる進展ではなく、自己の前提を問い直し、制度や行為の再構成を促す循環的プロセスとして理解する。しかし、地域社会における具体的な制度変容のメカニズムや、外部アクターとの相互作用を、どのようにして再帰性の枠組みで説明するかについては明らかではない。

再帰性についての先行研究は、理論的には豊かな展開が見られるものの、多くの課題が残されている。第一に、再帰性概念は抽象度が高く、実証研究への適用が限定的であること。第二に、権力関係や不平等を含む社会的文脈を十分に考慮していないこと。第三に、地域社会における移住起業家の活動のような、特定領域のケースに対する応用はほぼ未着手である。

本研究では、「再帰性」の理論についての現段階の限界を認識したうえで、既存の地域社会へ外部から移住して起業した人材と、地域社会そのものが従来の制度や慣習を再帰的に自己認識・自己評価した、いわば「メタ認知」の内容を未来に向けてフィードバックする過程を分析する特性として適用したい。

2.3　移住起業家研究

本節では、序論で定義した「移住起業家」「地域の閉鎖性」「クラフト」を念頭に、移住研究を国際移住／国内移住、ライフスタイル移住、地域社会への包摂・排除の観点から検討する。

既存の移住研究の多くは、人口移動や就業といった外形条件に焦点を当てる傾向が強い。移住者自身が地域で営む生業を通じて地域に定着し、地域とどのような関係性を形成し価値を創出するかという生活実践の位相は、十分に検討されていない。また移住者自身が、地域で営む生業を通じて地域に定着し、地域とどのような関係性を編成し、価値を創出するかという生活実践の位相は十分に検討されていない。この空白を「クラフト」と「媒介者としての移住起業家」の枠組みで補完する必要があると考える。

2.3.1　国際移住と国内移住

移住という行為は、時代や文脈に応じて多様な意味を持つ現象である。従来の研究では国家間をまたぐ「国際移住」への関心が中心であり、特に経済格差に基づく「南から北」への移動は労働力移動の視点から分析されてきた。移住者は「移民」として扱われてきた（森，2020）。

しかし 1990 年代以降、従来型の経済的理由による移住とは異なる動きが注目されるようになった。例えば、退職後の農村移住や文化的志向に基づいて、アジアやラテンアメリカに居を移す専門職層などの、経済合理性を超えたライフスタイル移住である。ライフスタイル移住者は、生活の質や自己実現を重視し、移住者を「地域社会との関係性を構築する主体」として捉える必要がある（森，2020）。

一方、柄谷（2016）は、移住者が「資源」であると同時に「危機」を内包する両義性を指摘し、国際移住における社会的分断を批判的に論じた。この視点は国内移住にも適用可能である。

2.3.2　ライフスタイル移住・田園回帰の動向

2000 年代以降、日本では都市から地方への移住に新たな傾向が見られる。その特徴は、経済的理由や U ターンとは異なる「自己の理想とする生活様式の実現」を目的とする点であり、「ライフスタイル移住」や「田園回帰」として注目されている（作野，2016；長友，2015）。

作野は、都市生活への疲弊や疎外感から距離を置きたいという志向が農山村への回帰として表出していると指摘し、長友は移住者が地域文化や人間関係に積極的に関与する意志を持つ一方で摩擦も生じやすいことを示した。

さらに敷田ら（2023）は、情報通信技術や交通網の発達により「移動前提社会」が到来し、居住地にとらわれない働き方や関係性の構築が可能になったと論じている。移動前提社会において、移住は「自己実現としての移動」であり、移住者は起業や副業、テレワークを通じて自律的な働き方を志向する傾向の強いことが示されている。外部から

持ち込まれる価値が、地域に新しい可能性をもたらす一方で、既存の秩序を攪乱（かくらん）する側面もあり、摩擦や葛藤を生む場合がある。ライフスタイル移住は、単なる人口移動ではなく、価値観に基づく主体的選択と地域社会との創造的関係構築を伴うことが、指摘されている。

本研究が注目する移住起業家は、先行研究において認知されているような、自己実現と地域貢献を同時に追求する新しい社会的主体である。

2.3.3　移住と起業

移住者が地域社会においてどのように位置づけられるかを考察するために、移住した共同体への包摂とそこからの排除のダイナミズムを体現する、起業家という存在にも触れる必要があると考える。

若林・畑中（2023）は、移住者の意思決定が、自己実現という個人的動機だけでなく、移住先の共同体構造や意思決定プロセスへの適応努力によって特徴づけられることを示した。特に、非形式的な合意形成や暗黙の了解が移住者の地域社会への受容に大きな影響を与えること、そして地域社会では寄り合いなどの場で交わされる非言語的な合意が意思決定の基盤となることを指摘した。

特に、非形式的な合意形成や暗黙の了解が移住者の地域社会への受容に大きな影響を与えること、そして地域社会では寄り合いなどの場で交わされる非言語的な合意が意思決定の基盤となることを指摘した。特に、非形式的な合意形成や暗黙の了解が移住者の地域社会への受容に大きな影響を与えること、また地域社会では寄り合いなどの場で交わされる非言語的な合意が意思決定の基盤となることを指摘した。また、そこに参加するためには文化的コードの理解と尊重が求められることも指摘した。

移住先の地域に居住するだけでは、「内なる者」として認識されない。能動的に関係を築いてゆくプロセスにおいて移住と同時に起業する「移住起業家」は、地域の経済的・社会的再編に関与する存在として、他の移住者とは異なる位置づけを持つであろう。移住先の地域に居住するだけでは、「内なる者」として認識されない。能動的に関係を築いてゆくプロセスにおいて、移住と同時に起業する「移住起業家」は、地域の経済的・社会的再編に関与する存在として他の移住者とは異なる位置づけを持つ。

また能動的に関係を築いてゆくプロセスにおいて、移住と同時に起業する「移住起業家」は、地域の経済的・社会的再編に関与する存在として他の移住者とは異なる位置づけを持つ。そして移住者を「個人」ではなく「関係性の中で位置づけられる主体」として理解する必要性を示唆している。また移住政策においても、住居や雇用の提供に加え、意思決定への参画を可能にする「関係のインフラ」整備が求められる（若林・畑中，2023）。本研究は、以上を踏まえ、移住起業家を地域社会と外部社会を媒介する主体とした。

2.3.4　起業家研究の起源

起業家（entrepreneur）という語の起源は、18 世紀フランスの経済学者リチャード・カンティロンにまで遡る。カンティロンによれば、この語はフランス語の entre（間に）と preneur（取る者）を組み合わせたものであり、もともとは仲買人や貿易商を指す言葉として用いられていた（カンティロン, 1992）。すなわち起業家（entrepreneur） は、社会のなかで「間を取り持つ者」、すなわち既存の取引のあいだに入り込み、財やサービスを媒介する存在として理解されていた。

カンティロンの議論は単なる語源にとどまらない。カンティロンは起業家を、「市場価格の不確実性を引き受け、資源を自らの裁量で調達し、需要に応じて販売する主体」と定義した（カンティロン, 1992）。つまり、起業家は労働者や地主のように安定した収入を得る存在ではなく、未来の市場条件を予測できないままに判断を下し、そのリスクを担う者として描かれている。この点でカンティロンは、起業家を「不確実性の引き受け人」として位置づけた。

起業家は、「間を取り持つ仲介者」であり、他方で「不確実性を負担する主体」である。この二重の側面は、本研究が注目する地域移住クラフト起業家にも通じる。彼らは都市と農村、地域社会と外部市場とを「間」でつなぐ存在であると同時に、需要や販路が安定しない中で自らの判断で事業を営み、その不確実性を引き受けている。したがってカンティロンの起業家概念は、媒介的であり、かつリスク負担的な存在について、古典的な理解の基盤となるものである。

2.3.5　イノベーション

シュンペーターは、起業家とは単なるリスク負担者ではなく、「新結合」を実現する者であると定義した（シュンペーター, 1977）。

シュンペーターによれば、新結合には 5 つの類型がある。①新しい財の導入、②新しい生産方法の導入、③新しい販路の開拓、④新しい供給源の獲得、⑤新しい組織形態の実現、である。これらは経済に外部からの新しい要素を導入することで既存の均衡を破壊し、新たな発展段階へと移行させるものである。このプロセスこそが「創造的破壊」であり、資本主義のダイナミズムを生み出す原動力とされた。この点で、シュンペーターはカンティロンの「不確実性の引き受け人」としての起業家像から一歩進め、起業家を「経済構造を変革する主体」として位置づけたといえる。彼にとって重要なのは、単に既存のリスクを負担することではなく、新たな組み合わせを創出することそのものであった。

本研究の対象である地域移住クラフト起業家は、こうした「新結合」を体現する存在

といえる。彼らは都市で培った技術や価値観を地方の資源や文化と結合させ、新しい商品やサービスを生み出す。例えば、地域材を用いた家具や工芸品の制作、外部市場への販路開拓、地域住民との協働による新しい組織的枠組みの構築などは、まさにシュンペーターが提示した 5 つの新結合の具体例に相当する。シュンペーターのイノベーション理論は、移住起業家を「クラフトの実践を通じて地域資源を再編し、新しい関係性と価値を生み出す主体」として理解するための重要な枠組みを提供する。

2.3.6　変化と機会

ドラッカーは、「イノベーションとは資源に新しい富を生み出す能力を与える行為」であるとし、起業家を「変化を積極的に探し、それに対応して行動する者」と位置づけた（ドラッカー，1985）。起業家は必ずしも新しい発明を生み出す必要はなく、既存の技術や仕組みであっても、環境の変化を捉えて新しい形で活用できればイノベーションは成立する。起業家を特別な天才や発明家とみなすのではなく、社会や市場の変化に敏感に反応する実践的な存在であるとした。

本研究との関連でいえば、地域移住クラフト起業家は、まさに「変化を機会とする主体」といえる。都市から地方への移住という大きなライフスタイルの転換は、それ自体が環境の変化であり、彼らはそれを自己再生と新しい生業の創出の機会とする。また、クラフト的生業は大量生産社会においては衰退傾向にあったが、生活者が「手仕事」や「地域性」に価値を見いだす社会的変化を背景に、むしろ新しい市場機会として再評価されている。移住起業家は、こうした価値観や社会ニーズの変化を捉えて、自らの事業へと結び付けている。

ドラッカーの議論は、移住起業家を「変化に適応しつつ、それを積極的に資源化する存在」として理解する上で有効である。すなわち彼らは、移住というライフイベントや地域社会の構造変化を「機会」と捉え、クラフトという形で新しい価値を創出する実践者であり、地域社会における変化の媒介者として位置づけられる。

2.3.7　地域起業における社会関係資本

起業家研究において近年注目されている視点の一つが、社会関係資本の役割である。社会関係資本とは、個人や集団が持つネットワークや信頼関係、相互規範といった無形の資源を指す。それらが情報の流通や協力関係の構築を媒介することによって、経済的・社会的活動を促進するものとされる（パットナム，2000；松田・松尾，2013）。

松田・松尾（2013）は、地域起業の事例分析を通じて、起業家が社会関係資本を活用することの重要性を明らかにしている。彼らによれば地域社会に根ざした起業において

は、金融資本や物的資源だけでなく、地域住民との信頼関係や行政・NPO・他地域のネットワークといった社会関係資本の有無が、事業の持続性を大きく左右するという。特に、地域内の強固な結束型関係資本は、日常的な協力や相互扶助を可能にし、一方で地域外の多様なネットワークに基づく橋渡し型関係資本は、新しい情報や市場機会を獲得するうえで不可欠である。

本研究が対象とする地域移住クラフト起業家の理解にとって、社会関係資本との関係の有無は重要である。彼らは地域社会において「よそ者」として位置づけられる一方、地域住民や行政、観光客、都市部の顧客といった複数のネットワークを媒介する存在である。そのため、移住起業家の事業基盤は、地域内での信頼関係と地域外との取引関係をどのように組み合わせるかに大きく依存している。例えば、地元住民との協働による地域イベントへの参加や、地域資源を用いた商品開発は、結束型関係資本を強化する契機となる。一方で、都市部の市場や外部のクラフト展への出展は、橋渡し型関係資本を活用する実践に相当する。

地域起業における社会関係資本の在り方は、移住起業家を「地域社会と外部社会をつなぐ媒介者」として位置づけるうえで重要な要因である。特にクラフトという具体的な実践は、信頼・協力・ネットワークといった社会関係資本を動員することによって成立すると同時に、その反映として地域社会に新しい価値や関係性を生み出す。

2.4　考察のための理論的枠組み

本節では、地域移住クラフト起業家が地域社会との関係性をどのように構築し、変容させているかを解明するために採用する、いくつかの理論的枠組みについての先行研究を検討する。

具体的には、ミクロレベルにおいて理論的枠組みとなる、変容的学習理論とエンゲージメント理論、そしてよそ者論。メゾレベルにおいての理論的枠組みとなる、社会関係資本・制度理論。さらに地域研究の視点から、内発的発展論、媒介性及び再帰性の概念に関する先行研究を扱う。

これらの理論を統合することで、第 4 章及び第 5 章の事例分析において焦点となる「媒介性」「再帰性」「創造性」の三要素の意義を確定するための基盤となる。

2.4.1　ミクロレベル

(1) 変容的学習理論：認識枠組みの変容

メジロー（2012:7-11）が提唱した変容的学習理論は、個人が経験を批判的に省察することで、既存の認識枠組みを再構築し、より柔軟で包括的な視点を獲得するプロセス

を説明する。この理論によって、個人の行動変化に関わる認識の深層構造の変化を捉えることが可能になる。

本研究では、地域移住クラフト起業家が地域社会との関係の中で直面する文化的・社会的摩擦を「解決困難なジレンマ」（メジロー，2012：227-231）として捉える。それに対する省察と行動の変容を説明する際に有効であると思われる。

またメジローは、変容的学習のプロセスを「批判的内省」と「意味パースペクティブの変容」という二つの要素から説明している。批判的内省とは、これまで無批判に受け入れてきた前提や信念を吟味することである。その結果として新たな理解の枠組みが形成されることを、意味パースペクティブの変容と述べた（メジロー，2012：207-213）。

なお、意味パースペクティブとは「期待の習慣のセットであり、準拠枠を構成する」ものである。ある人のこれまでの経験が、新しい経験を同化し変換させる場である前提構造を指す。この意味パースペクティブには認識的、社会言語的、心理的な意味パースペクティブの三種がある（立田，2012：75-76 ）。

(2) エンゲージメント理論：関係の深まりの三層構造

カーン（Kahn，1990：699-702）の理論では、エンゲージメントを「感情的・肉体的・心理的」の三層構造として捉える。この理論は主として、企業内従業員の仕事に対するコミットの仕方の性質について階層的に分類したものである。この分類を地域移住クラフト起業家がクラフトの実践を通じて地域社会と関係を築く過程（エンゲージメントの過程）を想定して適用するならば、上記のエンゲージメント三層構造を、以下のようにパラフレーズして置き換えることが可能ではないか。

- 感情的エンゲージメント：地域への愛着や共感
- 肉体的エンゲージメント：クラフト実践を通じた身体的関与
- 心理的エンゲージメント：地域文化や課題への認知的関心と意味づけ

これらのエンゲージメントは相互に作用し、移住起業家と地域との関係性の深化と認識の変容を促す。

(3) よそ者論：外部性の価値

敷田（2005：77-78）による「よそ者効果」は、移住者が地域社会にもたらす変化を以下の 5 つの観点から整理している。

① 技術や技能などの地域にない技術や知識の移入

② 地域の持つ創造性の惹起や励起

③ 地域の持つ知識の表出支援

④　地域（や組織）の変容の促進

⑤　しがらみのない立場からの問題解決の提案

地域移住クラフト起業家は、これらの効果を通じて地域社会に新たな価値をもたらす媒介的主体として位置づけられる。前述から、「よそ者」とは、他の地域からある別の地域へと境界を越えて移り住んだ存在と言うことができる。そのため、「よそ者」の概念は非常に幅広く、新たな地に新規に流入してきた者すべてが「よそ者」の対象として含まれることになる。単に移住して生計を立てる人たちもいれば、新たな土地において起業してビジネスを行う人たちも同一の扱いになる。

しかし、このように新たな土地で活動する際には、単に移り住んで自らのために生計を立てるだけのものではない。地域の起業家として活動することで、外部から地域に存在しない技術や知識を移入する者も存在する。このような存在は、「よそ者」の概念や「起業家」の概念からだけでは、十分に説明ができない。この十分に説明することができない部分において活動する存在が移住起業家である。

2.4.2　メゾレベル

(1) 内発的発展論：地域の内側からの変容

内発的発展論は、地域社会の文化・自然・歴史に根ざした持続可能な発展を志向する理論である。日本では 1970 年代以降、鶴見和子らによって理論的に展開されてきたが、地域住民の主体的意思決定と地域固有の文化・歴史・自然資源を重視する点に特徴がある。

本節では、内発的発展論の思想的・制度的・実践的展開を批判的に検討し、クラフトの再文脈化との接続を通じて、地域の内側からの変容を理論的に捉える枠組みとして参照する。

鶴見・川田（1989）は、内発的発展を、「常民の語り」や「自然との共生」といった民俗学的・哲学的視点から捉え、地域の文化的自律性を強調した。常民が語る内容は、近代化論に対する根源的な批判として位置づけられ、地域住民の経験や語りを理論化する先駆的な試みであった。しかしながら、この理論はひとつの思想的な枠組みという性格と、精神論的・運動論的傾向が強く、制度設計や政策提案に向かうことはなかった。また、「内発性」の定義が多義的かつ抽象的であるため、実証研究との接続に難があった。

宮本（1989）は、環境経済学の視点から、地域資源の合理的利用と環境保全を両立させる制度的枠組みを提示した。公害問題への対応を通じて、住民自治の制度的整備を重視し、内発的発展を政策論として具体化した点は実践的意義が大きい。一方で、制度依存的な傾向が強く、文化的・思想的側面への配慮は弱いと言える。また、内発性が、制

度的自立性に還元されることで、地域の文化的多様性や住民の価値観の変容といった動態的側面が十分に理論化されていない。

小田切（2022）は、農政学の立場から、地域づくりの実践を通じて内発的発展論を制度化し、「持続的農村発展論」として再構築した。地域運営組織や中山間地域政策、大学との連携による実践的枠組みといった提案は、現代の地域政策においても応用可能性が高いと言える。しかし、理論的抽象度が低く、学術的体系性に欠ける点は否めない。成功事例への過度の依存と失敗事例の分析不足も指摘され、「内発性」の内実が、地域資源の活用に限定されていることがあり、理論的な広さと深さに問題がある。

なお、2.2.2 で述べた、「クラフトの再文脈化」は、内発的発展論の実践的側面に該当する。移住者が地域に持ち込む外部の視点や経験は、既存の知識体系に新たな意味づけを与え、クラフトを「生活に根ざした技術」として再定義する契機となる。これは、地域との関係性の中でクラフトの意味が変容するプロセスであり、地域の内面的な改革を促す可能性を持つ。ただし、このプロセスには摩擦や不整合、権力関係の再編といった課題も伴う。技術が新たな文脈に移されることで、従来の価値体系との衝突が生じる可能性もあり、内発的発展の実践には慎重な調整が求められる。

以上の検討から、内発的発展論は思想論と制度論、そして実践論の三層構造によって展開されてきたものの、それぞれに限界が存在することが明らかになった。本研究では、これらを批判的に統合し、「地域の内側からの変容」のための理論として内発的発展論を位置づける。

(2) 社会関係資本論：ネットワークと信頼の資源性

社会関係資本は、個人や集団が持つネットワーク、信頼関係、相互規範といった無形の資源を指す。パットナム（2006: 106-110）や松田・松尾（2013: 12-13）の議論に基づき、以下の二つの関係資本が重要である。

- 結束型関係資本：地域内の強固な信頼関係や相互扶助
- 橋渡し型関係資本：地域外との多様なネットワーク

地域移住クラフト起業家は、これらの関係資本を媒介として地域社会との関係性を構築・再編し、事業の持続可能性と地域変容の可能性を高めている。

(3) 制度理論：制度的環境との相互作用

制度理論（スコット, 1998: 56-73）は、個人や組織の行動が社会的に構築された制度的枠組みによって形成・制約されることを説明する。スコットは制度を以下の三つの柱で構成されるものとして定義している。

- 規制的側面：行政制度や法制度

- 規範的側面：地域社会の期待や価値観
- 認知的側面：地域文化に根ざした行動様式や意味づけ

地域移住クラフト起業家は、これらの制度的柱と多層的に関わりながら、自らの活動を展開し、制度の再構築に寄与する可能性を持つ。

2.4.3　考察のための統合的な理論的枠組み

この項では、地域移住クラフト起業家の行う知識創造が地域社会の変容を促し、内発的発展に影響を与える点を考察するために援用する理論について、先行研究の検討を踏まえて整理した結果を示す。

地域移住クラフト起業家による知識創造の特質を考察する上で重要なのが、2.2 において扱った「クラフト生産」に関する理論である。また、彼らの創造性を支える要因を知る上で、2.2.3：媒介性についての理論と 2.4.4：再帰性についての理論を参照する。

起業家としての知識創造が、地域社会の内発的発展に作用する様々な契機を考察するために、2.3.4：起業家研究の起業家論を中心にして、2.3.5:イノベーション論、2.4.1(1)：変容的学習理論、2.4.1(2)：エンゲージメント論を参照する。

移住については、2.1.2：よそ者論の系譜と、2.4.1(3)：よそ者論を参照して、その歴史的・文化的な背景と社会的な意味を把握する。

他方、地域社会については、2.4.2(1)：内発的発展論を中心に、2.4.2(2)：社会関係資本論、2.4.2(3)：制度理論を参照して考察を進める。図 2-1「考察のための統合的な理論的枠組み」において、以上の記述を図式化した。

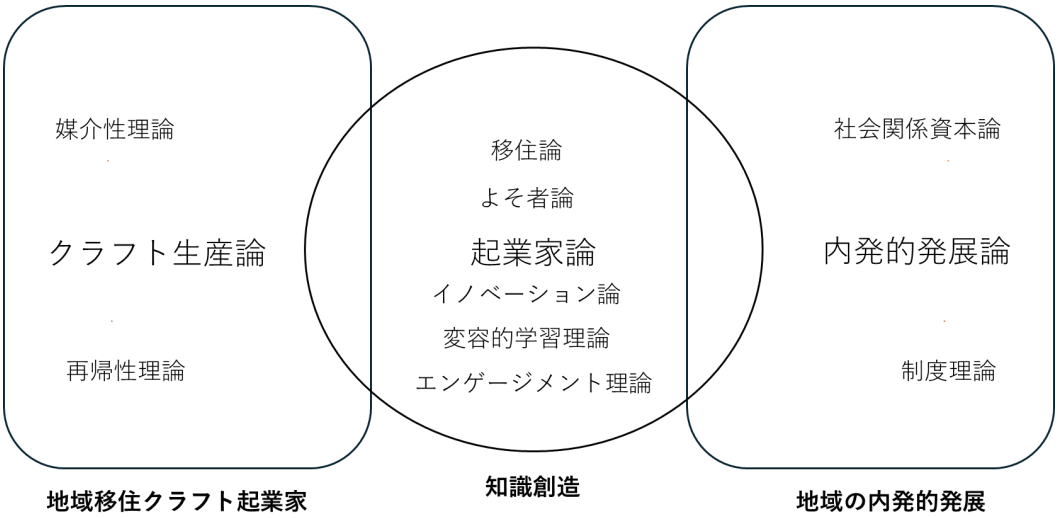

図 2-1　考察のための統合的な理論的枠組み

なお、上記で示した既存研究に対して、以下の諸点を指摘しておきたい。クラフト生産（craft production）の三特性である「媒介性（brokering）・再帰性（reflexivity）・創造性（creativity）」をベースにした起業家の知識創造が、変容的学習の過程とエンゲージメントを通じて地域の制度的文脈の中で社会関係資本と相互作用し、地域の内発的発展につながってゆくメカニズムについては、まだ十分に検討されていない。とりわけ、従来の起業家研究はビジネスや機会認識を中心に展開されてきたため、クラフト生産がもたらす知識創造の内実を構成する、媒介性（地域資源・文化の橋渡し）、再帰性（自己省察と意味の再定義）、創造性（新たな価値の創出）が、双方的に変容的学習効果を生じる。このことが地域の制度的枠組みの再解釈を促しつつ、内発的発展につながっていくプロセスについては、理論化が未成熟である。

また、内発的発展論においても、地域資源の活用や住民主体との関係性については、従来論じられてきたが、起業家の行動特性と制度的変容の連関を明らかにするという研究は発展途上にあるといえよう。

本研究は、地域移住クラフト起業家の知識創造の特性分析を起点にして、地域社会との相互的な変容的学習とエンゲージメントのプロセスに着目した考察によって、既存研究の空白部分を補うことができると考える。

第 3 章　研究方法

3.1　研究デザインとアプローチ：ライフストーリー分析

本研究では、対象者へのライフストーリー・インタビューを通じて語りを収集し、語りの構造や様式をライフストーリー分析によって明確化する。

この節では、地域移住クラフト起業家と地域社会との関係形成プロセスを明らかにするために採用した、ライフストーリー分析による事例分析の方法論について説明する。

ライフストーリー分析は、個人の語りを通じて社会的・文化的文脈を理解する質的研究手法である。語り手が語るライフストーリーは、語り手が自己の人生の経験に意味づけをしながら語る物語である。その語りを通じて個人の経験と社会的文脈との交差点を探ることで、単なる自伝的記述ではなく、語り手が自己の経験に意味を与える構造的な語りとなる（桜井，2002）。

ライフストーリー分析の手法は、基本的に語り手の主観的経験内容に依拠するため、一般化には限界がある。しかし語り手個人の語りを通じて、社会的マイノリティや周縁者の意見、少数集団の声など、固有の細部が可視化可能で、ある種の社会的課題に対応した研究テーマを扱うための方法として有効である。さらにライフストーリー分析の方法は、社会的・文化的要因が個人のアイデンティティ形成や行動選択にどのように影響するかを理解する上で有効でもあると考えた。

ライフストーリー分析は、個人の語りを通じて社会的・文化的文脈を理解する質的研究手法である。ライフストーリー分析による方法論について、日本では、桜井（2002）、桜井・小林（2005）らによって理論的・方法論的枠組みが整理されてきた。

国際的には物語探究（narrative inquiry）や伝記的研究（biographical research）の一領域として位置づけられ、Atkinson（1998）、Riessman（2008）らによって方法論的基盤が確立されている。

Atkinson（1998）は、語りを「物語」として分析し、語り手が自己のアイデンティティや価値観をどのように構築しているかを探り、インタビューは半構造化形式で語り手の自由な表現を尊重した。

Riessman（2008）は、ナラティブ研究の理論的基盤と分析手法を包括的に整理し、ライフストーリー分析を含む複数のナラティブ・アプローチを示した。研究対象は「語り」そのものだけでなく、語りが生成される社会的・文化的文脈も含まれる。

ライフストーリー分析の歴史をたどると、以下の古典的研究がある。ルイス（1969）の『サンチェスの子供たち』では、メキシコの貧困層家族のライフヒストリーを詳細に記録し、「貧困の文化」概念を提示した。これはライフストーリー分析を社会構造分析に結びつける先駆的事例であり、語りを通じて社会的不平等を可視化する方法論の重要性を示した。

ベルトー（1992）の『ライフストーリー：エスノ社会学的パースペクティブ』では、ライフストーリー分析を社会学的分析の中核に据え、個人の語りを社会構造との関連で理解する方法論を確立した。またベルトーはライフストーリー分析を「社会的事実を読み解く窓」として位置づけ、質的研究における自伝的資料の理論的意義を強調している。

アトキンソン（2002）の『私たちの中にある物語：人生のストーリーを書く意義と方法』では、ライフストーリー分析を個人のアイデンティティ形成と文化的意味の探求に位置づけた。また語りを「自己理解と社会的意味の架け橋」として捉える視点を強化した。これらは、ライフストーリーを社会構造や文化的意味の探求に結びつける方法論を確立した。

なお本研究のインタビューは半構造化形式で実施し、語り手が自由に自己の経験を語ることができるようにした。また、ライフストーリー・インタビューにおいては、語り手のプライバシーと語りの権利を尊重する必要がある。さらに、語りの編集において、語り手の意図を損なわないように、以下の配慮をした。

- 語り手の権利と尊厳を最優先に配慮した。
- 調査目的を明確に伝えた上で、語り手のプライバシーと発言の自由を尊重し、インタビューへの参加は自発的なものであることを保証した。
- 語り手は、批判的、対立的な意見を述べることもある。その場合でも語り手を最優先に尊重する。
- 語り手には匿名性の保持、発言内容の修正・削除、公表に関する決定権など、情報に対する主体的な権利を認めた。

3.2　調査地域

本研究において、地域移住クラフト起業家の活動を調査した地域は、北海道上川郡東川町と高知県佐川町である。これらの地域を選定した理由は、それぞれ次の通りである。

東川町については、「写真の町」として広く知られ、「写真甲子園」の開催地でもある。同町を訪問した際、「クラフト街道」と呼ばれる通りの存在を確認した。この街道周辺には、他地域から移住しクラフト工房を開設して生業を営む起業家が集積していることが明らかとなり、調査対象に選定した。

また、佐川町については、高知県産業振興センターを訪問した際、職員より「さかわ発明ラボ」という施設の存在が紹介された。同施設では、佐川町に移住した地域おこし協力隊を中心に、地域産木材や自然素材を活用したイベントやワークショップが継続的に実施されていることが確認された。このような活動は、地域資源を基盤としたクラフト起業の実態を把握する上で有益であると判断し、調査対象に選定した。

北海道東川町は、大雪山連峰の麓に位置し、豊富な水資源と森林資源に恵まれた人口約 8,700 人（2025 年 6 月 1 日現在）の自治体である。1985 年に「写真の町」と宣言し、文化・芸術を基盤とした地域づくりを展開してきた。この文化政策は、単なる観光振興にとどまらず、地域の魅力を都市部に発信し、移住希望者を引きつけた。そして 1980 年代以降、木工家具や陶芸の職人やクラフト作家が相次いで移住し、町内には「クラフト街道」と呼ばれる工房の集積が形成された。これらの移住起業家は、都市部で培った技能や経験を持ち込み、地域の自然・文化資源と結びつけることで、東川町の地域ブランドを築いた。

東川町のクラフト街道は、観光や制度的補助金に基づく誘致型の施策ではなく、文化資源と地域のネットワークによる自発的な集積として形成された。ここでは外部から到来するよそ者の技能や感性を受け入れ、それを地域資源と結びつけて定着させる町の風土が、移住起業家が媒介者として機能する土壌を提供している。

東川町では、主に 1980～1990 年代に移住・起業し、「クラフト街道」という地域を代表する「通り」のネーミングに関わった人々が存在した（中島，2023a）。その後ネーミングに関わった地域移住クラフト起業家たちが定着し、彼らの活動が地域の魅力としても認知されている（中島，2023b）。

高知県佐川町は、中山間地域の人口約 11,500 人の自治体である。伝統的には酒造業や農業を中心に発展してきた。近年は人口減少と産業基盤の弱体化が進み、若年層の流出と高齢化が顕著である。こうした状況に対し、佐川町は新たな産業と人材を創出することを目的に、2014 年に「さかわ発明ラボ」を設立した。さかわ発明ラボは、町が主導して外部人材を地域おこし協力隊として採用し、地域資源を活用した新製品やサービスの開発を支援する拠点である。さかわ発明ラボのスタッフには、補助金や制度的支援が整備され、起業に伴うリスクを軽減する仕組みが提供された。そのため、移住・起業を目指す彼らの多くが「制度を利用した」と語っている。

佐川町の地域移住クラフト起業家の定着には、行政の制度的枠組みへの依拠が見られ、外部からの人材を「地域に呼び込む」形で受け入れている。さかわ発明ラボを介して、移住起業家が地域住民と交流する機会も徐々に増加しており、イベントやワークショップを通じて関係性が構築されている。

佐川町における地域移住クラフト起業家は、制度を起点に行動する点に特徴がある。これは制度依存型の成果を理解する上で重要である。佐川町は、主に 2010 年代以降の地方移住政策として地域おこし協力隊の制度を利用して、移住・起業した人々の行動が現在進行形で起きている地域であることがあげられる（Nakajima, 2024a)。

3.3　調査対象としての地域移住クラフト起業家

北海道東川町及び高知県佐川町の事例に登場する地域移住クラフト起業家 13 名の属性（生年・性別・出身地・職業・地域との関係性の特徴）を以下に整理した。

東川町での調査概要及び調査対象者の属性（表 3-1、表 3-2）、フィールドワーク・参与観察の概要（表 3-3）を示す。調査対象者の年齢層の傾向として、全員が 1940～50 年代生まれの男性である。現在は 60 代後半から 80 代前半が中心である。全員が男性である。出身地は、北海道出身者が 4 名（旭川市 2 名、美瑛町、上富良野町）、他県の出身者が 2 名（山形県、高知県）である。道内の出身者が多い一方で、道外からの移住者も一定数存在する。事業内容は、木製家具関連：4 名（A、C、D、E 氏）、木製玩具・カフェ：1 名（B 氏）、陶芸：1 名（F 氏）と、木工関連が中心で、地域の自然環境を活かしたクラフトを生業にしている。

表 3-1　調査概要（東川町）

調査時期	2017 年 4 月-2025 年 3 月
調査対象地域	北海道東川町
調査方法	半構造化自由回答法のインタビュー（60-90 分/1 名） フィールドワーク・参与観察の調査日数：計 53 日間
サンプル数	個別面接 6 名
性別・年齢	男性 6 名、60 代～80 代（調査時）

表 3-2　調査対象者の属性（東川町）

仮名	性別	生年	移住の年	出身地	事業内容	インタビュー実施日時
A	男性	1945 年	1980 年	旭川市 （道内）	木製家具/ 住宅	2021 年 3 月 26 日 10:30-12:00
B	男性	1954 年	1987 年	上富良野町 （道内）	木製玩具/ カフェ	2021 年 3 月 26 日 15:00-16:00
C	男性	1959 年	1995 年	山形県	木製家具	2021 年 3 月 27 日 15:00-16:00
D	男性	1941 年	2004 年	美瑛町 （道内）	木製家具	2021 年 3 月 28 日 10:00-11:30
E	男性	1954 年	1991 年	高知県	木製家具	2021 年 3 月 29 日 15:00-16:00
F	男性	1950 年	1980 年	旭川市 （道内）	陶芸	2021 年 3 月 30 日 16:30-18:30

表 3-3　フィールドワーク及び参与観察リスト（東川町）

回	調査日程	概要
1	2017 年 4 月 5 日- 4 月 8 日（3 日間）	クラフト街道周辺地域のフィールドワーク。東川町役場、東川町立日本語学校・せんとぴゅあ I（東川町立文化交流施設・留学生宿舎）、道の駅を訪問。
2	2018 年 8 月 24- 8 月 30 日（7 日間）	「写真と建築（空間）」をテーマにワークショップを実施した。開催期間：2018 年 8 月 24～29 日の 6 日間。国際交流の一環としてロシアから 10 名、日本から 3 名の学生が参加した。協力:東川町役場。
3	2019 年 2 月 15- 2 月 18 日（4 日間）	「冬のあかり」をテーマにランタンを雪にともすワークショップを実施した。開催期間：2019 年 2 月 15～17 日の 3 日間 。誰でも自由に参加可。参加者：90 名。協力:東川町役場。
4	2019 年 9 月 24- 9 月 28 日（5 日間）	「茶室」をテーマに新しい建築を考えるワークショップを実施した。開催期間：2019 年 9 月 24～28 日の 5 日間。参加者は、首都圏在住の学生 7 名。協力:東川町役場。
5	2020 年 3 月 26- 3 月 30 日（5 日間）	ふるさと交流センター、大雪山自然学校、せんとぴゅあ II（東川町立文化交流施設/図書ラウンジ）、東川小学校を訪問。
6	2021 年 3 月 23 日- 4 月 2 日（10 日間）	東川町役場東川スタイル課 O へインタビュー調査。東川町史編纂室、キトウシ高原ホテルを訪問。クラフト街道の移住起業家（クラフト人材）6 名へインタビュー調査。
7	2022 年 6 月 2 日- 6 月 5 日（4 日間）	東川町役場東川スタイル課 P へインタビュー調査。東川町史編纂室を訪問。クラフト街道のカフェにて工房主宰者 B・F、工房スタッフ、地域おこし協力隊らと会食。
8	2022 年 11 月 27 日- 11 月 29 日（3 日間）	東川町役場東川スタイル課を訪問。クラフト街道のカフェにて工房主宰者 B・F、スタッフ、地域おこし協力隊らと会食。
9	2023 年 1 月 19 日- 1 月 22 日（4 日間）	東川役場東川スタイル課、産業振興課、町長室を訪問。ひがしかわ雪まつりに地域おこし協力隊らと参加。クラフト街道のカフェにて工房主宰者らと会食。
10	2024 年 9 月 4 日- 9 月 6 日（3 日間）	高知県木工連を東川アテンド：東川役場東川スタイル課、産業振興課、町長室を訪問。クラフト街道のカフェにて工房主宰者 B・F らと会食。
11	2024 年 12 月 5 日- 12 月 6 日（2 日間）	筆者らの書籍「移動縁が変える地域社会」に採り上げたクラフト街道の移住起業家らを招きシンポジウムを開催した。会場：せんとぴゅあ講堂。参加者：30 名。協力：東川町役場。
12	2025 年 3 月 16 日- 3 月 18 日（3 日間）	東川役場文化交流課、産業振興課、町長室を訪問。大雪山旭岳へフィールドワーク。クラフト街道のカフェにて地域おこし協力隊と懇談。

佐川町の調査概要及び調査対象者の属性（表 3-4、表 3-5）、フィールドワーク・参与観察の概要（表 3-6）を示す。調査対象者の年齢層の傾向は、1974～2000 年生まれで、20 代後半から 50 代前半までの世代である。性別は女性が 4 名、男性が 3 名。出身地は、関西圏が 4 名（神戸市、大阪府、兵庫県、和歌山県）、関東圏が 2 名（東京都、神奈川県）、高知県内が 1 名（南国市）である。職業の分野は、教育関連（放課後発明クラブ、学童）：3 名（G、H、M 氏）、クラフト・アート（レザークラフト、草木染め、造形物制作）：3 名（I、J、L）、農業（有機野菜農園）：1 名（K 氏）と、教育・クラフト・農業といった分野が見られた。

表 3-4　調査概要（佐川町）

調査時期	2020 年 11 月-2025 年 7 月
調査対象地域	高知県佐川町
調査方法	半構造化自由回答法のインタビュー（60-90 分/1 名） フィールドワーク・参与観察の調査日数：計 44 日間
サンプル数	個別面接 7 名
性別・年齢	男性 3 名・女性 4 名、20 代～40 代（調査時）

表 3-5　調査対象者の属性（佐川町）

仮名	性別	生年	移住の年	出身地	事業内容	インタビュー実施日時
G	女性	1998 年	2021 年	兵庫県	放課後発明クラブ	2022 年 8 月 4 日 10:00-11:00
H	女性	2000 年	2020 年	東京都	ものづくり WS/学童	2022 年 8 月 4 日 11:00-12:00
I	男性	1998 年	2020 年	和歌山県	レザークラフト	2022 年 8 月 4 日 12:00-13:30
J	女性	1980 年	2020 年	大阪府	草木染め	2022 年 8 月 4 日 15:00-16:00
K	女性	1979 年	2020 年	兵庫県	有機野菜/農園施設造成	2022 年 8 月 4 日 16:00-17:00
L	男性	1976 年	2021 年	南国市（県内）	造形物制作	2022 年 8 月 4 日 17:00-18:00
M	男性	1974 年	2022 年	神奈川県	発明/教育	2022 年 8 月 4 日 18:00-19:00

表 3-6　フィールドワーク及び参与観察の概要（佐川町）

回	調査日程	概要
1	2020 年 11 月 5 日- 11 月 7 日（3 日間）	公益財団法人高知県産業振興センター、高知県木工連を訪問。高知県産業振興フェア「高知県ものメッセ」を視察、高知県内の木工クラフト関係者と会談。
2	2022 年 5 月 18 日- 8 月 20 日（3 日間）	高知県木材協会を訪問。紙産業試験センターを視察、高知県産業振興センター職員同行。佐川町役場、さかわ発明ラボを訪問し、地域おこし協力隊 I・J と会談。
3	2022 年 8 月 2 日- 8 月 5 日（4 日間）	佐川町役場まちづくり推進課を訪問。放課後発明クラブ（ものづくり教室）に参加。発明ラボ機材貸し出しオープン日参加。さかわ発明ラボメンバー7 名にインタビュー調査。
4	2022 年 8 月 31 日- 9 月 1 日（2 日間）	高知県木工連理事長を訪問。県産木材の利用促進を目的に、木製品の展示紹介、木育活動支援について情報共有。
5	2022 年 10 月 14 日- 10 月 15 日（2 日間）	社会福祉法人小高坂校正センター、四万十町森林組合を視察。高知県木工連理事長・高知県産業振興センター職員同行。
6	2022 年 10 月 24 日- 10 月 26 日（3 日間）	高知会館講演、テーマ「地域資源を活用した製品デザインと事業設計」。高知県木工連、さかわ発明ラボ G・H・I が参加。
7	2022 年 11 月 11 日- 11 月 13 日（3 日間）	第 11 回高知県ものづくり総合技術展を視察。高知県木工連企業、さかわ発明ラボ G・H・I・J・K・L・M が参加。
8	2023 年 1 月 25 日- 1 月 27 日（3 日間）	高知県木工連総会において講演、テーマ「付加価値の高い木製品づくり」＠高知会館。高知県産業振興センター、高知県木材協会職員、佐川町役場職員が参加。
9	2023 年 9 月 10 日- 9 月 14 日（5 日間）	佐川町内の自伐型林業家（地域おこし協力隊 OB）の山を視察。道の駅を視察。さかわ発明ラボメンバー、OB と会食。
10	2023 年 11 月 9 日- 11 月 11 日（3 日間）	第 12 回高知県ものづくり総合技術展を視察。高知県木工連企業、さかわ発明ラボが出展、展示アドバイザーとして参画。
11	2024 年 3 月 26 日- 3 月 28 日（3 日間）	高知大学を訪問、高知大学理事（前佐川町長）Q にインタビュー調査。さかわ発明ラボメンバーI・K・L・M と会談。前佐川町長、地域おこし協力隊 OB らと会食。
12	2024 年 11 月 16 日- 11 月 17 日（2 日間）	第 13 回高知県ものづくり総合技術展を視察。高知県木工連企業、さかわ発明ラボが出展、展示アドバイザーとして参画。
13	2025 年 2 月 10 日- 2 月 11 日（2 日間）	高知県木工連総会に出席＠高知会館。高知県木材協会、高知県産業振興センター、高知県木材協会、高知県の職員が参加。
14	2025 年 7 月 5 日- 7 月 7 日（3 日間）	佐川町立図書館、さかわ発明ラボを訪問。さかわ発明ラボ I・L と会談。前佐川町長、地域おこし協力隊 OB と会食。

3.4　調査項目

3.4.1　ヒアリング

地域移住クラフト移住起業家に対して、それぞれの過去・現在・未来の経験をヒアリングし、ライフストーリー分析のデータとした。具体的には、生活の営み全般を捉えるため、下記の 4 つの区分を設けた。

ⅰ.「現在の生活・生業（地域社会との交流を含む）」

ⅱ.「これまでの人生（移住・起業に至る経緯を含む）」

ⅲ.「転機となった出来事（移住したきっかけを含む）」

ⅳ.「これからの人生（将来の展望を含む）」

また、移住起業家とは異なる立場にある、地域の行政担当者にもヒアリングを行った。これは、移住者からのヒアリング情報の一方向性を相対化し、客観的な事実や出来事を確認するためである。と同時に、地域の側からの受け止めや評価が含まれる内容に関しては、ライフストーリー分析の結果を補完するデータとして活用した場合もある。

聞き取り項目は、地域移住クラフト起業家の語りから「キャリア形成」「地域との関係」という 2 つの分析視点を抽出することを意図して構成されている。

まず「キャリア形成」の視点では、クラフトを生業とするに至った動機や背景、初期の職業選択における価値観、技能習得のプロセス、職業アイデンティティの形成過程、そして生業の営みにおける主体の自己認識を尋ねる。

教育活動や地域ブランド化、後進育成についてのコメントは、地域へのエンゲージメントの度合いを定性的に把握する上で有効であると考えた。

次に「地域との関係性」では、移住先地域との関係構築のプロセスを尋ねている。地域社会への参画、地域資源の活用、住民との協働や葛藤、地域における役割の変化を通じて、外部者であった地域移住クラフト起業家が、どのようにして地域の成員となって、「内部化」していくのかを知るために尋ねている。

職業上の文脈の変化が、地域との接点の形成度合いと、どのように関連しているかという点を理解するための質問である。

これらの質問は、リサーチクエスチョンの「地域移住クラフト起業家は、クラフト生産技能を基盤としてどのような特性を発揮し、地域の内発的発展に影響を与えているのか」と関連しており、個人の内面的変化と地域との相互作用を捉える。

3.4.2　ライフストーリー分析の方法

収集したライフストーリーは、まず、「語りの様式：モード」の観点から分類される。ライフストーリーは、それぞれの自己と自己の経験が様々なモードで語られており、複数の「語りの様式」がある（桜井，2012）。そしておのおのの「語りの様式」は、語り手の社会的立場や文化的背景を反映するため、語りの意味を分析する上で重要な要素である（桜井，2012）。

語りの様式とは、個人の「パーソナル・ストーリー」、コミュニティにおける「慣習的な様式」や「モデル・ストーリー」、全体社会（国民社会や地球規模の国際社会）の「マスター・ナラティブ」のことである。自己と自己の経験を、様々なモードで、あるいは複数の「語りの様式」を用いて語る（桜井，2012）。

3.4.3　ライフストーリー分析の手順

本研究では、桜井（2002）・桜井・小林（2005）を参考に、ライフストーリー分析を整理した大久保（2008）の手順を援用した。以下に、本研究で用いた分析の手順を示す。

①　データの収集

まずインタビュー対象者を選定する。次に対象者にアポイントをとり、インタビューの実施となる。インタビューは探索的に次の流れで聞いていく。

i.　「現在の生活」について
ii.　「これまでの人生」について
iii.「転機となった出来事」について
iv.　「これからの人生」について

②　データの加工

i.　録音データの文章化
ii.　言い間違い、日本語としておかしな表現を修正する
iii.編集版ライフストーリーの作成
録音データのまま書き起こした一次資料から、調査員が重要と判断した部分をピックアップし、調査員のあいづちは省略して、対象者の語りを一連のまとまりのあるものとして時間的な流れに沿って配列する。

なお、どのような編集が行われたかの例示を、本研究で収集した「インタビューデータの文字起こし」と「編集版ライフストーリー」から抜粋して下記に示す。

【例示】

インタビューの文字起こし：

この辺、暖かくて食べ物が美味しくて、すごい住みやすいしちょうどいいんですよね。なんか時間がね。その中で私ができることとかで、今後まあ顔も覚えてもらえたし、なんか一緒にワークショップ企画するっていう感じで関われるかもしれないし。

編集版ライフストーリー：

この辺りは暖かく、食べ物も美味しく、住みやすい環境で時間の流れも心地よい。その中で、自分にできることとして、顔も覚えてもらえたので、今後は地域と一緒にワークショップを企画するなどで関わるかもしれない。

③　ライフストーリーの検討

i.　客観的事実を記載する。

調査者の属性データ（性別、年齢、職業）を記載する。もちろん語り手の意向やプライバシーには十分に配慮し、無理に公開するようなことは慎む。

ii. 主観的事実を検討する。

例えば、「どういう父親であったか」「学校生活は楽しかったか」「なぜその職業についたか」といった質問に対する対象者の回答である。これらが主観的事実であるということの意味は、それが対象者の主観を離れては存在しえない事実であるということである。

④　データの分析

i.　分析テーマを決める。

編集版ライフストーリーを読んで分析テーマを見つけ、特定の分析テーマの視点から編集版ライフストーリーを読み返す作業が、繰り返されて分析テーマが決まっていく。

ii. ライフストーリーのパターンを析出する。

複数のケースの編集版ライフストーリーを読んでいくとき、「語り」の比較が行われている。もし似たような「語り」パターンが何度も出現するようであれば、「多数派の語り」、「支配的な語り」と考えられる。

iii. 語りの背後に存在する「語り」のパターンを読む。

複数の編集版ライフストーリーを読みながら、個々人の「語り」の背後に存在する「語り」のパターンを読む。

⑤　三つの特性の抽出

ライフストーリーからクラフト固有の特性を抽出する。本研究で地域移住クラフト起業家のライフストーリーから抽出する特性は次の通り。

- 媒介性（brokering）：
  地域資源・文化・ネットワークを橋渡しし、異なる制度的・社会的領域を接続する特性。クラフトは素材や技法を媒介に、地域と外部市場、伝統と革新を結びつける。
- 再帰性（reflexivity）：
  自己省察を通じて認識枠組みを再構築し、地域との関係性や自身の役割を再定義する特性。クラフトは「解決困難なジレンマ」を契機に、起業家の価値観や行動を変容させる。
- 創造性（creativity）：
  クラフトを媒介に新しい価値や意味を創出し、地域資源を再編する特性。素材や技法の革新だけでなく、地域文化や制度に新しい解釈を与える。

第 4 章　事例研究 1：北海道東川町

4.1　東川町の地域移住クラフト起業家

北海道上川郡東川町は、移住者の受け入れに積極的な自治体であり、地域移住クラフト起業家の活動が地域の文化に新たな価値をもたらしている。調査対象となった 6 名の地域移住クラフト起業家は、木工や陶芸で生業を営んでおり、それぞれが地域資源を活用しながら独自のキャリアを形成している。彼らは地域の人々との関係構築において、地元の慣習や価値観を尊重しつつ自身の創造性を発揮することで、地域との接点を築いている。特に地域イベントへの参加や共同プロジェクトの実施を通じて、地域社会との信頼関係を構築している点が注目される。

本章で取り上げる東川町の地域移住クラフト起業家の事例は、陶芸、木工、カフェ経営兼工房という多様なクラフトの生業を営む。彼らのライフストーリーは、個々のキャリアや生活の延長線上に移住と起業が位置づけられており、地域社会との関わりに特徴がある。

個人情報に関わる事柄や出来事については、調査対象者のプライバシーに支障のない表現にしている。文中の N は筆者、A・B・C・D・E・F は調査対象者を表している。また O・P は行政担当者を表している。

4.2　ライフストーリーの分析

A 氏（1945 年生／男性／北海道旭川出身）

A 氏は、1980 年に移住し、木製家具及び木造住宅の設計・施工を手掛ける企業の経営者である。

> N：どんな生活スタイルか？
>
> A：大げさな事はない。当たり前に、ナチュラルにしている。人間はこうあるべきだとかおこがましいから言えないが、自分の中の当たり前は、自然の一部であるという自覚。植物から動物までと同様に、使命を持って暮らしたい。最近は失望していることもあるが、人様はともかく自分はそうありたい。
>
> （2021 年 3 月 26 日のインタビューより）

媒介性の抽出：「自然の一部として生きる」、「他人はともかく自分はそうありたい」という生活心情には、自然や社会との基本的な距離と関係の取り方が表れている。

再帰性の抽出：「自分の中の当たり前は、自然体であること」。自己が「自然の一部であること」を自覚する、（人間、自分も）植物や動物と同様の存在とする自己認識である。

創造性の抽出：「使命を持って暮らしたい」という願望は、クラフトを生業とするクリエーターの職業的倫理である。

N：製作ではどんなことを重視しているか？

A：一貫生産をしている。嫌われるのは塗装工程。僕はみんなが嫌う塗装に行った。しかし、有機溶剤が嫌で体に良くない。成形合板の有機溶剤も良くないので、下請けもやめた。塗装はオイルにした。ウレタンの方が早いが体に良くないのでここに来てからは全然やっていない。

（2021 年 3 月 26 日のインタビューより）

媒介性の抽出：健康への悪影響を理由に、有機溶剤使用の成形合板の下請けをやめた。

再帰性の抽出：有機溶剤が嫌いで、体にも良くないのでやめた」

創造性の抽出：材料加工から製品化までの一貫生産体制である。ウレタン塗装の方が作業効率は高いが、塗装には、有機溶剤を使用せず、オイルにした。

N：東川を移住地に決めた理由は？

A：（現在の工房）がある場所は廃校になっていた。農地だったが、離農のため山に戻っていた。移住場所は大雪山と北海道に決めていた。場所を探すのに 7 年かけて自分の住むべき場所を探した。人間は理想の場所を探すが、理想郷は無いと思った。ここは理想の場所でも素敵でも何でもなくて見捨てられた場所だった。家具屋が在庫を置く倉庫代わりに使っていた。アメリカ人の大学の先生に「ここをアトリエにしたらどうか？」、「自分には手に負えないから A さんやらないか？」と誘われたのがきっかけ。旭川でナンバーワンの職人さんが来てくれて、始めた頃の何年かいてくれた。彼はここで引退してくれて、私はありがたかったし、本当に幸運だった。ここで作ったものは長く使う事ができるデザインや作り方を広めたいと思う。

（2021 年 3 月 26 日のインタビューより）

媒介性の抽出：家具の倉庫に使われていた廃校を、大学の先生から「ここをアトリエに

したらどうか」と誘われたのがきっかけ。

再帰性の抽出：自分の住むべき場所を見つけるのに 7 年を費やしたが、理想郷は存在しないと感じた。見つけた場所は理想的でも魅力的でもなく、見捨てられた場所だった。

創造性の抽出：「長く使う事ができるデザインや作り方を広めたい」

N：クラフト街道という名前は、いつからついたか？

A：いつからついたのか知らない。移住してから、町とか地域とかにはあまり関わってきていない。クラフト街道の名称にも関わっていない。しかし、最近は変わってきて、「東川スタイル課」が出来てからは、今までと違うスタイルで仕事を受注している。

（2021 年 3 月 26 日のインタビューより）

媒介性の抽出：クラフト街道」のネーミング経緯には関わっていない。町とか地域とかにもあまり関わってこなかった。（媒介性の希薄さ）

再帰性の抽出：最近は、町（行政）や地域との関係が変わってきた。

創造性の抽出：今までと違う形で町からの受注がある。

- **B 氏（1954 年生／男性／北海道上富良野出身）**

B 氏は、1987 年に東川町へ移住し、木製玩具や小物を製造・販売する工房兼カフェを家族で経営している。

N：今思っていることは？

B：好きなことで身を立てるのが一番大変。だが、どうせ苦労するなら自分の好きなことで苦労したい。それをどう維持していけるかが課題。10 年過ぎたら次の 10 年、という感じでやってきた。最初の 10 年 15 年 20 年は必死。バブルがはじけ、取引先がなくなるとか。大手から仕事をもらえるようになり、スタッフに手伝ってもらえるようになった。自分のオリジナルだけで食べている時代は大変だった。

（2021 年 3 月 26 日のインタビューより）

媒介性の抽出：バブル崩壊や取引先の消失で困難に直面した。大手企業から仕事を受けられるようになった。

再帰性の抽出：自分の好きなことで苦労したい。

創造性の抽出：スタッフと協力できる体制。自分のオリジナルだけを作っていた時期は大変だった。

B：東川に越してきてからは、スタッフと協力できる体制当時はすぐ知り合いになれた。自分は素人だと謙虚に思っている。「自分以外は皆が師」と思っている。結構、煙たがられた。その後、旭川工芸デザイン協会でよく一緒に飲んだ。楽しいことばかりだとうそになる。金銭的に本当に苦労した時期もあった。

21、22 年前に、今の幼児保育の関係の仕事をメインでやるようになった。そして、皆さんに手伝ってもらうようになった。少し余裕ができて、自分のオリジナル的なものも手掛けられるようになり、今はある程度商品も並んでいる。幼児保育は、僕がイメージしたものをスタッフに形にしてもらったり、作ってもらったりしている。今は結構役場からのモノがある。役場の方も、課長クラスの考えがあれば、すぐに動いてあげようと思っている。工房のスタッフは 6 人。近辺の仲間とは月一で、ここで飲み会をやっている。

（2021 年 3 月 26 日のインタビューより）

媒介性の抽出：東川に移住後、工房家具の人々と知り合いになる。旭川工芸デザイン協会で交流を深める。自分がイメージしたものを、スタッフに形にしてもらったり、作ってもらったりしている。役場からの仕事も、課長クラスの意向があれば、すぐに動こうと思っている。工房は 6 人で運営し、近隣の仲間とは月 1 回の飲み会を開いている。

再帰性の抽出：自分は素人だと謙虚に思っている。自分以外は皆が師と思っている。

創造性の抽出：幼児保育関連の仕事をメインにし、仲間に手伝ってもらうことで余裕が生まれ、自分のオリジナル作品にも取り組めるようになった。現在はオリジナル商品も揃う。

N：東川に来たきっかけは？

B：コトの発端は 35 年前デパートで知り合ったそこの陶芸家 F さんです。デパートに出展していた陶芸家の F さんが手配してくれた。当時、町の商工会で空き家を埋める事業があり、役場がリストを作っていた、ここは 3 番目の候補。他に、町の近くに家財道具が残ったままの物件もあった、当時は力が無かった。ここは安くて、土壁の納屋に工房があり、母屋もあった。持ち主は、木工にも理解してくれ、大きくなったら出ていってください、と言われたけど、骨を埋めるから売ってくれと言って買った。

（2021 年 3 月 26 日のインタビューより）

媒介性の抽出：移住の際、知り合いの陶芸家 F さんが手配（媒介）してくれた。商工会の空き家事業のリストを見て購入した。

再帰性の抽出：木工に理解がある持ち主に、「骨埋めるから売ってくれ」と言う。

創造性の抽出：土壁の納屋に工房があり、母屋も備わる機能的な場所を選択して購入。

N：地区会長の経験は？

B： 2 回目です。前は、町内会の行政区長。当時は、町内会のことを「部落」と言う、ひどい言い方をしていた。「部落」は差別用語だが、ここの人たちはそんなことも知らなかった。何年か前から「町内会」になった。なかなかお互いの仕事を理解するのは難しい。農家は自分たちが一番忙しいと思っている。何年か前、僕が行政区長をやっていた当時、年度末の総会の時に、取引先から連絡が来て携帯が鳴った。材料を預かっている仕事なのでと、途中で抜けさせてもらったが、農家の人から「そんなに稼いでどうすんだ」といわれた。農家同士の場合、例えば共同でなにかやるときに、休んでこなかったら、「お前、そんなに稼いでどうする」という言葉がよくあった。

（2021 年 3 月 26 日のインタビューより）

媒介性の抽出：町内会の行政区長を担当（2 回目）。農家から『そんなに稼いでどうすんだ』と言われたことがある。

再帰性の抽出：お互いの仕事を理解するのは難しい。農家は自分たちが最も忙しいと考えている。

創造性の抽出：「町内会」を指して「部落」という言葉が使われていたが、それが差別用語であることを地域の人々は知らなかったことに違和感を覚えた。

N：今は、ご夫妻とも移住していますが、自身の認識として、「よそ者」という感覚はありますか？

B：今はもう無い。大手を振って歩いている。でも、F さんが、「B さんが苦労して開拓してくれたからこそ、我々はここまで来ることができた」と言ってくれた。それはなんとなく納得できる。本当に辛かった時期もあった。役場を定年退職した人から、「そんなことで、引っ越ししたら、あんた一生定住できないよ、そんなに辛抱できないのか」と言われたこともある。

（2021 年 3 月 26 日のインタビューより）

媒介性の抽出：移住のきっかけとなった F 氏の「(B さんが) 苦労して開拓してくれたからこそ我々はここまで来ることができた」という言葉には納得している。今は、大手を振って歩いている。

再帰性の抽出：「よそ者」意識は、今は無い。本当に辛かったこともあった。

創造性の抽出: 役場の定年退職者から「そんなことで引っ越したら一生定住できない」、「辛抱できないのか」と言われたこともある。

- C 氏（1959 年生／男性／山形県出身）

C 氏は、家具部品製造会社に勤務したのち、1995 年に東川町で独立した。

N：今どんな生活やご商売ですか？

C：東川は木材関係に関わっている人は多いと思う。この町はすごくいい。町長も良くしてくれる。今すごくいいけど、町長はもう少しやってくれないと困る。建物を建てて借金も。責任取ってもう一期やってもらわなければ。人のつながりは、どうなるか分からない。どんな商売でも人間関係が重要。

（2021 年 3 月 27 日のインタビューより）

媒介性の抽出：現町長の対応には満足している。町は建物を建てた借金もある。

再帰性の抽出：人のつながりは不確実だが、どんな商売でも人間関係が重要。

創造性の抽出：この町は、今すごくいい。しかし町長はもう少し続けてほしい。

N：いつからここで商売されていますか？

C：東川に開業して 20 年くらい。山形県の工業高校を出て、大学の建築科に入って、建築に嫌気がさした。建築はこっちの意見を聞かないで相手の言うように作らなければいけないけど、家具なら好きに提案して出せる。この商売は楽しく若さを保てる。人を楽しませることで喜んでもらえることが、こちらも楽しい。会社のために何かやってもそうはならない。家具にこだわらなくても、誰かのために作るのは良いし、自分もうれしい。家具を見せようか。人は笑って暖かくするのかいい。仕掛けものは楽しい。

（2021 年 3 月 27 日のインタビューより）

媒介性の抽出：家具にこだわらず、誰かのために作ることを重視し、人が喜ぶ仕掛けものを作るのも楽しい。

再帰性の抽出:家具づくりは楽しく、若さを保てる。人を楽しませ喜びを与えることは、自分の楽しみでもある。

創造性の抽出：建築は相手の意向に従わなければならないが、家具なら自由に提案できる。

N：独立のきっかけは？

C：最初は建具屋で部品工場みたいなところで、家具部品とか作る会社にいて、そこがつぶれて、36 歳くらいで独立した。それで、工場跡地のここの場所を買った。あとは機械と材料とかお金なくても人間として仲良くなって、機械とか入れてもらって。ここは木工に適した場所で、なんでもそばで揃う。それで土地だって 6000 坪あるし、朗々とやっている。それは、人のおかげだ。

（2021 年 3 月 27 日のインタビューより）

媒介性の抽出：工場跡地を購入し、資金が乏しい中で人間関係を築き、機械や材料を融

通してもらった。人のおかげ。

再帰性の抽出：建具屋と家具部品工場がつぶれ、36 歳で独立した。現在は朗々と事業を続けている

創造性の抽出：ここは木工に適した場所でなんでもそばで揃う。朗々とやっている。

N：ここから独立した方はいるか？

C：いまは息子も働いている。使ってくれと言って。他もウチでしか働けないようなやつばかり。何人かは独立してやっている。うまくいっているみたいだ。東川にも一人いる。一人でやるのも大変だとおもう。小さくやっていかないと。それと誰かのために作ることが大事。

（2021 年 3 月 27 日のインタビューより）

媒介性の抽出：息子も働いており、他のスタッフと働いている。何人かは独立してうまくいっている。東川にも一人いる。

再帰性の抽出：小さくやっていかないとね。独立して一人でやるのは大変であり、小規模で続けることが重要。

創造性の抽出：誰かのために作ることが大事。

- **D 氏（1941 年生／男性／北海道美瑛町出身）**

D 氏は、勤務していた会社の東川町工場を引継ぐかたちで 2004 年に開業した。

N：いまご家族は？

D：奥さんと二人。この仕事は好き。中卒で丁稚、木工一筋。今は朝早く来て 2 時半には帰る。喜ばれる仕事がいい。趣味でやっているようなもの。15 年もやれると思わなかった。東川は除雪がいいので、山の中に家を建てても大丈夫。今若い人が増えているのは東川だけ。

（2021 年 3 月 28 日のインタビューより）

媒介性の抽出：今、若い人が増えているのは東川だけ。東川は除雪が良く、山の中に家を建てられる環境がある。

再帰性の抽出：中卒で丁稚奉公から木工一筋でやってきた。15 年もやれると思わなかった。（人に）喜ばれる仕事がいい。

創造性の抽出：今は、「趣味」のようにやっている。早朝に仕事を始め、午後 2 時半には帰る。

N：ここで仕事をされて何年になるか？

D：自分で初めてやり始めてから 16 年。今年の 3 月で 80 歳。今は、趣味でやっているようなもの。従業員は、77 歳の人とパートの 1 人で計 3 人。63 歳までは会社に勤めていた。この場所はもともと 8 万坪あって、従業員が 150 人いた。東川は木工の町、旭川は家具の町だから、特に東川の町にはお世話になっている。こんな小さな工房にも仕事まわしてくれる。

（2021 年 3 月 28 日のインタビューより）

媒介性の抽出：東川は木工の町、旭川は家具の町だから、小さな工房にも、町から仕事を回してもらい、お世話になっている。

再帰性の抽出：独立して仕事を始めて 16 年になる。現在の工房は 8 万坪の敷地に 150 人の従業員がいた場所。

創造性の抽出：趣味でやっているようなもの。

N：木工をやっていてよかったか？

D：はい、特に火事になってからは。個人的には、自分でやるようになってから、勤め人の時とちがって、いつも考えているので精神的には充実していて良かったと思う。自分には木工しかなくて、それでやっている。

（2021 年 3 月 28 日のインタビューより）

媒介性の抽出：独立は、隣家の火災を契機に、火災保険を活用して果たした。

再帰性の抽出：火事を経験した後、木工を続けてきたことに強い肯定感を抱いている。

創造性の抽出：勤め人時代と比べ、自分で仕事をするようになってからは、常に考えながら取り組むことで精神的な充実を得ている。

N：後継者はいますか？

D：本当に家具が好きでやりたい人いたら後継者は欲しい。もう 80 歳だからいつどうなるかわからない。ここは広くて環境が良い。自分でなんでもやる人がいい。でも、今家具は大変で、量販店に大方もっていかれる。無垢の家具なんて。でも好きな人は会いに来る。

（2021 年 3 月 28 日のインタビューより）

媒介性の抽出：本当に無垢家具が好きでやりたい人がいたら後継者にしたい。好きな人は会いに来る。

再帰性の抽出：工房の環境は広く、何でも自分でできる場所。もう 80 歳だからいつどうなるかわからない。現在の家具業界は量販店が市場を占め、無垢家具は厳しい状況にある。

創造性の抽出： 自分でなんでもやる人がいい。

- E 氏（1954 年生／男性／高知県出身）

E 氏は 1991 年に東川町へ移住し、木製家具の工房を営む。現在全国に顧客を持つ。

N：今どんな仕事をしているか？

E：今、お客さんは全国にいる。デザインから全部やる。東京の家具見本市には、家具輸送専門の運送屋が 10 台も出てくれるので助かる。会場は旭川家具で渋滞してたまらないだろうけど。今は違うが、昔は足もの（椅子など）が低くみられていた。人が腰掛けるものなんか家具じゃないとか。他所からきて、脚ものとか、クラフトの小物生活用品をつくっていると低く見られた。このあたりだと、婚礼家具、指物、箱ものが最高の仕事だという意識があった。椅子なんか作っているとバカにされた。

（2021 年 3 月 29 日のインタビューより）

媒介性の抽出：顧客は全国にいる。東京の家具見本市には、家具運輸の専門業者が旭川から 10 台ものトラックで輸送してくれる。

再帰性の抽出：昔は足もの（椅子など）の家具は低くみられた。椅子やクラフトの小物生活用品を作っているとバカにされた。

創造性の抽出：製品は東京の家具見本市にも出す。

N：いつからここに住んでいるか？

E：北海道には 30 年前に来た。日本の家具の作りかたを知るために 2 年旭川の家具会社にいた。その前はアメリカ・ニューヨーク、スペインに 7、8 年。日本でもいろいろなところに住んだ。家族は 2 人で、あと犬。この商売は奥さんが強くて偉い。私は高知県出身で、奥さんは長崎県出身。日本もいろいろ見たけど、本州は狭い。

（2021 年 3 月 29 日のインタビューより）

媒介性の抽出： アメリカ・ニューヨークやスペインで 7～8 年過ごす。日本国内でも各地を転々とした。

再帰性の抽出：日本の家具づくりを学ぶため、旭川の家具会社で 2 年間勤務する。

創造性の抽出：本州は「狭い」と感じ、広さを求めて北海道に定住した。家族は夫婦と犬。

N：東川に来たのはどんなきっかけか？

E：農家や役場をつてに探し、ここを見つけた。木を植える広いところが欲しかった。工務店が持っていた土地を 13 年前に買うことができた。道、井戸、建物、セルフビルドし、完成してこの環境が整ってから 11 年経つ。仕事は一人でやっている。奥さんは英語の先生。ここに住むようになったのは、誰もこないから。とにかく広いところが欲しかった。北海道ならなんとかなると思った。広葉樹を植えた。木を使っているからその分植えたい。使うのは自分じゃないが。木が育つのは時間がかかるから。道産材よりフィンランド材の集成材が安く入手できる。

（2021 年 3 月 29 日のインタビューより）

媒介性の抽出：農家や役場のつてを頼り、土地を探し、木を植える広い場所を求めて現在の土地を見つけた。木を使うからその分を植えたい。

再帰性の抽出：広い北海道ならなんとかなる。ここに住むようになったのは、誰もこないから。敷地には広葉樹を植え、木材利用への責任感を示す。

創造性の抽出：道、井戸、建物をセルフビルドで整備する。広い敷地に広葉樹を植える。

N：後継者は考えているか？

E：最近は少ないけど、後継者ではなく、インターンシップに大学とか短大から来ていた。こういう仕事をしたくて、これからどうしたらいいかと聞かれたら、建築の学生とかには、職訓（職業訓練校）を勧めている。年齢的には 30 前なら生きていける。価値観はこういうのでいいのではないか。以前は人と競争してきたが競争したらいつか負ける。競争はしない。同じものもない。従業員いると給料が必要なので、一人でやることを選択した。経営になるのは嫌だし、作ることに専念したい。

（2021 年 3 月 29 日のインタビューより）

媒介性の抽出：後継者について、「最近は少ない」としながらも、大学や短大からインターンシップを受け入れてきた。こういう仕事をしたくて、これからどうしたらいいかと聞かれたら、建築系の学生にも職業訓練校を勧めている。

再帰性の抽出：以前は、人と競争してきたが、競争したらいつか負けるので、今は競争をしない。同じものはない。

創造性の抽出：従業員は雇わず一人でやることを選択。経営よりも「作ること」に専念したい。

- F 氏（1950 年生／男性／旭川出身）

F 氏は 1980 年に東川町へ移住し、陶芸工房を運営している。

N：ここでの日常はどんな暮らしか？

F：自分には子どもがいないが、他人の子どもに陶芸を教えている。生活は子どもとの付き合いから始まる。農家から野菜や果物をもらうようになった。玄関に置いてある。農家さんは、お礼はいらないと言う。いつか探しに行ったら、礼を言いに探さな

くていいと言われた。やりづらくなるからと。彼らが自宅用に作っている無農薬栽培で形の悪いものをくれる。でも、これがうまい。いちごを貰った時は驚いた。ホントにうまい。

（2021 年 3 月 30 日のインタビューより）

媒介性の抽出：地域の子どもたちに陶芸を教えている。農家から野菜や果物をもらうようになったとき、探して礼をしようとしたら、やりづらくなると断られた。

再帰性の抽出：玄関に置かれることが習慣化している。自家用の無農薬栽培で、形は悪いが非常に美味しい。

N：出身はどこか？

F：旭川生まれで、大阪・京都、それから東川。東川に来る前は、大学で大阪に 4 年、その後京都に 5 年いた。京都では陶芸家に弟子入りした。師匠から、「ものづくりには地域づくりも大事」と教わった。京都は、田舎でも競争があって、出る杭は打たれる。しかし、新しいこともやらなければならないので大変なところ。それが良いとは思わない。

（2021 年 3 月 30 日のインタビューより）

媒介性の抽出：旭川生まれ。大阪で勉学 4 年、京都で修行 5 年、そして東川へ。

再帰性の抽出：京都での修行中、「出る杭は打たれるが、新しいこともやらなければならない」という競争的な文化風土を実感した。

創造性の抽出：京都の師匠から「ものづくりには地域づくりも大事」と教わり、制作と地域社会の関係性を常に意識している。

N：クラフト街道の由来は知っているか？

F：クラフト街道と言ったのは、今はもう閉めているが、そこにあった木象嵌の工房が最初だと思う。35 年前に、JR 北海道の記者が取材に来て、車内誌に東川のことを、「クラフト街道」という名前で紹介した。それをきっかけに、近隣の工房の人が使うようになり、看板を建てた。その時、役場も動いて協力してくれた。情報もくれるし。

嫌だと言わない。ここで工房を自分でやるからには、良し悪しを選別していい。人の少ない田舎だから悪いこともできない。

（2021 年 3 月 30 日のインタビューより）

媒介性の抽出：クラフト街道という名称は、35 年前に JR 北海道の記者が取材にきて、車内誌で「東川のクラフト街道」と紹介したことがきっかけで広まった。やがて近隣の工房の人が使うようになって、看板を建てた。その時役場も動いて協力してくれた。

再帰性の抽出：自分の工房をここでやる以上、良い悪いは自らの責任で選別すべき。

創造性の抽出：田舎だから悪いこともできない。

N：変わった出来事はあるか？

F：1980 年に東川に移住してから、農家の集まりにも参加して、農家の仕事を勉強した。家庭菜園をやるためでなく、地域を知るためになんでも関わるようにした。自分の専門以外のことにも参加した。協会は希望すれば北欧に研修とかも行かせてくれたが、「やりたいことをやる、無理はしないのがいい」と考えている。

旭川工芸デザイン協会は今年解散するが、異業種の集まりで面白かった。全国的に見ても珍しい会だった。毎年 2 回グループ展をして、一回は地元、一回は地方で開催した。展示会でどれだけ販路を作れる。全国各地に行くこともできた。アメリカやシンガポールでも開催した。木工と陶芸とか、他のものと一緒にやれたのは本当に良かった。台湾の留学生もいた。日本経済界の人も来ていた。でも、東川は旭川から見たら低く見られた。

なぜか、日本芸術展でスウェーデン在住の日本人ピアニストと仲良くなり、東川でもジャズコンサートをやった。経費、ピアノコンサートの集金、予算、コンサート主催など、普通は民間がやるが、東川は役場が主催した。今の町長は前例のないことする。イベントは職員がマネージメントする、「面白い町」だ。

（2021 年 3 月 30 日のインタビューより）

媒介性の抽出：農家の集まりに参加して、農家の仕事を勉強した。地域を知るために、自分の専門以外のことにも参加した。旭川工芸デザイン協会のグループ展を毎年 2 回開催してきた。一回は地元、一回は地方で開催した。この協会で異業種交流を楽しんだ。

北欧研修などに挑戦できる環境があった。全国や海外（アメリカ、シンガポール）で展示会を開催し、販路拡大に努めた。

再帰性の抽出：やりたいことをやるが、無理はしないのがいい。

創造性の抽出：日本芸術展を通じてスウェーデン在住のピアニストと交流し、東川でジャズコンサートを開催した。通常民間が担うイベント運営を、役場が主催し、職員がマネージメントするなど、前例のない取り組みが行われたことを「面白い」と評価する。

N：これからしたいことはあるか？

F：もし出来るなら別荘を東京のド真ん中にほしい。1 週間とか 10 日滞在できるところ。ずっと東川にいると厳しい事がないので、外の目を持つことが必要。都会なら、札幌より東京が良い。

（2021 年 3 月 30 日のインタビューより）

媒介性の抽出：1 週間とか 10 日滞在できる別荘を、東京のド真ん中にほしい。

再帰性の抽出：ずっと東川にいると厳しい事がないので、外の目を持つことが必要。

創造性の抽出：都会なら、札幌より東京が良い。

6 名（A～F 氏）に共通するのは、生活と生業を不可分のものとして営みながら、地域社会に新しい価値や関係性をもたらしている点である。彼らの語りは、単なる創業や経済的自立を超えて、「クラフト的生業を通じて地域と関わる」という実践を通じて、移住起業家が媒介者として機能していることを示している。

以下に、6 名のライフストーリーをモード別（制度的・集合的・パーソナル）の比較（表 4-1）を提示する。この表により、各人物の語りを三つのモードに分けて比較することで、移住起業家と地域との関係性や価値観の違いを可視化する。

表 4-1　モード別ライフストーリー比較表（A～F 氏）

仮名	制度的モード （制度・政策）	集合的モード （地域・共同体）	パーソナルモード （個人の価値・感性）
A	最近は、東川町役場「東川スタイル課」から仕事の依頼がある。行政との関係に変化を感じる。	自身の工房から独立した人々とのつながりがある。地域との関係は希薄だが変化が起きている。	自然との共生、和と洋の融合、職人技の継承を重視している。
B	空き家活用事業で移住した。役場から名札制作の仕事を受託。町内会長を経験する。	月 1 回の飲み会の開催や町内会活動を通じて地域に受け入れられる。	「好きなことで苦労したい」。移住者としての誇りと覚悟をもつ。
C	コロナ禍で町の支援を受けた。町の施策に感謝する。土地の高騰を懸念。	他の職人との交流がある。職人のネットワークの中で活動している。	「誰かのために作る」ことを重視。人間関係を最重要視する。
D	東川町から仕事の依頼がある。町との信頼関係を構築している。	地域の職人として貢献したい。	「好きだから続ける」仕事、技術への誇りを持つ。後継者が現れること望む。
E	地域おこし協力隊の活動に関心がある。土地購入は公共事業縮小による業者の売却が背景にある。	地域の職人や役場職員との長年の関係がある。地域の変化を感じ取っている。	「競争しない」「同じものはない」価値観、創作重視の生き方を実践する。
F	町役場がジャズコンサートの主催や前例のない行政との協働を経験した。	農家との助け合い地域の子どもへ陶芸教育。地域文化の形成に関与する。	「ものづくりには地域づくりも大事」という師匠の教えを継承している。

東川町行政担当者のインタビュー要約

地域移住クラフト起業家が、移住先の地域社会にどのような影響を与えたかを捉えるため行政担当者にインタビュー調査をおこなった。以下にインタビューの要約を記す。

- 0 氏（1967 年生／男性／北海道東川町出身）

0 氏は東川町に生まれる。大学進学で道内の他の町へ移り、就職で東川町役場に戻る。東川町役場東川スタイル課長（インタビュー当時）。

0 氏のインタビューでは、以下のことが確認できた。東川町では家具を中心としたクラフト産業が主要産業であり、住民の約 4 割が従事している。地域の特徴として、クラフト、写真、大雪山、カフェ、水、東川米などの資源があげられる。

移住者との関係においては、1996 年以降の約 25 年間で移住者が人口の半数を超え、地域社会における共存が一般化した。過去には移住者と既存住民の間で摩擦が生じた事例もあったが、現在では移住者の定着が進み、地域構造に大きな変化をもたらしている。

家具・クラフトは戦後、農業者の冬季の仕事として木工が発展し、倒木を製材して家具を生産したことが旭川周辺の家具産業の起源となった。昭和 50 年代に家具生産はピークを迎え、その後、外部人材によってデザインの概念が導入され、「旭川家具」という呼称が定着した。こうした外部人材の関与は、地域産業に新しい価値観をもたらし、移住者が産業発展に寄与する契機となった。

1993 年から 2000 年頃には、旭川市の市街化調整区域の影響で住宅開発が停滞し、東川町で宅地造成が進み、西側エリアがベッドタウン化した。こうした住宅開発は移住者の受け入れを促進し、人口構造の変化を加速させた。2001 年以降、宅地需要は減少したが、町内では人口維持を目的とした施策が展開され、子育て支援や家具・クラフト関連の取り組みが進められた。住宅地の拡大は行われず、人口は維持されている。

（2021 年 3 月 23 日のインタビューより）

- P 氏（1980 年生／男性／北海道滝川市出身）

P 氏は道内の滝川市に生まれる。東川町役場に就職を機に東川町に移住する。東川町役場東川スタイル課長（インタビュー当時）。

P 氏のインタビューでは、以下のことが確認できた。東川町では家具を中心としたクラフト産業の振興において、水や写真イベントと連携したシティプロモーションが実施されており、町は「家具文化・写真文化・大雪山文化」を組み合わせたイメージを発信している。家具・クラフトでは後継者が地域に戻る事例も確認されている。

クラフト関連の取り組みとして、「君の椅子」プロジェクトや学校での木製机・椅子の導入が行われ、地域材を活用する慣習が学校建設時に定着している。これにより、町全体で持続可能な資源利用が進められている。また、クラフト街道を含む町内の工房に

は「生き方や暮らし」にこだわる事業者が多く、地域文化の基盤を形成している。

一方で、クラフト産業の担い手が活躍する場の確保には課題があり、国立公園内での伐採や間伐が禁止されているため、町内の木材資源は約 1,000ha 程度に限られている。木製品の製作には道産材が使用されているが、町内材の供給は難しく、過去に採取したストックを活用している。東川町は過去に大規模工場誘致で失敗し、中国移転による打撃を受けた経験から、比較的小規模なクラフト産業への転換を進めてきた。

人口動態に関しては、1994 年に約 6,900 人まで減少した人口が、2022 年 6 月には 8,500 人を超えた。家具産業の従事者は町内で最も多く、家族を含め数千人規模である一方、米作従事者は 1,000 人未満である。クラフト事業者には国の支援がほとんどないため、町は「東川スタイル課」を通じて情報発信を行っている。

さらに、町は「町全体がショールーム」という取り組みを進め、2021 年には 30 歳以下のアマチュアを対象とした世界規模の家具デザインコンペも実施した。こうした取り組みは、移住者を含む若年層の参加を促し、地域産業と人口維持の双方に寄与している。（2022 年 6 月 2 日のインタビューより）

4.3　ライフストーリー分析の結果

東川町の移住起業家（事例 A～F）の語りは、ⅰ.「現在の生活・生業」からは地域社会との交流、ⅱ.「これまでの人生」からは移住・起業に至る経緯、ⅲ.「転機となった出来事」からは移住・起業したきっかけ、ⅳ.「これからの人生」からは将来の展望、という探索的な 4 つの視点から整理できた。各事例の逐語には個別の文脈が反映されつつも、共通のパターンが見出される。以下に分析の結果を 4 つの視点ごとに特徴をまとめる。

ⅰ.「現在の生活・生業」: 地域社会との交流

A 氏は、「人様はともかく、自分はそうありたい」と自然との共生を軸にした暮らしを実践している。B 氏は、「工房は 6 人。近辺の仲間とは月一で、ここで飲み会をやっている」と地域との交流を日常的に行っている。「役場の方も課長クラスの考えがあれば、すぐに動いてあげようと思っている」と、行政との柔軟な関係性も示している。C 氏は、職人同士のネットワークを築いている。「誰かのために作るのは良いし、自分もうれしい」と語り、ものづくりの根底には他者との関係性がある。D 氏は、「町にはお世話になっている。こんな小さな工房だって仕事まわしてくれる」と語り、地域との信頼関係を重視し、専門性の高い技術に誇りを持つ。E 氏は、「お客さんは全国にいる。「デザインから全部やる」と個人注文に応じて制作している。また「この商売は奥さんが強くて偉い」と語るように、家族との協働も生業の一部となっている。F 氏は、「農家から野菜や果物をもらうようになって。礼はいらない」と、地域の助け合いの精神に支えられた暮らしを送っている。「生活が子どもとの付き合いから始まる」と語り、陶芸教室を通じて地域との関係性が築かれている。

各事例に共通して見られるのは、地域社会との深い関係性を基盤とした生活と仕事のあり方である。職人同士の交流、行政との協働、家族との協働による繋がりが生業の持続性を支えていることが明らかである。ものづくりは単なる生業ではなく、他者との関係性の中で意味づけられた営みとして語られている。

ⅱ.「これまでの人生」: 移住・起業に至る経緯

A 氏は「旭川でナンバーワンの職人さんが来て」と、職人との出会いが事業の基盤となった。「長く使う事もできるデザインや作り方を広めたいと思う」というものづくりの理念もある。B 氏は「好きなことで身を立てるっていうのが一番大変」と、家具業界の厳しい状況の中で事業を継続してきた。「結構、煙たがられた。その後、よく一緒に飲んだ」と語るように、職人ネットワークの中で関係性を築いてきた。C 氏は「建築はこっちの意見を聞かないけど、家具なら好きに提案して出せる」と、建築から家具への転向を経て独立した。「人を楽しませることが喜んでもらえることが、こちらも楽しい」

と語るように、職業観が形成されている。D 氏は「中卒で丁稚ですよ。木工一筋」、長年の職人経験を経て晩年に独立した。「趣味でやっている」と語るように、仕事と生活が融合している。E 氏は「日本の家具の作りかたを知るために 2 年旭川の家具会社にいた」、国内外の経験を経て北海道に根を下ろした。「道産材よりフィンランド材の集成材が安く入手できる」と語るように、理想と現実の間で折り合いをつけている。F 氏は「師匠からものづくりには地域づくりも大事と教わった」と語り、京都での修行を通じて地域との関係性の重要性を学んだ。「出る杭は打たれる。しかし、新しいこともやらなければならない」というように、創作と社会性の両立を模索してきた。

移住・起業に至るまでの経緯には、師弟関係、出会い、業界経験、価値観の転換が含まれている。それぞれの人生の中で、職業観やものづくりの理念が形成されていく過程が語られており、職人としてのアイデンティティが徐々に確立されていく様子が見える。

iii.「転機となった出来事」: 移住・起業したきっかけ

A 氏は「理想郷は無いと思った。ここは見捨てられた場所だった」といい、7 年間の探求の末に東川町へ移住した。「旭川でナンバーワンの職人さんが来てくれ、始めた頃には何年かいてくれて。ここで引退してくれて、私はありがたかったし、本当に幸運だった」と語るように、職人との縁が転機となっている。B 氏は「どうせ苦労するなら自分の好きなことで苦労したい」と語り、家族との時間を見直し、クラフトの道へ進んだ。「骨を埋めるから売ってくれって言って」というように、土地との出会いが移住の契機となった。C 氏は「家具部品を作る会社にいて、そこがつぶれて、36 歳くらいで独立した」。きっかけは会社の倒産で独立を決意した。「機械とか入れてもらって。それはね人のおかげ」と語るように、人との信頼関係が事業の立ち上げを支えた。D 氏は「火事になってからは。自分でやるようになってからは...精神的には充実していて」と語り、火災をきっかけに創造的な働き方へ転換した。「木工しかなくて、それでやっている」と語るように、自己の価値観に基づいた選択が見られる。E 氏は「誰もこないから。とにかく広いところが欲しかった」と語り、広い自然環境への憧れから移住を決断した。「木を使っているからその分植えたい」というように、自然への配慮が移住の動機となっている。F 氏は「農家の集まりにも参加して、地域を知るためになんでも関わるようにした」と語り、地域との関係構築を重視した移住後の活動が転機となった。「役場が主催した。今の町長は前例のないことをする」というように、行政との協働も転機の一部となっている。

移住や起業のきっかけには、会社の倒産、火災、理想とのギャップ、土地との出会いといった外的な出来事が転機となる一方で、「好きなことで苦労したい」「自然の一部である」といった内的な動機や価値観の変化も重要な要素となる。これらの転機は、人生の方向性を見直す契機として機能していることがわかる。

ⅳ.「これからの人生」：将来の展望

A氏は「クラフト街道っていう名称には関わってなない。しかし最近は変わってきて、東川スタイル課が出来てからは、今までと違うスタイルで仕事を受注している」と語り、行政との新たな関係性が生まれている。B氏は「もう大手を振って歩いている」と、地域に定着した実感と誇りを持っている。また「Bさんが苦労して開拓してくれたからこそ、我々はここまで来ることができた、と言ってくれたんです」と語るように、後続者からの感謝が人生の肯定につながっている。C氏は「小さくやっていかないと」と、後進の動向を見守りながら慎重に事業を継続している。「誰かのために作ることが大事」というように、職人としての姿勢を貫いている。D氏は「80歳だからいつどうなるかわからない」と語るように、人生の終盤における不確実性も見つめている。E氏は「競争しない。同じものもない。一人でやるという選択した」と、創作に集中する生き方を貫いている。新しく始める人には「職訓（職業訓練校）を勧めている」と語るように、若者への技術継承にも関心を寄せている。Fさんは「東京のド真ん中に別荘がほしい。外の目を持つことが必要」と、都会との接点を持ち続けることで自己を更新しようとしている。将来に向けて、後継者への期待、若者への助言、行政との新たな関係、都市との接点の維持といった技術や価値の継承と自己の更新を模索する姿勢が見えた。人生の終盤に差し掛かる職人も、自らの経験を次世代に伝えたいという意識を持ち、地域や社会との関係性を再構築しようとしている。

4.4　小括：東川町の事例の特徴

本章では、北海道東川町に移住し起業した6名（A～F氏）を対象にライフストーリー分析した。彼らの語りを「現在の生活・生業」「これまでの人生」「転機となった出来事」「これからの人生」の4つの視点から整理した。これらの語りには個別の文脈が反映されつつも、共通するパターンが見いだされ、地域社会との関係性や職人としてのアイデンティティ、そして変化への適応と学習のプロセスが浮かび上がった。

まず、「現在の生活・生業」に関する語りでは、すべての語り手が地域社会との何らかの関わりを持っていることが確認された。これは、地域との交流が生活実践や職業活動において不可欠な要素となっていることを示している。自然との共生を語る中で国際的な技術交流に触れる語りからは、地域と世界をつなぐ視点がうかがえた。また、地域住民や行政との柔軟な関係性を築き、協働や調整を実践している様子も見られた。さらに、職人同士のネットワークによる技術・情報の共有、地域からの仕事への感謝と専門技術への誇り、家族との協働を生業に組み込む姿勢、地域の助け合いに支えられた暮らしなど、多様な実践が語られている。これらは、移住起業家の職業的実践と地域社会との相互作用が、生活や生業におけるエンゲージメントの基盤となることを示している。

次に、「これまでの人生」に関する語りでは、クラフト人材としての修行や業界経験が、現在の価値観や技術の基盤として機能していることが明らかとなった。これらの経

験は単なる職歴にとどまらず、キャリア形成の中核をなしている。特定の職人との出会いを契機に事業を立ち上げた事例や、厳しい業界環境での努力を経て現在に至った経歴を語り、建築から家具製作への転向や晩年での独立など、キャリアの転機やタイミングには個人差がある。また、国内外での経験を経て地域に根ざした語りや、修行を通じて地域との関係性の重要性を学んだ語りも見られた。これらは、キャリア形成が価値観の醸成と社会との関係性の中で構築されていることを示唆している。

そして、「転機となった出来事」に関する語りでは、人生やキャリアの方向性を大きく変える契機として、外的な出来事や出会いが共通して語られていた。火災や会社の倒産といった突発的な出来事、あるいは師匠や土地、地域との出会いなどが、選択や価値観の転換を促す重要な契機となっていた。転機の内容や受け止め方には多様性があり、職人との縁を通じて事業の方向性を見出した語りや、土地との出会いをきっかけに移住を決断した語り、企業の倒産を機に独立した事例、火災を経て創造的な働き方へ転換した事例などがあった。自然環境への憧れや、地域との関係構築を通じて新たな展望を得た語りも含まれ、転機が危機だけでなく、価値の再発見や新たな関係性の構築の契機となることが示されている。

最後に「これからの人生」に関する語りでは、創作への集中や自己の理想の実現を志向しつつ、後継者の育成や地域との協働といった社会的役割との両立を模索する姿勢が共通して見られた。将来展望は単なる職業計画にとどまらず、自己の物語を再構築し、社会との関係性を再定義する過程として語られている。行政との新たな関係性を築き、地域との協働の可能性を広げる語りや、地域に根ざした生活と仕事への誇りを語る姿勢からは、地域社会との一体感がうかがえる。一方で、事業継続への慎重な姿勢や、技術継承への希望とともに人生の終盤における不確実性を語る事例もあった。創作に専念することで理想を追求する生き方や、都市との接点を保ちながら自己を更新しようとする語りも見られ、将来の展望が自己の物語の再構築と密接に関わっていることが示された。

他方、行政担当者への聞き取りでは、次のことが明らかになった。東川町では、移住者の増加が地域社会の構造変化に大きな影響を与えている。1996 年以降、移住者は人口の半数を超え、地域における共存が一般化した。クラフト産業は、地域移住クラフト起業家が地域に参入し定着するための重要な媒介となっており、産業への参加を通じて移住者は地域文化や生活様式に関与している。

クラフト関連の取り組みとして、例えば「君の椅子」プロジェクトや学校家具への地域材導入は、移住者を含む住民が地域資源を共有し、持続可能な生産様式を形成する契機となっている。また、家具デザインコンペや「町全体がショールーム」構想などのイベントは、新たな移住者や若年層の参加を促し、地域社会とのエンゲージメントを強化している。こうした動態は、地域移住クラフト起業家、が単なる人口増加要因にとどまらず、地域文化の再編や産業振興に積極的に関与する存在へと変化していることを示している。

第 5 章　事例研究 2：高知県佐川町

5.1　佐川町の地域移住クラフト起業家

高知県高岡郡佐川町は、歴史的文化資源が豊富な地域であり、特徴的な取り組みが地域おこし協力隊の運営する「さかわ発明ラボ」を中心に進められている。調査対象となった 7 名の地域移住クラフト起業家は、地域の伝統と現代的な感性を融合させた創造的実践を展開し、地域住民との協働を通じて地域課題の解決に取り組んでいる。地域資源の再発見を通じて、地域の価値観や規範に変容をもたらしている。特に若年層や女性の社会参加を促進する活動が、地域の多様性を高める契機となっている。

本章で取り上げる佐川町の事例は、商品開発、子ども向けワークショップ、レザークラフト、立体造形、染色、農園、発明活動という多様なクラフトの生業を営む、あるいは試行する 7 名の地域移住クラフト起業家（G〜M 氏）である。彼らのライフストーリーは、個々のキャリアや生活の延長線上に移住と起業が位置づけられており、地域社会との関わりが重層的に絡み合っている点に特徴がある。

個人情報に関わる事柄や出来事については、調査対象者のプライバシーに支障のない表現にしている。文中の N は筆者、G・H・I・J・K・L・M は調査対象者を表している。また Q は行政担当者を表している。

5.2　ライフストーリーの分析

- G 氏（1998 年生／女性／神戸市出身）

G 氏は、大学でプロダクトデザインを学び、卒業後 2021 年に佐川町へ移住した。

N：ラボではどんな活動をしているか？

G：さかわ発明ラボでは、放課後発明クラブで子どもたちと一緒にものづくりやプログラムを考え、遊んでいる。それ以外に役場から依頼された看板やチラシの作成を行う。さらに、夢まちランドという川沿いの地域支援センターにも訪問している。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：　役場からの依頼を受ける他、地域の支援センターにも通っている。

創造性の抽出：　子どもたちと一緒にものづくりを行うプログラムを企画した。

N：住まいはどこか？

G：現在の住まいはラボの近くで、町が所有する物件の中から選んだ一軒家に一人で住んでいる。古民家で畳敷きの広い家である。もともと車を持っておらず、経済的にも余裕がなかったため、町中に住みたいと希望し、複数の町有物件の中から最も近い場所を選んだ。卒業後は退去しなければならず、新しい物件を探している。佐川には空き家が多いが、所有者が不明な場合が多く、管理者を特定するのが難しい。例えば「誰々のおばちゃんの家だが、娘さんに預けたはずなのに最近見ていない」など、管理が曖昧なケースが多い。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：町が所有する物件の中から近い場所を希望した。

再帰性の抽出：卒業後は退去しなければならず新しい物件を探す必要があった。

創造性の抽出：昔ながらの古民家で畳が敷かれた広い家での暮らし。

N：いつこちらに来たか？

G：2021 年 4 月に佐川へ来た。来る前には、農家とコラボしてジューススタンドを開くなどの構想を考えていた。3 年で形にしたいと思っているが、現在の状況では難しさも感じている。ただ、地域には資源が多く、それを活かして何かをしたいと考えている。

N：佐川に来たきっかけは？

G：大学卒業にあたり就職先を探していたが、どんな形でもいいので面白いことがしたいと思っていた。自分の学んだことを活かし、関われる仕事を希望していた。その中で「日本仕事百科」というサイトで、求人というよりレポート記事のような形で紹介されていた「さかわ発明ラボ」を見つけた。記事を読んで興味を持ち、実際に訪問し、ほぼ飛び込みで参加することになった。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：農家と連携しジューススタンドを企画した。

再帰性の抽出：現在の社会状況では実現が難しいと感じていた。

創造性の抽出：地域には豊富な資源があり、それを活かして新しい取り組みをしたい。

N：将来はどんなイメージか？

G：この辺りは暖かく、食べ物も美味しく、住みやすい環境で時間の流れも心地よい。その中で、自分にできることとして、顔も覚えてもらえたので、今後は地域と一緒にワークショップを企画するなどの形で関わるかもしれない。また、商品開発にも取り組める余地がある。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：顔を覚えてもらいワークショップを共同で企画するなど、協働できる可能性があると感じていた。

創造性の抽出：ワークショップを企画や商品開発にも取り組めるのではないかと考えていた。

- H 氏（2000 年生／女性／東京都出身）

H 氏は、東京の服飾専門学校卒業後、佐川町へ移住した。2020 年 4 月に佐川町へ移住し、現在 3 年目である。

N：H さんが佐川に来たのはいつか？

H：はい、2020 年 4 月で、現在 3 年目になる。当初は佐川のことを何も知らず、地区の違いも分からなかった。移住者はスーパーに近い場所を選ぶことが多いが、私は少し離れた斗賀野地区を選んだ。ここではそれぞれが自分の暮らしは勝手にしている。移住した当初は自転車も車もなく、電車は 1 時間に 1 本程度で、最初の 1 カ月はラボまで徒歩で約 1 時間かけて通った。現在は原付で通っている。当時、緑の中を歩く時間が最高で、車は不要だと感じた。自然を身近に感じたいという思いが、この場所を選んだ。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

再帰性の抽出：何も知らない状態で移住し、当初は移住者が選ぶようにスーパーに近い場所を選ぶと考えていたが、自分は少し離れた場所を選んだ。

創造性の抽出：緑の中を歩くことが心地よく、車は不要だと感じるほど自然を身近に感じたいと思い、その風を感じるために移住した。

N：現在の仕事はどのような内容か？

T：ラボでの主な仕事は広報だが、発明クラブの運営が中心である。発明クラブは町内の子どもたちを対象に、隔週でものづくりを行うプログラムで、今年は 36 名の子どもたちが参加している。昨年は 24 名で実施し、1 年間を通じて子どもたちの成長過程を見守ることを目的としていた。募集定員は 25 名だったが、応募は 50 名に達し、町民の要望に応えるため、今年から 36 名に拡大した。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：町民の要望に応える形で 36 名の参加枠を設け、今年から実施している。

再帰性の抽出：1 年間を通して子どもたちの成長を見守り、その過程を理解できるようにすることを目的に取り組んだ。

創造性の抽出：発明クラブを中心に、隔週でものづくり活動を行っている。

N：佐川町へ来たきっかけは？

H：学生時代、アルバイトで貯めたお金で初めて一人旅をした場所が高知だった。日本地図を広げ、四国は暖かく平和そうだという感覚で選び、香川はうどん、愛媛はみかんと特産品を知っていたが、高知だけ情報がなく興味を持った。軽く話を聞いた際に、高知は食べ物や海の印象が強く、行ってみたいと思った。旅で訪れた伊野の仁淀川で見た景色に心を奪われ、全身に血が巡るような感覚を覚え、卒業後はここに住むと決意した。仁淀川流域にあるものづくりの施設が魅力的だったことも理由の一つだった。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：学生時代にアルバイトで貯めたお金を使い、初めて一人旅をした。

再帰性の抽出：日本地図を広げ、卒業後はここに住もうと考えた。

創造性の抽出：仁淀川流域にあるものづくりの施設に強い魅力を感じていた。

N：佐川での仕事のチャレンジは？

H：仕事はまだ始まったばかりだが、保育士資格を取得して保育関連の仕事に取り組みたいと考えている。また、時間やお金に縛られず、森の中でカフェや相談室を開設すること、木材を使った洋服づくりにも挑戦したい。さらに、山を購入するという夢もある。こうした構想の背景には、最近の若者がスマホにとらわれ、ストレスを感じやすい状況があると考えていることがある。自分自身もそうだったため、若者の自殺率の高さに危機感を持っている。過去に、自殺を考えていた若者の話を聞き、「あなたに話して生きようと思った」と言われた経験があり、話を聞くだけで心が軽くなる環境を作りたいと強く思っている。子どもの成長にも関わりながら、こうした場を作る目標がある。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：話を聞くだけで子どもたちがリラックスできるような環境を整えたいと考えていた。

再帰性の抽出：子どもたちはストレスを感じやすいと考えており、それは自分自身の経験からも理解していた。

創造性の抽出：保育士資格を取得して保育関連の活動を進めたいと考え、森の中でカフェや相談室を開く構想や、木材を使った洋服づくりに挑戦するアイデアを持っていた。

- **Ｉ氏（1998 年生／男性／和歌山県出身）**

Ｉ氏は舞台美術を学び、埼玉県で立体造形職人として勤務していたが、独立志向から退職し、2020 年に佐川町へ移住した。

N：どんな活動をしているか？

I：ものづくりを続ける中で、佐川に来てできることが増えた。もともとはアナログなものづくりが中心で、パソコンは全く触れなかった。佐川に来た当初、協力隊の女性の先輩がいて、データ作成が得意な方から約 1 年間みっちり教わった。その結果、レーザー加工やデータ作成、町の仕事で Illustrator を使った制作などができるようになった。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：町の仕事を受け、イラストレーターを使って作業するうちにできるようになった。

再帰性の抽出：佐川に来た当初はパソコンを全く扱えなかったが、集中的に教えてもらい習得した。

創造性の抽出：レーザーを使った加工やデータ作成、イラストレーターによる制作に取り組んでいる。

N：活動はいろいろしているようですね？

I：今取り組んでいる佐川オリジナルレザーができれば、絶対いける。レザークラフトには可能性を感じているが、もう一つ何か掛け合わせる要素が必要だと思っている。佐川にはデジタル機材があり、素材との距離も近いので、革の鞣しも自分でできる環境がある。素材を直接受け取り、加工し、誰でも作れるように設計することで、佐川オリジナルのレザー製品を生み出せると考えている。素材は無料で入手できる場合が多く、提供側は廃棄に困っているため、むしろ助かる状況だ。例えば須

崎市では町の事業として処理しており、産業廃棄物扱いになるため、捨てるのに費用がかかるものを無償で受け取っている。

一方で、役場に説明する際には「世のため人のため」といった公益性を求められるが、私は町全体に貢献するというより、関わってくれた人に恩返ししたいという思いが強い。そのため、役場との調整には苦労しており、今後どう進める難しさはある。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出:役場を相手に取り組みを進めることを検討したが、難しさを感じていた。

再帰性の抽出：自分の中で何かが足りないと感じており、役場の承認を得るには「世のため人のため」といった理念を書く必要があるが、実際には考えていなかった。

創造性の抽出：別の要素を掛け合わせて、佐川オリジナルのレザー製品を生み出せば成功できると考えていた。

N：佐川に来る前はどんなことをしていたか？

I：佐川に来る前は職人系の仕事をしていたが、職場は昔ながらの気質が強く、「仕事なんか絶対休むな」と、休みを取ることが難しい環境だった。そんな中、農家をしている友人から「さかわ発明ラボが合いそうだ」と聞き、確認すると応募締め切りは翌日だった。面接に行くため、職場に「面接に行きたいので辞めます」と伝え、退職を決意した。作品の題名もつけずポートフォリオを送り、面接では町長とも話し、「後ろはない」という覚悟で挑んだ。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：佐川町長から話を聞かれ、今後の方向性について意見を求められた。

再帰性の抽出：「仕事は絶対休むな」という状況に直面し、その結果、仕事を辞める決断をした。

創造性の抽出:農家をしている友人に相談し、これは実現できるかもしれないと感じた。

N：子どもたちとの関わりは？

I：現在、発明クラブには関わっておらず、子どもと接する機会はオープン日に来る子どもたちだけになっている。発明ラボでは、スタッフがサポートしすぎている印象があり、子どもたちには自分で考えて実行できる力を身につけてほしいと思っている。大人が「簡単にできるでしょ？」という感覚で頼むことがあるが、実際にはものづくりには多くの時間と苦労が必要である。企画側やクラブ運営側はその点を理解していない場合があり、子どもたちも「作りたいと言えばすぐできる」と思い始めている。それは良くないと感じており、子どもたちが自分で考え、試行錯誤できる環境を目指したい。

N：施設内での課題はあるか？

I：施設内でも同様の課題がある。私やLさんは「ものを形にする」「作る」という工程に特化してきたため、その過程にどれだけの苦労や時間がかかるかを理解している。しかし、企画側やクラブ運営側はその点を十分に理解していない場合がある。結果として、子どもたちも「作りたいと言えばすぐできる」と思い始めている。それは良くないと感じており、子どもたちには自分で考え、試行錯誤しながらものづくりできる力を身につけてほしい。

2022年8月4日のインタビューより

媒介性の抽出：子どもたちと関わる機会としては、オープン日の交流がある。

再帰性の抽出：スタッフが子どもをサポートしすぎていると感じ、自分で考えて行動できる子になってほしいと思い、その状況は良くないと考えていた。

創造性の抽出：子どもが自分で考えて行動できるようになることを目指し、簡単に実現できる方法があると考えていた。

- J氏（1980年生／女性／大阪府出身）

J氏は、佐川町に来る前は大阪の職業訓練校で2年間ビジュアルデザインを学んでいた。偶然、さかわ発明ラボの募集イベントに参加し、2020年に佐川町に移住した。

N：佐川に来たきっかけは？

J：佐川に来る前は大阪の職業訓練校でビジュアルデザインを2年間学んでいた。失業中で雇用保険の補助を受けながら、DTPなどデジタルデザインの知識を身につけた。

転職前は医療事務をしていたが、医療事務で学費しっかり返したあとは、この仕事を続けるのは違うと感じ、以前から興味のあったデザイン系に進むことを決意した。学んだスキルを活かせる職場を探す中で、売れるものだけを考える仕事ではなく、使う人の顔が見える環境で働きたいと思っていた。そんな時、発明ラボの募集イベントに東京や大阪で参加し、面白そうだと感じてここに決めた。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：発明ラボの募集イベントで東京や大阪を巡っていた際、次の人材募集イベントに偶然参加した。

再帰性の抽出：この仕事を続けるのは違うと感じ、売れるものだけを考えるより、使う人の顔が見える仕事に携わりたいと思っていた。

創造性の抽出：デジタル DTP の知識を活かせる場を求め、面白そうだと感じてここに決めた。

N：大学では何を専攻していたか？

J：大学では工芸科の染色専攻で、織物のクラスに所属していた。卒業時には西陣などで職人になることも考えたが、生活が厳しいと感じ、まずは学費を返すために医療事務の仕事に就いた。医療事務は比較的負担が少ない仕事だったので、空いた時間で織や染めを趣味として続けたいと思っていたが、実際には場所を借りることもできず、そのまま時間が過ぎた。「食べていけない」という不安はあったが、借金を返し終えた後、再びやりたいことに挑戦しようと考え、現在はラボで活動している。ただ、卒業後の不安はあるものの、佐川での暮らしは大阪に住んでいた時とあまり変わらず、佐川は大阪にいた頃とあまり変わらず、新しいものを受け入れてもらいやすい環境だと思う。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

再帰性の抽出：「食べていけない」という不安を抱え、借金を返し終えたことで区切りをつけようと考えた。さらに、ラボ卒業後の生活への不安が重くのしかかっていた。

創造性の抽出：空いた時間に趣味として織や染めを続けたいと考え、新しいものを受け入れてもらいやすい環境を望んでいた。

N：見せてもらった作品、素晴らしい。

J：ありがとうございます。大学時代は草木染めに挑戦したかったが、材料の入手や下ごしらえが難しく、化学染料で作品を作っていた。佐川に来てからは、地域の素材を活かした染色に取り組みたいと思うようになった。佐川は植物学者・牧野富太郎の出身地であり、植物を活かした作品は地域の共感を得やすいと考えたため、大学時代には扱わなかった植物を採取し、染色をやり始めた。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

再帰性の抽出：せっかく佐川に来たのにという思いがあった。

創造性の抽出：地域の素材を活かし、牧野富太郎の出身地という特徴を生かした植物に関連する取り組みなら、共感を得やすいと考えていた。

N：将来、弟子を育てる予定はあるか？

J：弟子を育てる予定はない。人の世話を焼くことはあまり得意ではないためである。今後の展望としては、大学時代に学んだことを活かしたいという思いがずっとあり、田舎に来てから「それいいね」と言ってくれる人が増えたことも後押しになっている。具体的には、染色工房を作り、佐川の素材を使った商品を制作しながら作家活動を行いたい。また、その技術を広めるためにワークショップや講師活動もしていきたい。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：田舎に来てから取り組みを「いいね」と評価してくれる人が増えた。

再帰性の抽出：大学時代に学んだことを全く活かせないまま過ごしてきたが、どこかで活かしたいという思いを持ち続けていた。

創造性の抽出：染色工房を作り、佐川の商品を制作しながら作家活動を行い、その取り組みを広めるためにワークショップの講師も務めたいと考えていた。

- **K 氏（1979 年生／女性／兵庫県出身）**

K 氏は、フリーランスのデザイナーとして活動していたが、コロナ禍を契機に暮らし方を見直す決意をして 2020 年佐川町に移住した。

N：これまでどんな仕事をしていたか？

K：最初は靴下やレッグウェアのデザインをしており、レディース向けの足回りのアイテムを手掛けていた。

N：こちらに来たきっかけは？

K：きっかけは2020年頃で、コロナ禍が大きな転機だった。このままでは違うと強く感じ、「地球人やり直そう」と思ったことが始まりだった。自分が心地よく暮らすための方法を考え始め、フリーランスのデザイナーとして複数契約していた仕事を、後先考えずにやめる決断をした。すべてをやめたわけではないが、時間ができたことで一人旅を始め、自然の多い場所を求めて宮古島や京都、滋賀などを訪れた。その中で、高知という名前や情報が周囲に頻繁に現れ、強く意識するようになった。そこに「ものづくりしているチームがあります」と林業セッションで紹介され、佐川町で「すべて揃う」と感じ、移住を決意した。

2022年8月4日のインタビューより

媒介性の抽出：高知に関する情報が周囲に多く見られた。

再帰性の抽出：このままでは違うと感じて、やり直そうと決意した。

創造性の抽出：自分が心地よく暮らすためにはどうすべきかを考えた。

N：今どの辺に住んでいるか？

K：現在は便利な場所に住んでいるが、もともと小さな山の近くで暮らすことを想定して佐川に来た。今後3年の間に良い場所が見つかれば、そこに小屋を建ててタイニーハウスを作りたいと考えている。また、以前からやりたかった畑仕事にも取り組んでおり、運良く有機農の畑を少し使わせてもらっている。佐川に来て感じるのは、面白い企画、やりたいことや作りたいものがある時、それがすぐ現実化するということ。ラボやものづくりのチームがあり、必要な環境が整っているのが魅力だ。

2022年8月4日のインタビューより

媒介性の抽出：やりたいことや作りたいものがあると、すぐに現実化できると感じていた。

再帰性の抽出：良い場所が見つかれば、そこに小屋を建てながらタイニーハウスを作ろうと考えていた。

創造性の抽出：面白いことを実現したいという思いを持っていた。

N：いまの暮らしはどうか？

K：今の暮らしは、ネイティブな生活に近づいていく感覚があり、不思議な体験だと感じている。テクノロジーが広がった時に一部の人が拒否反応を示したように、自然回帰も一時的な違和感があるが、いずれ普通になると思う。重要なのは、うまく使いこなせるかどうかだ。一人旅をしていた1年間で、肌感覚や第六感のようなものが研ぎ澄まされていくのを実感した。人間も自然の一部であり、自然の中に身を置くことで本来の感覚が戻ってくると強く感じている。

2022年8月4日のインタビューより

媒介性の抽出：うまく活用できるかどうかが課題だと考えていた。

再帰性の抽出：自然回帰は一時的な違和感があるが普通になると思う。

創造性の抽出：人間も自然の一部であり、自然の中に身を置くことで本来の感覚が取り戻せると考えていた。

N：これからの未来のイメージは？

K：やりたいことの一つは、コミュニティ、村のようなものを作ること。これは佐川に来る前からイメージしていたことで、必ず実現したいと思っている。自分のやりたい暮らしの延長線上にあるもので、まずは自分の暮らしを整えることから始めるつもりだ。そんな生き方でいいんだと、楽しんで取り組んでいるうちに、自然と人や活動がつながっていくと考えている。また、縄文時代の暮らしに強い憧れがあり、その価値観を取り入れたコミュニティづくりを目指している。

2022年8月4日のインタビューより

媒介性の抽出：楽しんで取り組むうちに、つながりが生まれていくと感じていた。

再帰性の抽出：自分の暮らしを築くことから始める必要がある。

創造性の抽出：コミュニティを作りたい思いがあり、村のようなかたちをイメージ。

N：この場所で次の世代に対してどんなイメージを持っているか？

K：次の世代に対して具体的に何かをするのは苦手で、デザイナー時代に役職を打診された時も「やりたくない」と断ったほどだ。自分は楽しいことをしていたいし、この場所はやりたいことをやらせてもらえる環境だと思う。次の世代には、純粋な自分に気づき、それを尊重できる人であってほしい。また、変化する自分の心に素直であり、その感覚をキャッチして行動に移せる人になってほしい。これは言葉で伝えるのが難しく、感覚的なことなので、どう伝わるかは難しいと感じている。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：ここはやりたいことを実現できる場所だと感じていた。

再帰性の抽出：変化する自分の心に素直であり、行動に移せることが大切だ。

創造性の抽出：純粋な自分に気づき、それを尊重してほしい。

- L 氏（1976 年生／男性／高知県南国市出身）

L 氏は東京・神奈川で映画セットや遊園地の造形物製作に従事していたが、コロナ禍を契機に、2021 年に地元南国市に隣接する佐川町へ移住した。

N：造形の仕事ができると、仕事には困らないか？

L：高知県で造形の仕事だけで食べていくのは難しいと思う。ただ、造形業界では昔は手作業が中心だったが、現在は 3D でパソコンを使って制作するのが主流になっている。私は東京にいる間にその技術を磨いてきたので、東京から仕事を受け、こちらでパソコンをつかって制作してデータを送るという働き方が可能になっている。田舎に行っても外と繋がれる仕事の仕方がある。また、田舎ではこうした人材が少なく、私が来る前は 3D プリンターがあっても使える人がいなかった。機械の操作だけでなく、3D データを作成する技術がなければ本当の意味で活用できない。そうした技術を活かし、町の役に立ちたい。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：東京から仕事を受け、パソコンで制作したものを送ることができる時代になってきた。

再帰性の抽出：高知県で造形の仕事だけで生計を立てるのは難しいと感じていた。

創造性の抽出：町の役に立ちたいという思いを持つ。

N：南国市から神奈川に行ったのか？

L：はい、私は高知県出身で、大学進学をきっかけに東京へ行き、その後神奈川に住みました。大学卒業後は東京近郊で友人と共同アトリエを借り、映画のセットや遊園地の造形物を作る仕事をしながらアート活動を続けていました。約 25 年間、東京・神奈川で過ごした。

佐川町を選んだ理由は、ものづくりが得意で、その技術を生かし、経験を生かして生まれ育った高知県に貢献したいと思ったこと。検索でさかわ発明ラボを見つけ、面白そうな活動をしていたことがきっかけ。また、須崎の街角ギャラリーに帰省時に通っており、そこの方から発明ラボを勧められたことも決定要因だった。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出:須崎の街角ギャラリーの関係者から、この場所を勧められたことがある。

再帰性の抽出：ものづくりが得意で、その技術を生かし、生まれ育った高知県に役立つことができないかと考えていた。

創造性の抽出：大学近くで友人と共同アトリエを借り、仕事をしながらアート活動を続けていた。

N：ラボのメンバーになったのは何年か？

L：地域おこし協力隊として活動しており、現在 2 年目。2021 年春に佐川に来た。私が来る前は、ラボに 3D プリンターはあったものの、使える人がいなかった。機械の操作だけでは不十分で、3D データを作成する技術がなければ本当の意味で活用できない。私はその技術を持っているので、町の役に立てればと思っている。手作業も得意だが、今のものづくりは 3D 設計が求められる時代になりつつあり、田舎ではこうした技術に触れる機会が少ないため、私のスキルを活かして、都会で培った技

術を地元に還元したい。

N：どうして高知の佐川に？

L：人生の半分以上を東京・神奈川で過ごしたので、そろそろ高知に戻りたいと思った。コロナ禍で向こうでの活動が難しくなったこともあり、帰る決断をした。

家族は南国市に母と妹がいる。あとカツオの厚さが違います。田舎暮らしは性に合っているが、森の中で住みたいという強い憧れはなく、もともと田舎出身なので特別には感じていない。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：自分が来る前は、そこにある 3D プリンターは使われていなかった。機材はあったが、使える人がいなかった。

再帰性の抽出：人生の半分以上を東京・神奈川で過ごしたため、高知に帰ることを考えていた。

創造性の抽出：自分のスキルが求められる場で役立てればと考えている。

N：田舎の特別とは？

L：田舎に憧れて来る人にはリスクがある。その点、3D を覚えたことで保険ができた。私はスキル面でやっていけると判断して移住した。ただ、これは誰にでも当てはまるわけではない。3D でもデジタルでもアナログでも、そこに到達するまでには時間がかかり、負担も大きい。デジタルや 3D を扱う場合でも、アナログを経てきた経験は重要である。スキルを伝えることは容易ではない。3D ひとつ取っても、きちんと取り組むには多くの時間が必要になる。それを一般の人に、簡単で手軽で面白く、分かりやすく伝えるためには工夫が求められる。興味を持ってもらうことも重要であり、その点を意識している。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：3D に興味を持ってもらうことが大切だと考えながら取り組んでいる。

再帰性の抽出：そこに到達するまでには時間がかかり負担もある。

創造性の抽出：簡単で手軽に、面白く、分かりやすく伝えることを目指している。

● M 氏（1974 年生／男性／神奈川県出身）

M 氏は、芸人・発明家として都会で暮らす中で「人間の野生とは何か？」その感覚を取り戻したいという思いから 2022 年に佐川町に移住した。

N：佐川へ来たきっかけは？

M：都会で長く過ごしてきたこともあり、人間の野生とは何かを考えるようになった。例えばライオンやトラは野生で生きていて、筋トレをしなくても強い筋肉を備えている。それは生き方に必要なものとして自然に備わっているからである。では、人間にとって生きるうえで備わっているものは何なのか。山に囲まれたらどうなるか。それを知りたいと思ったことがきっかけとなった。

N：それで佐川へ？

M：発明家として活動していたため「発明家募集」と検索したところ、佐川町の発明ラボにたどり着いた。こうした偶然が重なり、移住を決めた。現在は、結果を残すことを目標に取り組んでいる。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：「発明家募集」と検索したところ、この場所が見つかった。

再帰性の抽出：人間の野生はどこにあるのか、生きていて備わっているものは何なのかを知りたい。

創造性の抽出：発明家として活動しており、結果だけは残そうと考えている。

N：佐川に来て数カ月ですね。地域の人との交流はどうですか？

M：それがね、あるんですよね。なんか不思議と思っていて。

N：地域の人との交流は？

M：交流はある。地方特有の特徴だと感じるのは、関東にいた頃よりも LINE 交換が多く、距離が近いことである。例えば、佐川に来た時点では誰も知り合いがいなかったが、古書店兼バーの店主が知人の知り合いで、過去に会ったこともあった。その共通のつながりをきっかけに店に通うようになり、そこで客と LINE を交換するようになった。LINE を交換が関東にいた頃よりも頻繁であり不思議さを感じている。

また、花守クラブの活動を手伝ったこともある。牧野公園で 2、3 回作業をした際、メンバーの一人から「蛍を見せたいから来てほしい」と誘われた。関東では蛍を見る機会は少ないため、面白そうだと感じて参加した。蛍を見せたいという誘い方も魅力的だった。お祭りあるからと声をかけられていることもある。それと、川の音や虫の声が聞こえる環境で朝を迎える体験は、都会とは全く異なるものであり、違いを実感している。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：店主と共通の知人を通じて知り合い、店に通うようになった。そこでは客同士が LINE を交換することが普通に行われていた。

再帰性の抽出：地方では LINE 交換が多く距離が近いと感じた。関東にいた頃よりも頻繁であり不思議さを覚えた。

創造性の抽出：牧野公園で数回手伝いをした際、「蛍を見せたいから来て」と誘われ、その誘い方が良い。

N：将来はどんなイメージでいますか？

M：将来について明確なイメージは持っていない。現在は、自分が地方に身を置いたときに何を生み出せるのかを試す実験のような感覚で過ごしている。家庭を持っているわけではないため、個人的な挑戦として取り組んでいる。SNS を通じて活動（発明）を見に来てくれて「佐川に来てくれてありがとう」という反応があったことから、他のメンバーにはできない形で地域に貢献できていると感じている。ただ、2 カ月過ごしてみてその価値を伝えることは難しいという実感はある。

過去には、テレビの子ども向け番組で発明品を紹介するレギュラー企画を 1 年間担当した経験がある。番組終了後も、裏方としてコーナーの企画に参加するなど、継続的に関わってきた。Zoom で参加できる関東の仕事は継続しているが、番組が終了するこのタイミングかも、と地方に移る決断をした。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：SNS を見て自身の活動を見に来てくれる人がいた。

再帰性の抽出：自分が地方に身を置いたときに何を生み出せるのかを試している。

創造性の抽出：地方に身を置いたとき、自分が何を生み出せるのかを探っている。

N：ラボのワークショップでの取り組くみは？

M：これまでのワークショップの方法にこだわり過ぎていると思っている。メインの機材の二大巨頭を中心に長く取り組んできたため、そのマシンを使うやりを継続する必要があると他のメンバーは考えている。私は、本来は必ずしもその形にこだわる必要はないと感じて、一度の枠を取り払って、機材も異なる形にして、メーカーが直接入ってくるような仕組みがあってもよいと思う。メーカーが直接関わるなど別の方法もあり得ると考えている。しかし現状では、既存のやり方が固定化されており、若い世代が「これが正しい」と信じて受け継いでしまっている。異なる意見が入ることに対して抵抗感がある状況でいる。

都会（東京や神奈川）で活動していた人々は、若い頃から多様な意見や視点に触れ、自分で選び、学ぶ経験を積んでいる。ただ、現在ここで教えている人々は視野が広いとは言えず、その影響を受けている若い世代は今後も苦労する可能性があると感じる。

2022 年 8 月 4 日のインタビューより

媒介性の抽出：若い世代に今後に苦労するような考え方が受け継がれてしまっている。

再帰性の抽出：東京で本当に戦ってきた人たちは若い頃にすでに経験している。

創造性の抽出:ワークショップの方法は、一度既存の枠を取り払ってよいと考えている。

7名（G～M氏）に共通するのは、移住と起業の直接的契機が制度支援であったことである。ただし、その後の展開は一様でなく、G・H・Jのように制度依存のまま関係性が限定的な事例もあれば、I・K・L・Mのように制度を媒介に地域との関わりを深めていく事例もあるが媒介性の発現は多様である以下に、7名のライフストーリーをモード別(制度的・集合的・パーソナル）の比較（表5-1）を提示する。この表は、各人物の語りを三つのモードに分けて比較することで、移住起業家と地域との関係性や価値観の違いを可視化する。

表5-1　モード別ライフストーリー比較表（G～M氏）

仮名	制度的モード （制度・政策）	集合的モード （地域・共同体）	パーソナルモード （個人の価値・感性）
G	協力隊制度を活用しイベント開催を企画するも行政との連携に苦労する。	地域資源を活かした企画を模索する。子どもや住民との協働を重視する。	「面白いことがしたい」という直感で移住した。創造的な自己表現を追求する。
H	制度の柔軟な働き方（を活用する。任期終了後の住居問題に不安がある。	移住者コミュニティとの程よい距離感がよい。自然との共生を重視する。	地域の文化や仁淀川への感動から移住した。木の服や森の相談室の構想を描く。
I	協力隊制度を通じて技術習得（レーザー加工等）。町役場との距離感がある。	高齢者との交流を通じたクラフト教室の可能性。地域資源（革素材）を活用する。	職人としての独立志向。偶然の出会いから地域に溶け込み、主体的な生業を模索している。
J	協力隊制度で染色活動を再開。卒業後の生業に不安がある。	地域植物を使った草木染め。藍染用の畑を借りて地域との接点を育む。	顔が見えるものづくりへの共感から移住する。染色をライフワークにしたい。
K	協力隊制度を活用しつつ、フリーランスとしての仕事も継続している。	地域の自己実現のしやすさを実感した。ムラ的コミュニティ構想を持つ。	コロナ禍の違和感から直感で移住。変化と自由を重視した生き方を目指す。
L	協力隊制度により地元に隣接の佐川町へ移住。東京と遠隔で収入を得る。	地元の美術関係の人脈や猫との暮らしを通じて地域に馴染む。	コロナ禍で移住を決断した。地方生活の充実感と技術の還元の意志をもつ。
M	協力隊制度を通じて移住した。都市の仕事（台本制作）を継続する。	花守クラブや青年会の地域活動に参加。人間関係の密度に驚いている。	人間の野生への問いから移住した。自己変容の実験として生活を実践している。

佐川町行政担当者のインタビュー要約

地域移住クラフト起業家が、移住先の地域社会にどのような影響を与えたかを捉えるため行政担当者にインタビュー調査をおこなった。以下にインタビューの要約を記す。

- Q 氏（1968 年生／男性／高知県佐川町出身）

Q 氏大学進学・就職で東京へ移る。その後 2013 年に佐川町に戻り町長選へ出馬、2 期 8 年を務め、現在は高知大学理事（インタビュー当時）。

佐川町では、2013 年から 8 年間にわたり、合計 70 名の地域おこし協力隊が着任している。協力隊員間にはネットワークが形成され、先輩隊員の存在により相談しやすい環境が構築されている。初年度には 28 名の応募があり、そのうち発明ラボスタッフとして 3 名を採用した。採用者は全員女性であり、構成は大学でデジタルファブリケーションを専門とする新卒者 1 名、美術大学出身者 1 名、教育関連の職務経験を持つ 30 代の社会人 1 名であった。当初は 2 名採用の予定であったが、最終的に 3 名を採用し、さらに別枠でアーティスト 1 名を加え、合計 4 名体制で活動を開始した。

採用方針は、業務遂行能力に加えて協調性を重視しつつ、独創的な発想や個性を持つ人材を必要とするものであり、同質的な構成を避け、既存チームに不足する要素を補う人材を選定した。さかわ発明ラボは、地域住民や子どもがデジタル技術を活用したものづくりを学び、体験できる場として設立された。設立の目的は、地方においてもデジタルものづくりを学べる環境を提供すること、プログラミング教育の導入を見据えた教育分野との連携を図ること、自伐型林業に関連した商品開発や産業創出、小規模な仕事づくりを支援することである。さらに、多様な人々が集うコミュニティの場として機能することも掲げられている。将来的には家具製作を担う人材を受け入れ、木材を川上から川下まで活用する産業の形成を目指している。レーザーカッターや NC などの機器を用いることで、データ作成により製作が可能となる。この取り組みは、デジタル技術を活用したハンドクラフトの普及を目的としている。

（2024 年 3 月 26 日のインタビューより）

5.3　ライフストーリー分析の結果

前節の佐川町の地域移住クラフト起業家（G～M 氏）の語りは、ⅰ.「現在の生活・生業」からは地域社会との交流、ⅱ.「これまでの人生」からは移住・起業に至る経緯、ⅲ.「転機となった出来事」からは移住・起業したきっかけ、ⅳ.「これからの人生」からは将来の展望、という探索的な 4 つの視点から整理できた。各事例の逐語には個別の文脈が反映されつつも、共通のパターンが見出される。以下に分析の結果を 4 つの視点ごとに特徴をまとめる。

ⅰ.「現在の生活・生業」：地域社会との交流

G 氏は「一緒にものづくりやプログラムを考え」というように、子どもたちとの創造的な関わりを実践している。また、役場から依頼を受けて看板やチラシを制作し地域のニーズに応え、地域支援センターでは就活支援を企画し対話を重視している。H 氏は「緑の中を歩く時間が最高で、車は不要だと感じた」と語り、自然との距離感を大切にしながら暮らしている。移住者同士が程よい距離感を保ち、「それぞれが自分の暮らしは勝手に」と地域の空気感にも馴染んでいる。I 氏は、佐川町に移住後、先輩に教わりながらデジタルの技術を習得した。現在はレザークラフトに取り組み、「佐川オリジナルレザーができれば、絶対いける」と地域資源を活かした価値創造に意欲を見せている。J 氏は「佐川はでの暮らしは大阪に住んでいた時とあんまり変わらず」と語り、利便性のある環境で暮らしている。一方で、「新しいものを受け入れてもらいやすい」という斗賀野地区への転居を予定し、染料植物を育てる活動を通じて地域との関係を築いている。K 氏は、利便性の高い場所に住みながら、「タイニーハウスを作りたい」と自然に近い理想の住まいを思い描いている。有機農の畑にも関わり、地域の環境が自己実現を後押ししている。「自然の中に身を置くことで本来の感覚が戻ってくる」と語る。L 氏は、3D 造形技術を活かして遠隔制作という新しい働き方を実践する。地方では希少な技術者として、「町に役立ちたい」と貢献への意欲も見せる。「カツオの厚さが違います」と地方の食文化にも魅力を感じながら、創作と暮らしを両立させている。M 氏は、佐川町に移住して、地方ならではの濃密な人間関係に驚いている。知人ゼロでの移住だったが、偶然のつながりから人間関係が広がり、「蛍を見せたいから来て」「お祭りあるから」と自然な誘いに応じて地域の人間関係を受け止めている。

おのおのが、佐川町での暮らしの中で、地域社会との交流を通じて創造的な活動を展開している。行政や地域支援センターとの協働、自然との共生、技術の活用、子どもや若者との関わりから地域資源と人とのつながりを活かした生業のスタイルが共通している。

ⅱ.「これまでの人生」：移住・起業に至る経緯

G 氏は「農家とコラボしてジューススタンド」の構想を持っていたが、コロナ禍で実現には至らなかった。それでも「資源が多く、それを活かして何かしたい」と語り、地域との関わりを模索している。H 氏は、「子どもの成長にも関わり」と教育分野に意欲を見せている。I 氏は、「仕事なんか絶対休むな」という職人気質の職場に疑問を抱いて、「もう後ろはない」という決意で退職した。協力隊の面接では、「作品の題名もつけずポートフォリオを送り」と不器用ながらも作品で思いを伝えた。その覚悟は、現在の佐川町での創造的な活動にもつながっている。J 氏は、京都の芸術大学で染色を学び、「医療事務して学費しっかり返したあとは」と生活の安定を優先して就職するも、染織への思いは持ち続けながら活動の場を持てずにいた。奨学金返済後に自由を得たが、「卒業

後の不安はある」と将来への迷いも抱えている。K 氏は、関西出身で東京・千葉に約 10 年住んだ後、佐川町へ移住した。それまではアパレル業界で靴下のデザインに携わり、現在も一部の仕事を継続している。「そんな生き方でいいんだ」と他者の心を軽くする発信を意識し、自分の感覚に従って生きる姿勢を持つ。L 氏は大学進学を機に神奈川・東京へ移り、約 20 年間「映画のセットや遊園地の造形物」の仕事に従事した。高知に戻ったときに偶然、須崎市のギャラリーを通じて佐川町を紹介され接点が生まれ「都会で培った技術を地元に還元したい」という意志を持っている。M 氏は、子ども向け TV 番組にレギュラー出演し、企画や台本制作にも関わっていた。「このタイミングかも」と番組終了を機に佐川町への移住を決意した。「Zoom で参加できる」関東の仕事も継続しながら、「川の音と虫の音が聞こえる」と自然の音に感動し、生活リズムにも変化が生まれている。

各事例共通して、都市部での生活や職業経験を経て、地方への移住に至っている。芸術・デザイン・メディアの分野で培ったスキルや感性が、地方での活動に活かされており、自己の価値観に従った生き方への転換が見られる。また、コロナ禍や職場環境への疑問といった外的要因が人生の見直しを促す契機となっている。

ⅲ.「転機となった出来事」: 移住・起業したきっかけ

G 氏が、佐川町に移住したきっかけは「面白いことがしたい」という思いからだった。就職活動中に「日本仕事百科」でさかわ発明ラボの記事を見て直感的に惹かれた。そして体験会に「ほぼ飛び込みで参加」し、未知の土地に飛び込む決断をした。H 氏は、卒業後の一人旅で自然と利便性が両立する高知県に感動し、「卒業後ここに住む」と移住を決意した。「仁淀川流域でこういうものづくりの施設が魅力的」と地域おこし協力隊の制度に惹かれ、20 歳の若さと行動力で新しい環境に飛び込んだ。I 氏は、農家の友人から「さかわ発明ラボが合いそうだ」と地域おこし協力隊の制度を紹介され、「締め切りは翌日だった」と偶然にも背中を押される形で応募した。そして直感的に佐川町への移住を決め、新たな挑戦へと踏み出した。J 氏は、医療事務に違和感を覚え、退職後に「大阪の職業訓練校でビジュアルデザインを 2 年間学んでいた」と語る。DTP のスキルを習得した。しかし「売れるもののことだけを考える仕事」に疑問を持ち、「使う人の顔が見える」環境を求めた。K 氏は、コロナ禍で生活への違和感を覚え、契約していた仕事を「地球人やり直そう」と手放し、旅を通じて自然に身を置くことで感覚を研ぎ澄ませた。「高知という名前や情報が周囲に頻繁に現れ、強く意識するようになった」と語るように導かれるように関心が高まり、「ものづくりしているチームがあります」と紹介され、佐川町で「すべて揃う」と感じ、移住を決意した。L 氏は、コロナ禍の時の生活制限と「南国に母親と妹がいる」という隣町の家族の存在も後押しになった。「田舎の方が性には合っている」と地方生活を選択するも「森の中で住みたい憧れはなく」と語り、自然への憧れではなく現実的な暮らしを重視している。M 氏は「人間の野生と

は何か」と都市生活に疑問を抱き「山に囲まれたら」と憧れを募らせた。転機は「発明家募集と検索した」と語るように、佐川町の発明ラボとの出会いが移住の決定打ちとなった。

移住のきっかけは、ウェブ記事との出会いや人からの紹介、検索結果といった偶然の情報との接触が契機となっている。それに対して、直感的に「面白そう」「合いそう」と感じて行動に移す柔軟で即応的な意思決定が共通している。また制度や地域資源への魅力も、移住の後押しとなっている。

ⅳ.「これからの人生」：将来の展望

G 氏は、佐川町での暮らしに心地よさを感じており、「住みやすい」と語る。今後は地域の声に耳を傾けながら、自分にできることを見つけていきたいと考えている。「商品開発にも取り組める」と、新しい価値を生み出す意欲が感じられる。H 氏は、家族と程よい距離を保ちつつ、自分らしい生き方を大切にしている。木材を使った洋服づくりに挑戦したいと語り、「山を購入する」と自然とものづくりを結びつけた暮らしを思い描く。また「あなたに話して、生きようと思った」という実体験を通じて、若者の心のケアにも関心を寄せる。I 氏は、地域外とのつながりも重視しながら持続可能な生業を模索している。「誰でも作れるように設計する」と、参加のハードルを下げる工夫にも関心を持つ。ただし子どもには「自分で考えて実行できる力を身につけてほしい」と教育的な視点も大切にしている。J 氏は、「植物を活かした作品は地域の共感を得やすい」と草木染めに手応えを感じている。「佐川の素材を使った商品を制作」と染色工房の立ち上げを構想するも「弟子を育てる予定はない」と語り、自分の創作を軸に地域と関わろうとしている。K 氏は、未来に計画を立てず、可能性に開かれた生き方を選んでいる。過去に縛られず、「楽しんでやっているうちに、自然と人や活動がつながっていく」と自己信頼を軸にしている。助け合いの暮らしを構想し、上下関係を避け、自由で対等な関係性を重視している。L 氏は、地方での生活に経済的な不安を抱えながらも、「3D を覚えたことで保険ができた」と技術が安心材料になっている。「田舎に行っても外と繋がれる仕事の仕方」と語り、地域に根ざしつつ外部とつながる働き方を重視する。M 氏は、自身の変化や創造性を見つめ直すことを重視し、「結果を残すことを目標に」と地域に成果を残す意識も持っている。また SNS 発信に試行錯誤しながら外部発信している。他方で「若い子たちが、こんな考え方でいいんだろうか」と若い世代（20 代）のラボメンバーへの教育のあり方にも疑問を投げかける。

将来に向けては、地域資源を活かした商品開発や創作活動、教育や若者支援への関心、自然との関係性の深化から地域との共創と自己表現の両立を模索する姿勢が見られる。また、外部との接点を保ちながら地方に根ざす働き方や、計画に縛られず可能性に開かれた生き方から柔軟で持続可能なライフスタイルの構築が志向されている。

5.4　小結：佐川町の事例の特徴

本章では、高知県佐川町に移住し起業した地域移住クラフト起業家 7 名（事例 G～M 氏）を対象にライフストーリーを分析し、彼らの語りを「現在の生活・生業」「これまでの人生」「転機となった出来事」「これからの人生」の 4 つの視点で整理した。各事例には個別の文脈が反映されているが、共通して地域との関係性の構築、自己の価値観の再構成、そして創造的な生業の実践が見られた。

まず、「現在の生活・生業」に関する語りからは、移住後に地域社会との交流を経験し、それを通じて自身の活動を展開している様子が確認された。地域との関係性は、生活の基盤や生業の実践において重要な役割を果たしており、移住者にとって不可欠な要素となっている。その関わり方には多様性があり、地域のニーズに応じた支援活動、地域資源を活かした創作、自然との共生を志向する暮らし、都市的要素との融合、偶然の出会いを契機とした関係構築などがあげられる。また、専門技術を活かして地域に貢献する姿勢や、濃密な人間関係の中で自然に関係を築く実践も見られた。これらの語りは、地域との交流が単なる適応ではなく、移住者の価値観や生き方を反映する実践の場であることを示している。

次に、「これまでの人生」に関する語りでは、各人が自身の経験を通じて現在の活動に至った経緯を持つことが明らかとなった。過去の職業経験や生活環境、人生の転機を通じて形成された価値観や志向が、現在の生業や地域での活動に結びついている。活動に至る道のりは多様であり、地域資源を活かした活動への継続的な意欲、専門分野での学びを起点とした関心、職場への違和感からの転職と創造的活動への転換、生活の安定を経た自己実現の模索、都市生活への違和感や偶然の出会いを契機とした移住など、背景や動機はさまざまである。これらの語りは、移住という転機が過去の経験を再構成し、現在の選択や行動に影響を与えていることを示している。

そして、「転機となった出来事」に関する語りでは、直感的な判断や偶然の出会いを通じて佐川町への移住を決断したことが共通して確認された。計画的な準備よりも、予期せぬ出会いや感覚的な納得感が意思決定において重要な役割を果たしており、これは共通の特徴として注目される。一方で、移住に至る契機や背景には多様性があり、地域活動への関心、旅先での感動、知人からの紹介、職業訓練や生活の変化、家族との関係、都市生活への違和感などが語られている。自然環境や創造的な活動への憧れが強く影響した例もあり、移住は単なる地理的移動ではなく、個人の価値観や人生観に基づく選択であり、内面的な変化や人生の再構築と深く結びついていることが示されている。

最後に、「これからの人生」に関する語りでは、すべての聞き取り対象者が、地域との関係性を深めながら自己の価値観に基づいた将来の展望を描いていることが明らかとなった。移住者たちは、地域社会との関わりを通じて得た経験や気づきをもとに、自らの生き方や働き方を再構築しようとする姿勢を共通して示している。その将来展望に

は多様性があり、地域の声に応答して新たな価値を創出しようとする姿勢、自然とものづくりを結びつけた暮らしや若者支援への関心、教育的視点を取り入れた持続可能な生業の模索、創作活動を軸とした地域との関係構築、自由で柔軟な生き方の追求、技術を活かした地域定着と外部との接続、教育の在り方への問題提起などが語られている。これらの語りからは、地域との関わりを通じて自己実現を図ろうとする意識と、地域社会への貢献を志向する姿勢がうかがえた。

他方、行政担当者への聞き取りでは、次のことが明らかになった。佐川町では、地域おこし協力隊として着任した移住者は、2013 年から 8 年間で合計 70 名おり、協力隊員間にはネットワークが構築され、相談しやすい環境が整備されている。初年度には 28 名の応募があり、さかわ発明ラボスタッフとして 3 名の移住者が採用された。彼らはデジタルファブリケーションや美術、教育など多様な専門性を有し、さらに別枠でアーティスト 1 名を加え、4 名体制で活動を開始した。

さかわ発明ラボは、地域住民や子どもがデジタル技術を活用したものづくりを学び体験できる場として設立され、教育分野との連携や自伐型林業に関連した商品開発を通じて地域産業の創出を目指している。地域移住クラフト起業家は、こうした取り組みの担い手として、地域資源を活用しながら新しい産業やコミュニティ形成に関与している。

第 6 章　総合考察

6.1　事例分析の考察

本研究の第 4 章及び 5 章では、それぞれ北海道東川町と高知県佐川町に移住して起業した「地域移住クラフト起業家」（13 名）を対象に、ライフストーリー分析を行った。

本章では、そこで得られた分析結果について、以下の観点から考察する。

1)　「地域移住クラフト起業家」のライフストーリー分析によって抽出された、創造性、媒介性、再帰性という、三つの特性がそれぞれ意味するもの。そして、それら三者の関係性。
2)　「語りのパターン」（モード）として分類された、パーソナルモード、集合的モード、制度的モードという、三つのモードがそれぞれ意味するもの。そして、そして三者の関係性。
3)　ライフストーリー分析から抽出された三特性と、モード分類による三つのモードとの関連性。

地域移住クラフト起業家のライフストーリー分析によって抽出された特性、「創造性・媒介性・再帰性」それぞれが意味するもの、及び、三つの特性の関係性を考察する。

6.1.1　媒介性・再帰性・創造性

地域移住クラフト起業家のライフストーリー分析によって抽出された特性、「創造性・媒介性・再帰性」それぞれが意味するもの、及び、三つの特性の関係性を考察する。

(1) 媒介性：地域の内外をつなぐ

地域移住クラフト起業家が有する特性の一つである「媒介性」は、地域の内部と外部をつなぐ機能を果たし、地域の土着に由来する閉鎖性を緩和する。彼らが有する媒介性は、他の地域から当該移住地に移動して新たな事業を起こすこと自体が「よそ者」という存在であり、外の世界との媒介作用を発揮する。

さらに、彼らが、外部の専門家を呼び込むことによって、媒介性は発揮される。例えば、クラフト人材が外部の専門家を招いて、地域住民と外部参加者が対話し、双方の価値観を表明し合う場を設定すること。また地域固有の素材を活用したワークショップで、外部の技術を紹介する取り組みを企画することである。さらに外部との継続的な関係を維持する仕組みを、オンラインコミュニティを活用して構築し、共同制作の継続は代表

的な例である。こうしたケースにおいては、媒介性は単に一時的な接続にとどまらず、信頼構築の起点となる意味を持つ。

東川町には、技術や技能による交流を地域に根付かせることで、地域文化と外部知見の融合を図ることが試みられ、地域の内外をつなぐ役割を果たす地域移住クラフト起業家が存在する。彼らは行政との関係を築き、制度と個人の活動を橋渡しする機能も果たしている。

佐川町では、遠隔的な制作技術を活用し、地域に根ざしながら都市との接続を維持する実践が見られる。都市部の仕事を継続しつつ地域の自然や人間関係に触れることで、都市と地方の架け橋となる取り組みも確認された。こうした媒介性の作用によって、地域の閉鎖性が緩和され、外部との接続機会が高まる。

(2) 再帰性：個人の変容

移住した地で、クラフト事業を始めること自体が、個々のクラフト人材のそれまでの生活を大きく変化させる。加えて、仕事の仕方に対する違和感や火災や倒産という事件、さらにコロナ禍への対応、個々のケースに直面して自己の価値観や生き方についての「メタ認知」を変容させている。そして、フィードバック的に再調整する「再帰性」が発揮されている。

東川町の例では、会社倒産を経て、人との信頼関係を基盤に事業を立ち上げるケース、火災をきっかけに創造的な働き方へ転換し、精神的充実を得る事例が見られた。

佐川町では、自然とものづくりを結びつけた暮らしを思い描き、若者の心のケアに関心を寄せる姿勢や、旧態依然の職場を離れて創造的な活動へと転換する実践が確認された。また、契約仕事を手放し、旅を通じて自然との接点を得ることで自己の感覚を再構築する事例がある。

これらの再帰的なプロセスは、移住者における変容的学習の典型であるが、地域社会の側から評価すると既存制度や慣習について批判的な内省を促す契機になる。

(3) 創造性：地域課題への働きかけ

クラフト人材の創造性は、地域課題に対する新しい気づきをもたらすことがある。

彼らは自己完結した技術者や芸術家ではなく自身の媒介性と再帰性を統合した創造性によって、既存の地域文化・教育・経済の課題に対して、積極的に働きかける。

東川町では、家族や地域住民との協働による創造活動が、地域の経済的基盤を強化し、文化的価値を創出する事例がある。地域内での雇用や消費を生み出すだけでなく、地域住民との関係性を深める。例えば、陶芸教室の運営を通じて、地域の子どもたちとの関

係を築き、地域の創造教育の一端を担う事例がある。教育面で創造性を喚起することは、次世代育成につながり、中長期的に持続可能な地域づくりに貢献している。

佐川町では、子どものものづくり活動や就職活動の支援を通じて、教育面でのアプローチが行われている。このアプローチは、地域の次世代が自己表現力を高め、職業選択において多様な可能性を見いだすための支援となっており、地域の人材育成に資する取り組みになっている。例として、地域に自生する植物を染料として活用した草木染めの創作活動があり、地域資源の再評価と文化的価値の創出を図っている。この活動は、地域の自然環境との共生を促進するとともに、地域固有の文化を外部に発信する手段として創造性を発揮している。

(4) 媒介性、再帰性、創造性の関係

上記で考察してきた三つの特性は、クラフト人材自身が移住先の地域社会において、自らの活動を維持しつつ、独自のクラフト製品や成果を生産する力の源泉である。そして媒介性は、彼らの創造性が自己の外側に向かう場合の発信作用であるのに対して、再帰性は創造性が自己の内側に向かう場合の内省的な受信作用である。

このような相互関係を形成して構成される三特性は、地域社会から認知されるとき、クラフト人材の個性的な特徴として受容される。同時に、インフォーマルな地域コミュニティにおけるメンバーの一人として評価される。さらに、フォーマルな地域制度の変容を促す、批判的メタ認知力を発揮する存在となる。

6.1.2「語りのパターン」（モード）分類の考察

本節では、第 4 章と第 5 章において行われた「語りのパターン」（モード）の分類（表 4-1、表 5-1）について、「パーソナルモード」、「集合的モード」、「制度的モード」という三つのモードがそれぞれ意味するもの、及び三つのモードの関係性について考察する。

なお、これらのモードは、13 人のライフストーリーの内容分析から抽出したものを「語りのパターン」の観点から分類したものであり、直接的には彼らの言説そのものである。しかし、その言説からは、自身が地域の住民や行政の側からどのように認知され、評価されているかという内容を読み取ることができる。

さらに、地域の行政担当者の言説も参照しながら解読すると、地域側からの認知と評価のされ方を分類したものと位置づけることができる。

(1)「パーソナルモード」

このモードでは、自身の活動・事業の意味づけや価値についての自己認識が、地域社会から自立した個人の価値観の文脈で、反省的に示されている。

東川町で採取された言説の例として、「好きなことで苦労したい」、「好きだから続ける」、「誰かのために作る」、「競争しない」、「同じものはない」、「ものづくりには地域づくりも大事」、そして「自然との共生、和と洋の融合」をあげることができる。

佐川町の例では、「面白いことがしたい」、「地域の文化や仁淀川の風景への感動」、「主体的な生業を模索」、「使う人の顔が見えるものづくり」、「地球人をやり直す」、「変化と自由を重視した生き方」、「地方生活の充実感」、「人間の野生への問い」、「自己変容の実験」がある。

これらの言説には、彼らの人生観や世界観、美学や職業倫理、地方地域での生活への期待が込められている。しかし単に個人それぞれの主観的かつ恣意的な願望を陳述しているだけではなく、広く共感されうる普遍的な価値についての言及である。

(2)「集合的モード」

このモードでは、地域社会に形成されたインフォーマルなコミュニティと、自身の活動・事業との関係が示されている。

東川町の例として、「自身の工房から独立した人々とのつながり」、「地域との関係は希薄だが、変化も感じる」、「月 1 の飲み会や町内会活動」、「他の職人との交流」、「職人のネットワークの中で活動」、「地域の職人として貢献」、「地域の職人や役場職員との長年の関係」、「地域の変化を感じる」、「農家との助け合い」、「地域の子ども陶芸教育」、「地域文化の形成に関与」があげられる。

佐川町の例では、「地域資源を活かした企画を模索」、「子どもや住民との協働を重視」、「移住者コミュニティとは程よい距離感を維持」、「自然との共生を重視」、「高齢者との交流を通じたクラフト教室構想」、「地域資源（革素材）活用」、「地域植物を使った草木染め」、「藍染用の畑を借りて地域との接点を育む」、「自己実現のしやすさを実感」、「ムラ的コミュニティ」、「地元の美術関係の人脈」、「花守クラブや青年会の地域活動に参加」、「人間関係の密度に驚き」がある。

両地域とも、内容は多様で、アプローチの仕方もさまざまではあるが、地域に存在するインフォーマルなコミュニティに対して、クラフト事業者ならではの関わり方をしていることが示されている。同時に、既存のコミュニティへの参加だけでなく、個々の関心やスキルを活用して新しいコミュニティを創造することに関心を持っていることが理解できる。

(3)「制度的モード」

このモードでは、地域社会全般や行政制度のフォーマルな制度と、自身の活動・事業との関係が示されている。

東川町の例として、「町役場『東川スタイル課』から仕事依頼」、「空き家活用事業で移住」、「役場から名札制作の仕事を受託」、「町内会長を経験」、「コロナ禍で町の支援を受けた」、「町の施策には感謝」、「土地価格の高騰を懸念」、「町との信頼関係を構築」、「地域おこし協力隊の活動に関心あり」、「公共事業縮小による不動産業者の土地売却を懸念」、「町役場主催ジャズコンサートなど、前例のない行政との協働を経験」が例としてあげられる。

佐川町の例では、「イベントを企画したが行政との連携に苦労」、「協力隊制度を（週3休み）を活用」、「任期終了後の住居問題に不安」、「協力隊制度を通じて技術習得」、「町役場と距離感がある」、「卒業後の生活維持に不安」、「フリーランスとしての仕事も継続」、「遠隔ワークで収入」、「都市での仕事を継続」などである。

これらの言説からは、行政によって主体的に推進される地域振興施策、特に事業委託についての言及が多いことがわかる。ただし、行政に対しては、肯定的と否定的の両方がある。佐川町の事例では、地域おこし協力隊制度についての言及が目立つが、終了後の移住生活維持に関する不安や構想に触れたものもある。また、将来の地域の社会環境や経済状況に関して、懸念を表明したものがあり、地域移住クラフト起業家の視座からの社会への意識の一端を知ることができる。

(4) 三つのモードの関連性

6.3.1「パーソナルモード」、6.3.2「集合的モード」、そして、6.3.3「制度的モード」で記述した三つのモードの間には以下のような区別と関連性が認められる。

3つのモードは、地方地域に移住したクラフト起業家が、地域社会から認知されている側面を示す点は共通であるが、「パーソナルモード」は、個ないしはプライベートの領域における側面である。「集合的モード」は、事業者としてのインフォーマルな活動やセミパブリックの領域での側面である。「制度的モード」は、地域社会のオフィシャルなシステムとして現実に作動している公的社会制度の領域での側面であり。

そして、それら三つの側面は、6.2で考察した地域移住クラフト起業家の三つの特性「媒介性、再帰性、創造性」と対応関係として照応している。

(5) 地域移住クラフト起業家の特性との照応関係

ライフストーリー分析からえられた「語りのパターン」（モード）は、同じライフス

トーリーの分析から抽出された移住者の特性が、いったん地域社会に投影され、それが反転する形で移住者の像として反射される。そのため、移住者の三特性とは、次のような照応関係が成立している。

パーソナルモードと創造性、集合的モードと媒介性、そして制度的モードと再帰性、である。この照応関係を認識することは、地域移住クラフト起業家の活動が、地域社会の変容に作用するプロセスのメカニズムを明らかにするための前提となる。

6.2　地域移住クラフト起業家による内発的発展プロセス

地方地域へ移住したクラフト起業家の活動は、地域の内発的発展に連鎖していくメカニズムの一端を担う。彼らの活動によって発揮される創造性は、個人から発するものであっても、彼らの媒介性や再帰性に支えられて、やがて地域に新たな価値をもたらす。同時に、地域住民に形成された「集合的モード」と「制度的モード」が、対話や協働を促進し、地域社会を内側から変容していく契機になる。地域社会と地域移住クラフト起業家による双方が、「変容的学習」の持続的サイクルになることによって、「内発的発展」のメカニズムが形成される。

以上から地域移住クラフト起業家の特性である媒介性（外へ向かう作用、発信）と、再帰性（内へ向かう作用、受信）が発現することによって、クラフト人材の創造性が高められ、創造力が発揮される。彼らの創造性は、制度・コミュニティ・パーソナルの領域で、「変容的学習」の批判的内省を促す。批判的内省が否定的反動に結びつくこともありうるが、新たな理解の枠組みが形成され「意味パースペクティブの変容」に繋がる。

地域移住クラフト起業家が促す変容的学習によってもたらされた新しいパースペクティブ（個人が世界を理解し、意味づけるための認識枠組み：frame of reference）は、地域の価値を認識する契機となる。以下に、そのプロセスを「地域移住クラフト起業家による内発的発展プロセスモデル」（図 6-1）として示す。

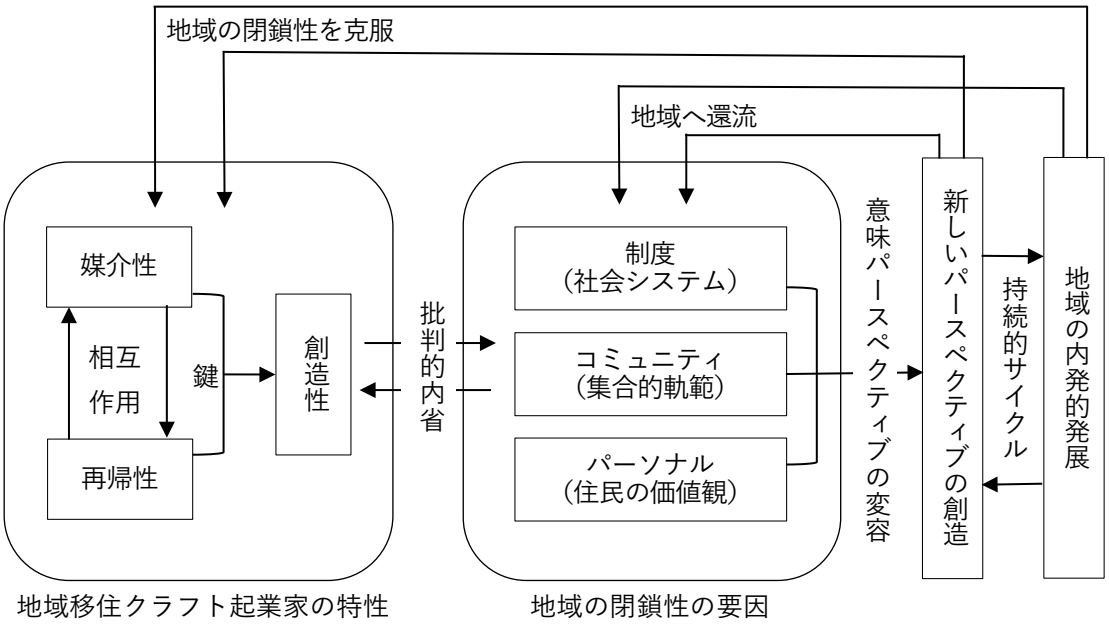

図 6-1　地域移住クラフト起業家による内発的発展プロセスモデル

なお本研究では、クラフト人材の創造の過程を、移住者であるクラフト人材のライフストーリーを通じて地域社会との相互作用の履歴として捉えた。その中で、地域社会の認識・関与のあり方や、規範がいかに変容していくのかを明らかにする点に分析の主眼を置いた。すなわち、ライフストーリーを個人の内面変化を描く物語であると同時に、地域社会が更新されていくプロセスとして位置づけている。

具体的には、クラフト人材の起業や活動の過程で生じる出来事が、地域住民や地域組織をどのように変化させるのかに注目した。例えば、地域移住者の活動が地域社会の慣習を変化させた事例として、東川町では「君の椅子プロジェクト」による子どもへの木製椅子の贈呈、学校への木製机・椅子の導入がある。地域材を活用する慣習が学校建設時の前提として定着している。これにより町全体で持続可能な資源利用が推進されている。また佐川町では、「さかわ発明ラボ」が地域住民や子どもがデジタル技術を用いたものづくりを学ぶ場として設立され、教育分野との連携や林業に関連した商品開発を通じて新たな地域産業の創出につながっている。

本研究で扱うクラフト人材による制度変容は、法制度や政策変更のような形式的な変化として直ちに現れるものではない。しかし、認知的制度及び規範的制度の次元において、「地域として許容される行為」や「誰が主体とみなされるのか」といった前提が再構成されていく過程として捉えることができる。

こうした制度変容は、特定個人の能力によってのみ生じるものではなく、地域移住クラフト起業家の実践と、それに対する地域社会の応答との相互作用を通じて生じている。この変化は、例外的とみなされていた実践が継続されることで、「地域として受容可能な実践」として再定義されていく。

以上の点から、本研究が示す内発的発展とは、クラフト人材の実践を契機として、地域住民や地域共同体が自らの判断基準や関与の仕方、他者との関係構築の方法を再考し、変化させていくプロセスを指す。その意味で本研究は、内発的発展論が強調してきた「地域社会内部からの変化」という視点を維持しつつ、その変化を促進する触媒として地域移住クラフト起業家が果たしうる役割を明らかにした。

6.3　理論的含意

前節で示した内発的発展のメカニズムと変容的学習プロセスを踏まえ、本節では地域移住クラフト起業家が自己の技能を基盤にキャリアを形成する過程で、地域との関係性を深めると同時に個人の変容が地域の内発的発展に寄与する点について、理論的含意を考察する。地域移住クラフト起業家の実践は、地域的背景やクラフトの種類、関与の形態において多様である。しかし、陶芸・木工・染織といった異なる技術体系と市場構造を持つ領域においても、地域との関係性構築には共通するプロセスが確認された。

具体的には、下記の連鎖的構造である。
①クラフト技術を媒介とした地域との接続
②よそ者としての立場を活かした関係構築
③地域の内発的発展への貢献

この構造は、地域移住クラフト起業家が社会的・文化的媒介者として機能することを示している。彼らはクラフトを媒介とした活動を通じて、移住者と地域住民の双方に接点を生み出し、地域内の関係性をつなぎ直す役割を果たしている。また、彼らが実践するワークショップや地域イベントにおける、モノ（product）としてのクラフトの受け渡しは、これまで接触する機会の少なかった住民同士の交流を促す契機となっている。

さらに、彼らは地域社会との関わりの中で、閉鎖性や慣習、共同体の暗黙知との接触を通じて、既存の価値観を揺さぶられる経験を重ねる。その結果、自己のキャリアや社会的役割を再定義する必要に迫られる。このような状況での創造的実践は、単なる職業活動にとどまらず、変容的学習の契機となる。したがって、変容的学習理論は、移住起業家の自己変容と地域への貢献を説明する有効な理論的基盤となる。

加えて、本研究は、地域社会という文化的・制度的文脈において、個人の変容が社会的実践とどのように接続されるかを明らかにする。このことによって、変容的学習理論の社会的次元を補完する。クラフト実践を通じた学習は、従来理論が想定する認知的・言語的対話とは異なる学習様式を示し、理論の拡張可能性を示唆する。

以上から、本研究は以下の理論的含意を提示する。

- キャリア形成における「技能と関係性の媒介性」の重要性
- 地域再生における「よそ者による内発的発展」の可能性
- 社会的実践における「クラフトを通じた共同体形成」の動態的理解

これらの知見は、地域移住クラフト起業家を中心とした地域変容の理論化に資するものであり、今後の地域政策や人材育成において応用可能な理論的枠組みを提供する。

6.4　実践的含意

前節までの議論を踏まえ、本節では、地域政策における移住支援施策と、地域移住クラフト起業家が地域の内発的発展に貢献するために必要な実践的含意について考察する。

地域移住クラフト起業家の活動は、地域社会に新たな価値観や制度的変容をもたらす可能性を持つ。彼らは地域の暗黙知や慣習に触れながら、よそ者としての視点を活かし、媒介的主体として地域共同体にエンゲージメントし、その変容に参加する。

具体的な含意は以下の通りである。

- 関係構築を促進する場の創出：
  地域イベント、ワークショップ、共同プロジェクトなど、よそ者と地元住民が対話・協働できる場を設け、相互理解を深める。

- キャリア支援と学習機会の提供：
  地域文化の理解、経営支援、技術研修など、変容的学習を促す支援体制を整備し、移住者の定着と活動を促進する。

これらの枠組みは、移住者を「外部者」ではなく「地域の担い手」として位置づける政策を促し、地域の内発的発展を持続可能な形で実現するための基盤となる。

さらに、本研究が明らかにした地域移住クラフト起業家の実践的な潜在力は、地域社会における制度的・文化的媒介者としての役割に集約される。クラフトによる実践が、地域の暗黙知との接触を通じて、既存の共同体の集合的な意識に相対し、再構成する契機となり得る。

以上の実践的含意は、地域移住クラフト起業家を中心とした地域変容の実現に向けた支援体制の構築に資するものであり、今後の地域政策及び人材育成において重要な手掛かりとなる。

第７章　結論

7.1　本研究の総括

本研究の目的は、「地域移住クラフト起業家」が、移住先地域においてどのような知識創造をし、地域の内発的発展に貢献しているかを明らかにすることであった。

特に地方移住して起業したクラフト人材が、自らの技能を通じて地域との関係をどのように構築したか、そしてその過程における個人の成長が地域の内発的発展にどのような影響を与えたのかに焦点を当てた。

調査対象としたのは、北海道東川町と高知県佐川町の 2 つの地域に、それぞれ移住して起業活動を行っているクラフト人材 13 名である。彼らへのインタビュー内容をライフストーリー分析し、得られた結果を、理論的枠組みに基づいて考察した。その知見をもとに、研究目的において設定したリサーチクエスチョン（RQ）に対して、次のように回答する。

RQ：
地域移住クラフト起業家は、クラフト生産技能を基盤としてどのような特性を発揮し、地域の内発的発展に影響を与えているのか？

回答：
クラフトを基盤とする移住起業家は、彼らの保有する「創造性・媒介性・再帰性」という三つの特性によって、地域の閉鎖性を克服し、地域の内発的発展に寄与する。具体的には媒介性により外部ネットワークを地域に導入し、再帰性によって自己と地域の価値観を再構築し、創造性を通じて新しい文化的・経済的資源を創出することで地域社会の変容を促している。

以上の検討から本研究では、地域移住クラフト起業家は、地域社会における閉鎖的な構造を緩和し、地域の内発的発展に寄与することが確認された。彼らは、地域再生の創造的な媒介者であり、内発的発展の触媒として機能する可能性を有する存在である。

本研究では、「創造性」を、クラフト人材個人の内在的能力や資質に基づくもの特性としてだけでなく、地域社会の文化的文脈において生成される社会的プロセスにおいて表現される実践の特徴の一つとして位置付けている。地域移住クラフト起業家の活動は、地域の歴史や素材、既存の慣習、住民との相互作用を媒介としながら、新たな意味づけや価値の再構成を伴って展開している。創造性はこのような関係的過程のなかで動態的に生まれている。

これらを踏まえると、単なる外部からの資源移転や技術導入による発展とは異なり、地域社会内部において再編されていく「内発的発展」の重要な契機として位置づけられる。すなわち創造性は、媒介性及び再帰性と相互に作用しながら、新たな知識や価値を地域内部に定着させる役割を果たしている。

以上の点を明らかにしたことにより、本研究は知識科学における地域社会研究分野に貢献すると考える。

7.2　本研究の理論的貢献・実践的貢献

本研究は、次の三つの側面で理論的に貢献する。

第一に、変容的学習理論の社会的次元を補完した。従来の理論は認知的・言語的対話を中心に据えてきたが、本研究はクラフトの実践を通じた学習様式を明らかにし、変容的学習理論の拡張可能性を示した。

第二に、制度理論との接続を通じて、個人の実践が地域制度の再編に寄与するメカニズムを提示した。地域移住クラフト起業家の活動は、地域の暗黙知や慣習に働きかけ、制度的変容を促す触媒として機能することを示した。

第三に、エンゲージメント理論を援用し、地域移住クラフト起業家が地域社会において感情的・心理的・身体的に関与するプロセスを分析した点で、知識科学に新たな視座を提供した。

実践的には、本研究は、地域の内発的発展を持続可能な形で実現するための基盤として、次の二つの側面で実践的に貢献する。

第一に、地域住民と移住者の協働を促進する場の創出である。地域イベントやワークショップ、共同プロジェクトなど、対話と協働の機会を設けることが重要である。

第二に、キャリア支援と学習機会の提供である。地域文化の理解、経営支援、技術研修など、変容的学習を促す仕組みを整備することで、移住者の定着と地域への貢献を促進する。

これらの施策は、移住者を「外部者」ではなく「地域の担い手」として位置づけ、地域再生に向けた持続可能な枠組みを形成する。

7.3　本研究の限界

本研究は、北海道東川町と高知県佐川町という二つの地域事例を対象に、移住起業家と地域社会の相互作用を考察した、地域社会研究である。

日本各地には多様な地域社会が存在し、それぞれ固有の歴史や産業構造、文化的背景を持つことはいうまでもないため、本研究の結果の一般化には、地域特性を踏まえた実証的な研究の蓄積がもちろん不可欠である。

また、本研究は、研究目的の趣旨に従って、調査地域や調査対象者とその属性をあえて限定した定性的な事例研究である。そのため、結論として導き出された内容には、特定の地方地域の個別的な状況が強く反映されていることは否めない。しかし、この研究においてなされた基本的な問題設定（RQ）、先行研究の検証から導き出した作業仮説、及び、データ分析と考察へのアプローチに関しては、一般化可能な内容が含まれていると考えている。

7.4　今後の研究展望

今後の研究は、理論的な深化を通じてさらなる広がりを持つと考えられる。理論面では、地域社会における制度変容と学習プロセスを包括的に説明する「地域再生モデル」の構築が期待される。このモデルは、地域移住クラフト起業家が地域社会に与える影響を通じて体系化するものであり、地域再生の理論的基盤を強化する可能性がある。

さらに、制度的要素と個人の学習過程の相互作用を長期的に追跡することで、地域変容の持続性や制度的変化をより精緻に捉えることができるだろう。今後は、この視座を発展させ、より多様な事例や国際的な比較を通じて、地域再生の包括的なモデルを検証・洗練していくことが望まれる。

本研究で示された媒介性・再帰性・創造性の作用は、クラフト生産が地域資源を生かす技術であると同時に地域にとって価値となる知識創造を可能としている。

またクラフトを通じた生き方は、経済的合理性だけでは測れない価値を地域に生み出し、持続可能な社会を創造する。それは既存の制度に従うだけでなく、制度を問い直し、学びながら変えていく力を内包している点において、地域の未来を拓く。

参考文献

アトキンソン，ロバート(2002)『私たちの中にある物語：人生のストーリーを書く意義と方法』塚田守：翻訳，ミネルヴァ書房，213p.

Atkinson, R. (1998). The Life Story Interview: Qualitative Research Methods, 44, Sage, 50p.

ベック，U.（1998）『危険社会：新しい近代への道』，東廉・伊藤美登里:翻訳，法政大学出版局，502p.

ベック，U.・ギデンズ，A.・ラッシュ，S.（1997）．『再帰的近代化』，松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三：翻訳，而立書房，416p.

ベルトー，ダニエル(1992)．『ライフストーリー：エスノ社会学的パースペクティブ』小林多寿子：翻訳，ミネルヴァ書房，240p.

ブルデュー，P.（1988）『実践感覚 1』，今村仁司・港道隆:翻訳，みすず書房，281p.

カンティロン，リチャード（1992）『商業試論：An Essay on Economic Theory』，津田内匠：翻訳、名古屋大学出版会，290p.

Choudhury, P., & Marinoni, A. (2025). Bounded solidarity: The role of migrants in shaping entrepreneurial ventures. Harvard Business School Working Paper, No.25-019.

ドラッカー，ピーター.F.（1985）『イノベーションと企業家精神―実践と原理』，小林宏治：翻訳，ダイヤモンド社，458p.

ドロステ，マグダレーナ（2002）『バウハウス』，タッシェン・ジャパン，256p.

Foley, A., Reinl, L., & Dwyer, M. (2025). Broker influence in micro-firm rural business communities. Journal of Rural Studies, 110, pp.45-58.

ギデンズ，A.（1993）『近代とはいかなる時代か』，松尾精文・小幡正敏：翻訳，而立書房，256p.

ジンメル，ゲオルク（1994）『社会学（下）』，居安正：翻訳，白水社，417p.

Halevy, N., Halali, E., & Zlatev, J. (2019). Brokerage and brokering: An integrative review and organizing framework for third party influence. Academy of Management Annals, 13(1), pp.215-239.

東川町（1995）『東川町史 第 2 巻』,東川町役場，1199p.

東川町（2022）『東川町史 第 3 巻』,東川町役場，1200p.

今田高俊（2002）「リスク社会と再帰的近代：ウルリッヒ・ベックの問題提起」『海外社会保障研究』，138，pp.63-71.

Kahn, W. A.（1990）「Psychological Conditions of Personal Engagement and Disengagement at Work」 Academy of Management Journal, 33(4), pp.692-724.

神田孝治（1992）農村文化の伝統性と閉鎖性．農業経済研究，64(3)，pp.69-80.

柄谷理恵子（2016）『移動と生存：国境を越える人々の政治学』，岩波書店，228p.
河原和之・杉万俊夫（2003）「過疎地域における住民自治システム創造の試み」『 環境心理学研究』，42(2)，101-110.
『広辞苑 第六版』，電子版（2008）岩波書店.
桑本香梨（2022）「移住創業者と地域住民で広げる地域の可能性：双方へのアンケートとヒアリングによる分析」『日本政策金融公庫 調査月報』，166，pp.4-15.
Kwon, S.-W., Rondi, E., Levin, D. Z., De Massis, A., & Brass, D. J. (2020). Network brokerage: An integrative review and future research agenda. Journal of Management, 46(6), pp.1092-1120.
Lima, A. (2023) Understanding narrative inquiry through life story interviews with former prisoners, Irish Educational Studies, 42(4), pp.775-786.
ルイス，オスカー（1986）『サンチェスの子供たち』柴田稔彦・行方昭夫：翻訳，みすず書房，276p.
MacKillop, E., Connell, A., Downe, J., & Durrant, H. (2023). Making sense of knowledge-brokering organizations: Boundary organizations or policy entrepreneurs? Science and Public Policy, 50(6), pp.950-960.
牧浦健二（2024）「スコット著『制度と組織』についての一考察」『商経学叢』，71(2)，59-149.
松田尚子・松尾豊（2013）「起業家の成功要因に関する実証分析」『RIETI Discussion Paper』，13-J-064，pp.1-32.
メジロー，J（2012）『おとなの学びと変容：変容的学習とは何か』，金澤・三輪:翻訳，鳳書房，351p.
ミンツバーグ，ヘンリー『ミンツバーグの組織論:7つの類型と力学、そしてその先へ』池村千秋:翻訳，ダイヤモンド社，336p.
宮本憲一（1989）『環境経済学』岩波書店，358p.
宮本憲一（2020）「地域経済学とその周辺領域の回顧と展望」『地域経済学研究』，39・40，pp.13-24.
森千香子（2020）「北からの移動という視点の転換」pp.162-183，『移民現象の新展開』松尾昌樹・森千香子:編著，岩波書店，264p.
森岡清志：編（2008）『地域の社会学』，有斐閣，304p.
中島修（2023a）「第4章1. スキルを生かして移住する起業家:北海道東川町」，pp.112-127，敷田麻実・森重昌之・影山裕樹:編著，『移動縁が変える地域社会：関係人口を超えて』，水曜社，221p.
中島修（2023b）「移住起業家の地域社会への定着要因：東川町の家具・装備品製造業」『文化経済学』，20(1)，pp.23-32.
Nakajima, Osamu and Hosoda, Takaaki（2023）Classification of "Migrant

Entrepreneurs″ according to the relationship with the Local Community, Business Management and Decision Science, 3, 8p.
Nakajima, Osamu (2024a) Migrant Entrepreneurs and Regional Revitalization: Qualitative Case Study, International Journal of Service and Knowledge Management, 8(2), 14p.
Nakajima, Osamu (2024b) Migrant Entrepreneur: A Case Study of the ″Sakawa Invention Lab″, Business Management and Decision Science, 5, 12p.
長友淳（2015）「ライフスタイル移住の概念と先行研究の動向：移住研究における理論的動向及び日本人移民研究の文脈を通して」『国際学研究』,4(1), pp.23-32.
新村出:編（2008）『広辞苑 第六版』, 電子版, 岩波書店, 3074p.
野中郁次郎・平田透・遠山亮子（2010）『流れを経営する：持続的イノベーション企業の動態理論』, 東洋経済新報社, 480p.
野中郁次郎・竹内弘高（1996）『知識創造企業』, 東洋経済新報社, 401p.
Obstfeld, D. (2005) Social networks, the tertius iungens orientation, and involvement in innovation. Administrative Science Quarterly, 50(1), pp.100-130. https://doi.org/10.2189/asqu.2005.50.1.100
小田切徳美編（2022）『新しい地域をつくる：持続的農村発展論』, 岩波書店. 242p.
小田切徳美（2018）「島の「しごと」づくりとその課題」『しま』, 64(2), pp.57-63.
小野塚知二(2001)『クラフト的規制の起源:19 世紀イギリス機械産業』, 有斐閣, 429p.
Pino Gavidia, L. A., & Adu, J. (2022) Critical Narrative Inquiry: An Examination of a Methodological Approach. International Journal of Qualitative Methods, 21, pp.1-5.
大久保孝治（2008）『ライフストーリー分析：質的調査入門』, 学文社, 95p.
ピオリ, J. マイケル・セーブル, F. チャールズ（1993）『第二の産業分水嶺』, 山之内靖・永易浩一・石田あつみ翻訳, 筑摩書房, 466p.
パットナム, D. ロバート（2006）『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』, 柏書房, 689p.
Riessman, C. K. (2008) Narrative Methods for the Human Sciences, Sage, 264p.
酒井扶美・立見淳哉・筒井一伸（2020）「農山村における移住起業のサポート実態―兵庫県丹波市を事例として」『E-journal GEO』, 15(1), pp. 14-28.
坂田雅子（2008）「被差別地域における閉鎖性とスティグマの形成」『兵庫教育大学研究紀要』, 33, pp.55-66.
佐川町（2018）『まち・ひと・しごと創生総合戦略 平成 30 年 3 月改訂版』, 36p.
作野広和(2019)「人口減少社会における関係人口の意義と可能性」『経済地理学年報』, 65(1), pp.10-28.
桜井厚(2002)『インタビューの社会学:ライフストーリーの聞き方』せりか書房, 300p.

桜井厚・小林多寿子：編著（2005）『ライフストーリー・インタビュー：質的研究入門』，せりか書房，281p.
桜井厚（2012）『ライフストーリー論』，弘文堂，176p.
スコット，W.リチャード（1998）『制度と組織』，河野昭三・板橋慶明:翻訳，税務経理協会，282p.
セネット，リチャード（2016）『クラフツマン：作ることは考えることである』，高橋勇夫:翻訳，筑摩書房，544p.
敷田麻実（2009）「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』，9，pp.79-100.
敷田麻実（2005）「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」『江渟の久爾』，（50） pp.74-85.
敷田麻実・森重昌之・影山裕樹:編著（2023）『移動縁が変える地域社会：関係人口を超えて』，水曜社，221p.
シュンペーター，A. ジョセフ（1977）『 経済発展の理論（上）：企業者利潤・資本・信用・利子及び景気の回転に関する一研究（第2版）』，塩野谷祐一・東畑精一・中山伊知郎:翻訳，岩波文庫，362p.
シュッツ，アルフレッド（1991）『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻：社会理論の研究：Collected Papers Ⅱ: Studies in Social Theory』，渡部光・那須 壽・西原和久:翻訳，マルジュ社，397p.
田島康史（2017）「地場産業における閉鎖性とイノベーションの阻害」『兵庫県立大学MBA研究』，7(1)，117-126.
田中輝美（2021）『関係人口の社会学：人口減少時代の地域再生』，大阪大学出版会，386p.
立田慶裕（2012）「書評ジャック・メジロー著『おとなの学びと変容ー変容的学習とは何か』」『日本学習社会学会年報』，8，pp.75-76.
徳田剛（2005）「よそ者概念の問題機制：「専門家のまなざし」と「移民のまなざし」の比較から」『ソシオロジ』,49(3)，pp.3-18.
徳田剛（2020）『よそ者/ストレンジャーの社会学』，晃洋書房，208p.
遠山亮子（2008）「03-場：知を創造するための空間」『ナレッジマネジメント改訂増補版：知を再編する81のキーワード』，北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科 監修，近代科学社，313p.
鶴見和子・川田侃（1989）『内発的発展論』，東京大学出版会，268p.
土田慎一郎（2020）「北海道東川町における移住起業の進展要因：飲食店の移住起業に着目して」『地理学会集』，95(1)，pp.1-12.
若林恵・畑中章宏（2023）『「忘れられた日本人」をひらく：宮本常一と「世間」のデモクラシー』，黒鳥社，208p.

閲覧 URL

Cambridge Dictionary（2025 年 11 月 26 日閲覧）

https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/insularity

東川町ウェブサイト「写真甲子園」（2025 年 11 月 20 日閲覧）

https://higashikawa-town.jp/portal/photo

一般社団法人自治体 DX 推進協議会（2025 年）「令和 6 年度移住・定住施策実態調査」レポート（2025 年 11 月 26 日閲覧）

https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000178.000132312.html

国立社会保障・人口問題研究所（2025）『2023 年社会保障・人口問題基本調査 第 9 回人口移動調査 報告書』（2025 年 11 月 20 日閲覧）

https://www.ipss.go.jp/site-

ad/index_Japanese/ResearchEnterprise/research_area/jinkou/jinkouidou/

高知県移住ポータルサイト（2025 年 11 月 20 日閲覧）

https://kochi-iju.jp/

高知県の推計人口年報 令和５年版（2025 年 11 月 20 日閲覧）

https://www.pref.kochi.lg.jp/doc/t-suikei/file_contents/r05_nennpou.pdf

倉貫眞一郎 note（2020）「人口の半数が「移住者」？ 北海道東川町」,最終更新 2020 年 5 月 4 日. （2025 年 11 月 20 日閲覧）

https://note.com/sinichiro_kuran/n/nba8f384e7743

内閣府『地域課題分析レポート（2024 年秋号）第 1 章（2）人々の地域移動のタイミング』（2025 年 11 月 20 日閲覧）

https://www5.cao.go.jp/j-j/cr/cr24-3/chr24-3_01-02.html

内閣官房，まち・ひと・しごと創生本部事務局（2020）「移住等の増加に向けた広報戦略の立案・実施のための調査事業報告書」（2025 年 11 月 20 日閲覧）

https://www.chisou.go.jp/sousei/pdf/ijuu_chousa_houkokusho_0515.pdf

日本民藝協会ウェブサイト（2025 年 11 月 20 日閲覧）

https://www.nihon-mingeikyoukai.jp/about/

森林サービス産業プロモーション共同企業体「令和元年度森林サービス産業緊急対策事業:新しい日常における森林活用の意向調査」, 林野庁（2025 年 11 月 20 日閲覧）

https://www.rinya.maff.go.jp/j/sanson/kassei/attach/pdf/sangyou-43.pdf

総務省（2024b）住民基本台帳人口移動報告（令和 6 年）（2025 年 11 月 20 日閲覧）

https://www.stat.go.jp/data/idou/2024np/jissu/youyaku/index.html

総務省（2024a）令和 6 年度 地域おこし協力隊の定住状況等に係る調査結果（2025 年 11 月 20 日閲覧）

https://www.soumu.go.jp/chiikiokoshitai/pdf/001003056.pdf

地方創生推進事務局（2024）令和 6 年度 地方自治体における移住定住支援事業の成果報告（2025 年 11 月 20 日閲覧）

https://www.chisou.go.jp/tiiki/kankyo/miraitoshi-seika_r6.html

業績リスト

学術誌掲載論文

[1] 【査読あり】中島修（2023）「移住起業家の地域社会への定着要因――東川町の家具・装備品製造業」『文化経済学』，20（1），pp.23-32.　（調査資料）DOI：https://doi.org/10.11195/jace.20.1_23

第 4 章の事例分析に関連する。東川町の「クラフト街道」周辺地域の地域定着がどのように起こっているのかを探った。東川町には、近年の社会状況の変容が背景にあるとはいえ、地域全体では、農閑期を利用した農家における工芸品製作、ものづくりの系譜が温存・継承されてきたことや、自然の森林資源を活用した産業集積が存在し、それを基礎として 1980 年代の移住起業家による活動が成立したことが明らかになった。東川町には、近年の社会状況の変容が背景にあるとはいえ、地域全体では、農閑期を利用した農家における工芸品製作など、ものづくりの系譜が温存・継承されてきたことや、自然の森林資源を活用した産業集積が存在し、それを基礎として 1980 年代の移住起業家による活動が成立したことが明らかになった。

[2] 【査読あり】Osamu Nakajima（2024）「Migrant Entrepreneurs and Regional Revitalization: A Qualitative Case Study」『International Journal of Service and Knowledge Management』，8（2）　14p.（論文）DOI: https://doi.org/10.52731/ijskm.v8.i2.872

第 2 章の理論的枠組みに関連する。農山村地域に到着して事業を開始する移住者は、移住先に経済的な影響を与え、地域の価値を高める。このような主体を特定するために、本稿では「移住起業家」という概念を提唱する。この「移住起業家」は、地域社会との関係や起業の形態によって多様な意味を持つ。東川町を事例として、地域活性化を担う新たな主体である移住起業家の特徴を明らかにした。

書籍

[3] 中島修（2023）「第 4 章 1.スキルを生かして移住する起業家：北海道東川町」，pp.112-127，敷田麻実・森重昌之・影山裕樹（編著），『移動縁が変える地域社会：関係人口を超えて』水曜社，221p.
https://suiyosha.hondana.jp/book/b635041.html

第 4 章に関連する。事例分析した東川町の移住起業家を取り上げた。本書第 4 章-1 では、特定のスキル（技能）を持つ人々が、新たな展開を求めて移住する「移住起業家」を取り上げた。町による移住促進やプロモーションを推進したことで、同町の町道北 7 線沿いに「クラフト街道」が形成されている。ここに集まってきた木工家具・クラフトの職人たちの移住体験や地域との関係の持ち方を明らかにした。

国際学会口頭発表論文

[4] 【査読あり】Osamu Nakajima and Takaaki Hosoda (2023) 「Classification of "Migrant Entrepreneurs" according to the relationship with the Local Community」, 14th International Congress on Advanced Applied Informatics, 4th International Conference on Decision Science, Theory and Management, 『IIAI Letters on Business Management and Decision Science』Vol.3, 8p. (プロシーディングス), 発表日 2023 年 7 月 9 日, 会場：郡山商工会議所. URL: https://iaiai.org/letters/index.php/lbds/article/view/162/133

第 2 章に関連する。移住起業家を分類するにあたり、本稿では研究者や行政組織、地域などにおいて、一義的には用いられていない「移住起業家」の概念について、移住者の観点、移住、起業する業態や業種との関係を基軸にして分類した。具体的には、個々の移住起業家の状況や地域、及び業態において多義的である「移住起業家」の概念について、「移住」と「起業家」それぞれの語意を再確認し、地域社会との関係性を基軸にして分類することを試みた。

[5] 【査読あり】Osamu Nakajima (2024) 「Migrant Entrepreneur: A Case Study of the "Sakawa Invention Lab"」, 16th International Congress on Advanced Applied Informatics, 5th International Conference on Decision Science, Theory and Management, 『IIAI Letters on Business Management and Decision Science』5, 12p. 発表日 2024 年 7 月 7 日, 会場：サンポートホール高松. DOI: https://doi.org/10.52731/lbds.v004.258

第 5 章に関連する。事例分析にあたり、本稿では独立起業家やライフスタイルの充実を求める人々の行動に焦点を当てた。特に、移住起業を目指し、地域おこし協力隊制度を利用する若者の移住は顕著である。高知県佐川町の「さかわ発明ラボ」の事例から、移住起業家として彼らの地域定住がどのように起こっているのかを検証した。その結果、彼らの地域への定住は、地域住民との教育的取り組みへの参加によってもたらされていることが推察された。

国内学会口頭発表

[6] 【査読なし】中島修 (2022) 「地域おこし協力隊の地域定着：高知県佐川町を事例として」『地域活性学会中国・四国支部第 9 回研究発表』No.6, 発表日 2022 年 12 月 10 日, 会場：叡啓大学. 地域活性学会ウェブサイト https://chiiki-kassei-jk.com/branch/kanto/archives/295

第 5 章に関連する。本稿では高知県佐川町の予備調査報告を行った。多くの農山村地域の人口が減少するなか、佐川町では、林業に関する仕事に従事して移住する者が増えている。彼らは、地域おこし協力隊員として佐川町が推進する「自伐型林業」の普及、あるいは「さかわ発明ラボ」において、木工工作からデジタル工作のサポ

ート、イベント企画、ワークショップ等に取り組んでいる。そして活動の広がりから、地域産材の木材を活用した学びの場を創り、任期終了後に事業を興し、移住起業家として地域に定着する可能性を探っていることが明らかになった。

紀要論文

[7] 【査読あり】中島修（2022）「東川町におけるデザインワークショップの可能性」『東京都立産業技術大学院大学紀要』，16，pp.47-52.
https://aiit.ac.jp/research_collab/research/bulletin/
本稿は、本博士論文で着目した移住起業家の存在を知るきっかけとなったワークショップの記録と考察である。本稿では、東川町の職業教育訓練事業の可能性と有効性を明らかにするため、次のことを検討した。①東川町の教育機関等の現状調査から、中学校卒業後の進路の選択肢が限られていることを指摘し、学校教育と地域での就業機会の乖離という問題点を明らかにした。②筆者らが実践した東川町における試行的な 3 回のデザインワークショップで得た知見から新しい事業モデルを示した。③事業モデルの職業教育訓練的意義は、ものづくりに対する基本的理解、地域の人々の生活のための学びの場であり、社会貢献モデルであることを確認した。④事業モデルの持続可能性がクチコミと信頼から成り、緩やかなコミュニティの存在が将来の地域形成に寄与する可能性がある。

その他（講演）

[8] 中島修（2024）「ものづくりと地域づくり：移動前提社会における移住起業家」，令和６年度前橋市公開講座，会場：前橋工科大学，開催予定日 2024 年 11 月 27 日.
https://www.maebashi-it.ac.jp/regional/info/event/post_191.html#gsc.tab=0

[9] 中島修・敷田麻実・森重昌之・鈴木秀一・滝本宣博・工藤豪・古川舞「移動前提社会における新しい移動論：東川町の移住起業家のこれまでとこれから」（2024）『第 7 回移動縁を考える会』，東川町文化交流施設せんとぴゅあ Ⅰ 講堂&オンライン，2024.12.05. パネリストとして登壇. 東川町役場 HP https://higashikawa-town.jp/portal/top/information/960

[10] 中島修・敷田麻実・馬場武・清野和彦・齋藤光・松田夕輝（2025）「地域の自然の中での移動縁：ライフスタイル移住から移住起業家へ」『第 9 回移動縁を考える会』オンライン開催，2025.07.11. モデレーターとして登壇. 申し込みサイト https://forms.gle/ZHmjw88tmNzhqtwn8

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの皆様より温かいご支援とご指導を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

本研究を進めるにあたり、白肌邦生先生から論文作成の事項から内容・構成にわたって、親身なご指導を賜りました。敷田麻実先生からは研究方針、研究者としての姿勢のご教示を含めてご支援いただきました。

学位論文審査にあたり、貴重なお時間を割いていただき、ご指導、ご助言をいただきました北陸先端科学技術大学院大学 由井薗隆也先生、島田淳一先生、郷右近英臣先生、香川大学 西中美和先生に心よりお礼を申し上げます。

副指導教員の伊藤泰信先生、副テーマ論文の外部指導教員をお引き受けいただいた関東学院大学名誉教授 関和明先生に感謝申し上げます。そして JAIST に所属する研究員の皆様、学生の皆様からもアドバイスを数多くいただきました。

また調査にご協力いただきました、東川町の皆様、佐川町の皆様をはじめ、調査にご協力いただいた東川町役場、佐川町町役場の皆様には大変お世話になりました。

本研究を進めるにあたり、多くの方々のご支援、ご協力をいただきましたこと、重ねて御礼申し上げます。